

# 加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・IV

－中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う－

2005年3月

大阪府教育委員会





アカハゲ古墳全景（南より）



アカハゲ古墳全景（南西より）

## はじめに

葛城山地の西麓には、白木・中村、持尾、一のはげの3つの山塊が前山となって南から北へと連なっています。これらの山塊とその間を流れる小渓谷の流域には、古くから人間の生活の活動を物語る痕跡が大地に刻み込まれてきました。とりわけ一のはげ山塊の南裾には飛鳥時代に、北方の「王陵の谷」に所在する天皇陵に準じるほどの規模をもつ大型古墳が築かれたことが、ここ数年の調査で明らかになってきています。

今回報告するアカハゲ古墳もそのひとつで、昭和40年に石室内部が調査され、この時代を特徴づける石室の構造や漆塗籠棺、ガラス製扁平管玉、褐釉円面鏡などが出土し、学術的にも非常に高く評価されてきました。しかし今回、平石谷のば場整備事業に伴って周辺の発掘調査が行われた結果、従来知られていなかった古墳の外部の様子が判明し、その規模は平成13年に調査されたシショツカ古墳を上回るという結果が得られました。このような古墳が平石谷に相次いで築かれていたことは、この地が単に有力者の奥津城であったというにとどまらず、国の成り立ちの経緯を探る上でも大変貴重な記念物であるといわざるを得ません。本書は、その調査結果の概要を報告するものです。

本課としましては、この地区の整備事業について関係機関と十分に調整を図りつつ、文化財の保護に努めていきたいと思っています。今後もこれまで以上に地元の方々や広く府民の皆様にご協力をよろしくお願い申し上げます。

今回の発掘調査の実施にご協力いただきました平石地区をはじめとする地元の皆様ならびに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 向井 正博

## 例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業「南河内ごせ地区」に伴う、南河内郡河南町所在加納古墳群・平石古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会が実施した。
3. 調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師枡本哲を担当者として、平成15年7月より平成16年3月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ技師林日佐子、藤田道子を担当者として、平成17年3月まで行った。
4. 本書に使用した国土座標は、国土座標第VI系に基づき、括弧内には世界標準座標の数値を書き加えた。方位は座標北、標高はT.P.で示している。特に必要な場合は磁北の表示を加えている。
5. 航空写真は、株式会社国土開発センターに委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 遺構・遺物の写真撮影を（有）阿南写真工房に委託して実施した。
7. 調査と遺物整理にあたり、下記の機関および方々から格別のご協力とご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます（団体五十音順・団体内五十音順・敬称略）。  
白石太一郎、上林史郎、岡本敏行、山木彰（大阪府立近つ飛鳥博物館）、木下光弘（河南町給食センター）、赤井毅彦（河南町教育委員会）、太田宏明（河内長野市教育委員会）、片本憲一（河内長野市立西中学校）、上原真人、吉井秀夫（京都大学）、猪熊兼勝（京都橘女子大学）、北野耕平（神戸商船大学名誉教授）、堀田啓一（高野山大学）、森村健一（堺市教育委員会）、上野勝巳（太子町立竹内街道資料館）、木場弘幸（高取町教育委員会）、置田雅昭（大理大学）、奥田尚（奈良県立橿原考古学研究所）、広瀬和雄（奈良女子大学）、西山要一、水野正好（奈良大学）、石野博信、下大迫幹洋（二上山博物館）、西谷安一（平石地区委員長）、畠信次（福山市教育委員会）。
8. 発掘調査および遺物整理・調査概要の作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
9. 本書は、枡本が執筆、編集し、第3章第2節を調査補助員庵ノ前智博が執筆した。第4章については、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏から、第5章については天理大学教授置田雅昭氏より玉稿を賜った。
10. 本概要は、300部作成し、一部あたりの単価は2,379円である。

## 目 次

はじめに

例言

第1章 調査の経緯と方法	1頁
第2章 アカハゲ古墳の調査の概要（第1・3・5調査区）	
第1節 調査前の地形	8頁
第2節 墳丘	13頁
第3節 外部施設	37頁
第4節 排水施設	39頁
第5節 その他の遺構	45頁
第6節 石室の現状	48頁
第7節 出土遺物	51頁
第3章 その他の調査区の概要	
第1節 古墳周辺の調査（第2・4・6・8調査区）	55頁
第2節 河川蛇行部の調査（第7調査区）	57頁
第4章 アカハゲ古墳の貼石・敷石の石種とその採石地	81頁
第5章 アカハゲ古墳の物理探査	85頁
第6章 まとめ	92頁
遺物観察表	95頁

## 挿 図 目 次

第1図 平石谷古墳分布図	第18図 墳丘第2段南辺東半部貼石平面・立面図
第2図 周辺の古墳分布図	第19図 墳丘第2段東辺貼石および第1段東辺敷石平面・立面・断面図
第3図 南河内こごせ地区事業位置図	第20図 墳丘第2段西辺敷石および第3段西辺貼石・敷石平面・立面図
第4図 平成12~15年度調査区位置関係図	第21図 墳南辺盛土断面図
第5図 平成15年度調査区位置図	第22図 排水施設1断面図
第6図 調査区と地籍の位置関係図	第23図 排水施設1・2平面・断面図
第7図 アカハゲ古墳調査前の地形図	第24図 排水施設5平面・立面・断面図
第8図 アカハゲ古墳全体図	第25図 排水施設4・6平面・立面・断面図
第9図 第3調査区断面観察位置図	第26図 第3調査区小上坑および同南トレーン検出遺構平面・断面図
第10図 第3調査区断面図	第27図 流水跡断面図
第11図 第1・3・5・調査区断面図	第28図 アカハゲ古墳石室現状図
第12図 墳丘盛土断面図	第29図 第2・3・6調査区出土遺物
第13図 アカハゲ古墳微細図位置図	第30図 アカハゲ古墳墳丘第2段南辺貼石覆土出土遺物
第14図 墳丘第1段南辺東半部および東辺貼石平面・立面図	第31図 第2・4・8調査区断面図
第15図 墳丘第1段西辺および第2段南辺西半部貼石平面・立面図	第32図 第6調査区断面図
第16図 墳丘第1段南辺西半部貼石平面・立面図	第33図 第7調査区剖面図
第17図 墳丘第2段西辺貼石および第1段西辺敷石平面・立面図	

第34図	第7調査区断面図
第35図	第7調査区検出遺構全体図
第36図	掘立柱建物平面・断面図
第37図	土坑・ピット列平面・断面図
第38図	土坑1・2平面・断面図
第39図	土坑・溝断面図、井戸平面・断面図
第40図	第7調査区ピット・上坑1出土土器
第41図	第7調査区土坑2出土土器(1)
第42図	第7調査区土坑2出土土器(2)
第43図	第7調査区包含層出土土器(1)
第44図	第7調査区包含層出土土器(2)
第45図	第7調査区包含層出土土器(3)
第46図	第7調査区包含層出土土器(4)
第47図	第7調査区包含層出土土器(5)
第48図	地中電気探査位置
第49図	埴丘のレーダ探査全体平面図と地区名
第50図	レーダ探査断面図(1)
第51図	レーダ探査断面図(2)

## 表 目 次

表1	アカハゲ古墳の石材の使用位置と石種構成
表2	アカハゲ古墳レーダ探査地区別測線距離
表3	レーダ探査の異常地点と発掘結果との照合

## 卷頭写真図版目次

アカハゲ古墳全景(南より)

アカハゲ古墳全景(南西より)

## 写真図版目次

図版1	アカハゲ古墳調査前全景
図版2	アカハゲ古墳全景(1)
図版3	アカハゲ古墳全景(2)
図版4	アカハゲ古墳全景(3)
図版5	アカハゲ古墳全景(4)
図版6	アカハゲ古墳全景(5)
図版7	アカハゲ古墳全景(6)
図版8	アカハゲ古墳全景(7)
図版9	アカハゲ古墳埋盛土断面
図版10	アカハゲ古墳埴丘盛土断面(1)
図版11	アカハゲ古墳埴丘盛土断面(2)
図版12	アカハゲ古墳埴丘盛土断面(3)
図版13	アカハゲ古墳埴丘盛土断面(4)
図版14	アカハゲ古墳貼石(1)
図版15	アカハゲ古墳貼石(2)
図版16	アカハゲ古墳貼石(3)
図版17	アカハゲ古墳貼石(4)
図版18	アカハゲ古墳貼石・敷石(1)
図版19	アカハゲ古墳貼石・敷石(2)
図版20	アカハゲ古墳貼石・敷石(3)
図版21	アカハゲ古墳貼石変色部分
図版22	アカハゲ古墳埴丘盛土断面
図版23	アカハゲ古墳排水施設1
図版24	アカハゲ古墳排水施設2
図版25	アカハゲ古墳排水施設3
図版26	アカハゲ古墳排水施設4・6
図版27	アカハゲ古墳排水施設5(1)
図版28	アカハゲ古墳排水施設5(2)
図版29	アカハゲ古墳埴上面土坑・貼石抜き取り穴
図版30	アカハゲ古墳第1段上面ピット・貼石覆土遺物出土状態
図版31	アカハゲ古墳埴上面流水跡(1)
図版32	アカハゲ古墳埴上面流水跡(2)
図版33	アカハゲ古墳縦原右出土状況
図版34	第3調査区西端部
図版35	第3調査区南トレンチ検出ピット
図版36	第3・5・6調査区断面
図版37	第7調査区全景
図版38	第7調査区断面
図版39	第7調査区遺構
図版40	出土遺物(1)
図版41	出土遺物(2)
図版42	出土遺物(3)
図版43	出土遺物(4)
図版44	探査作業風景

## 第1章 調査の経緯と方法（第1～5図）

中山間地域総合整備事業は、農作業の省力化・効力化を図り、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開に寄与することを目的として実施されている。「南河内ごごせ地区」にあたる平石谷一帯では、この事業に伴い、大阪府教育委員会文化財保護課が環境農林水産部からの依頼を受けて、平成11年度より発掘調査を実施している。過去5年間に調査されたデータから、当該地の埋蔵文化財の有無や粗密、残存程度をより正確に把握できるようになりつつある。しかしこの整備事業に伴う一連の調査を別にしても、平石谷一帯は古くから地元の史家や考古学研究者に注目され、一部は発掘調査も実施され、この地区的土地利用の歴史に光明を投じる努力がなされてきたことを忘れてはならない。特に昭和40年（1965）と昭和54年（1979）に行われたアカハゲ・ツカマリ両古墳の調査成果は学界に広く知られ、現在東京国立博物館に展示されている出土品を含めて、その学術的価値は非常に高く評価されている。本府教育委員会の調査はこのような先駆によって得られた成果を基礎として実施してきたことはいうまでもない。平成12年度の加納古墳群、平成13年度のシヨツカ古墳、平成14年度の鶴田古墳そして本報告のアカハゲ古墳の現地調査はいずれもそのような成果に導かれて実施したものである。これまで調査された古墳のうち、加納古墳群では2号墳、シヨツカ古墳、鶴田古墳がいずれも新闢場の地下に埋没保存されている。またアカハゲ古墳も調査前の棚田の状態に復し、新しい闢場の地下に保存されることになっている。

今回は、アカハゲ古墳とその近接地を中心とする部分（第1～5・8調査区）、河川改修によって東西方向に直線的に切り通される蛇行部分（第7調査区）の2地点が主な調査対象である。調査総面積は最終的に5192m<sup>2</sup>となった。アカハゲ古墳本体部にあたる第3調査区は、既往の調査によって現状の棚田が墳形を反映する可能性が高い点を重視して設定した。第1・5調査区は古墳本体が東西から谷地形で挟まれている状況から、墳丘との関連性を把握するために設定した。第2・4・8調査区と第3調査区南トレンチ部は古墳前面に南側へ張り出す尾根上の平坦地の状況を掴むために設定した。第7調査区は新河岸建設の用地確保によって完全に消滅する部分の埋蔵文化財を調べるために設定している。

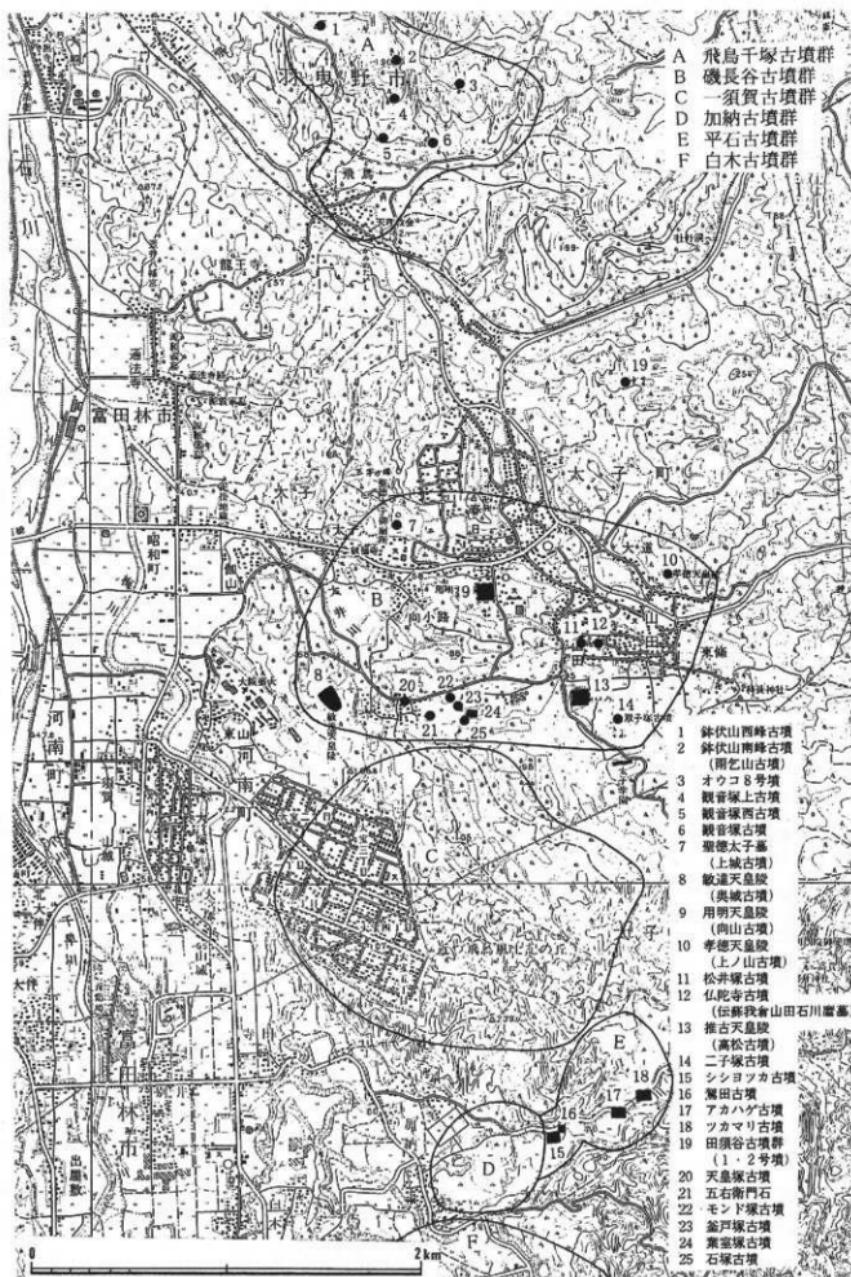
第3調査区の古墳本体部の調査は、昭和40年（1965）に実施された実測図と現状の石室の残存状態を勘案し、現状の奥壁面を「0」として南北中軸線を引き出し、これに直交する東西線を得て、全体にメッシュを張り巡らし、調査の便に供した。中軸線を基準に東側の南北線をE1,E2,E3…、西側のそれをW1,W2,W3,…と呼び、東西線は奥壁「0」とした関係上南側の東西線のみとなるから、北から南へS1,S2,S3,…と呼ぶこととした。文中の位置関係の細部はすべてこの東西・南北線の呼称を組み合わせて記述する。

なお、墳丘築成に用いられた石材について調査をおこなっていただいた権原考古学研究所共同

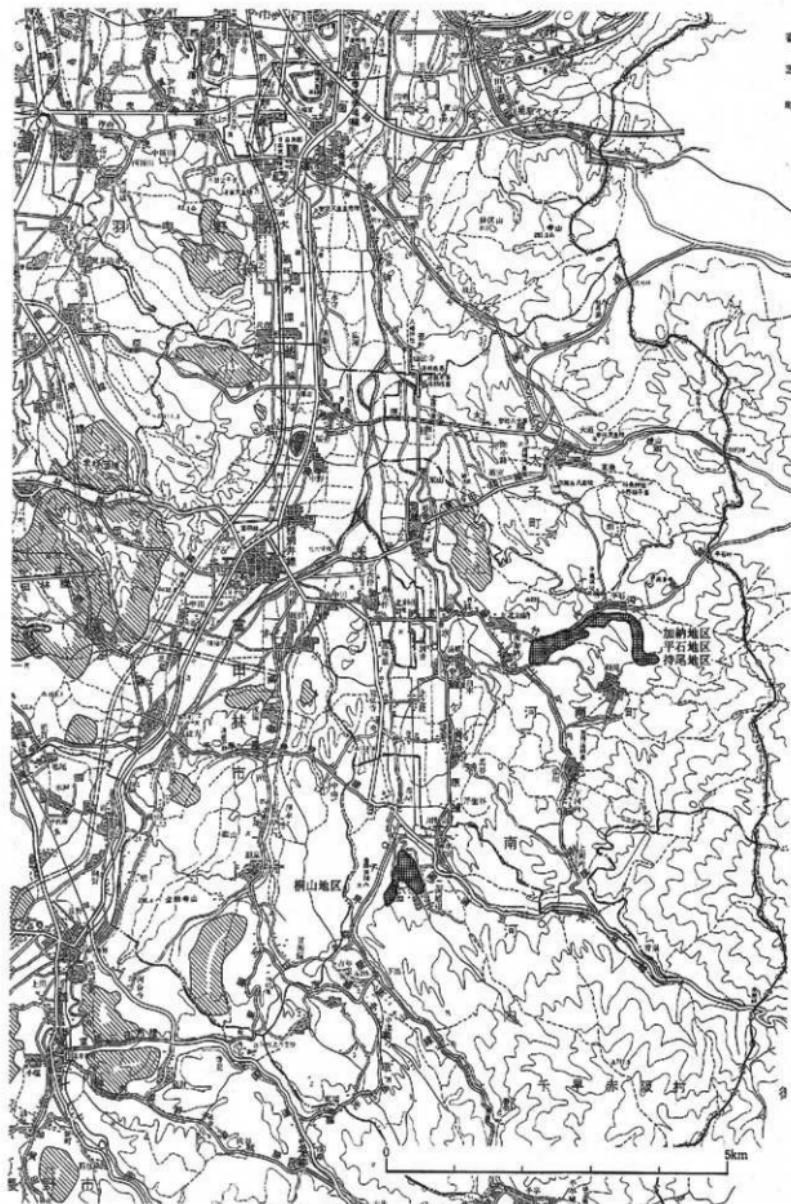


第1図 平石谷古墳分布図

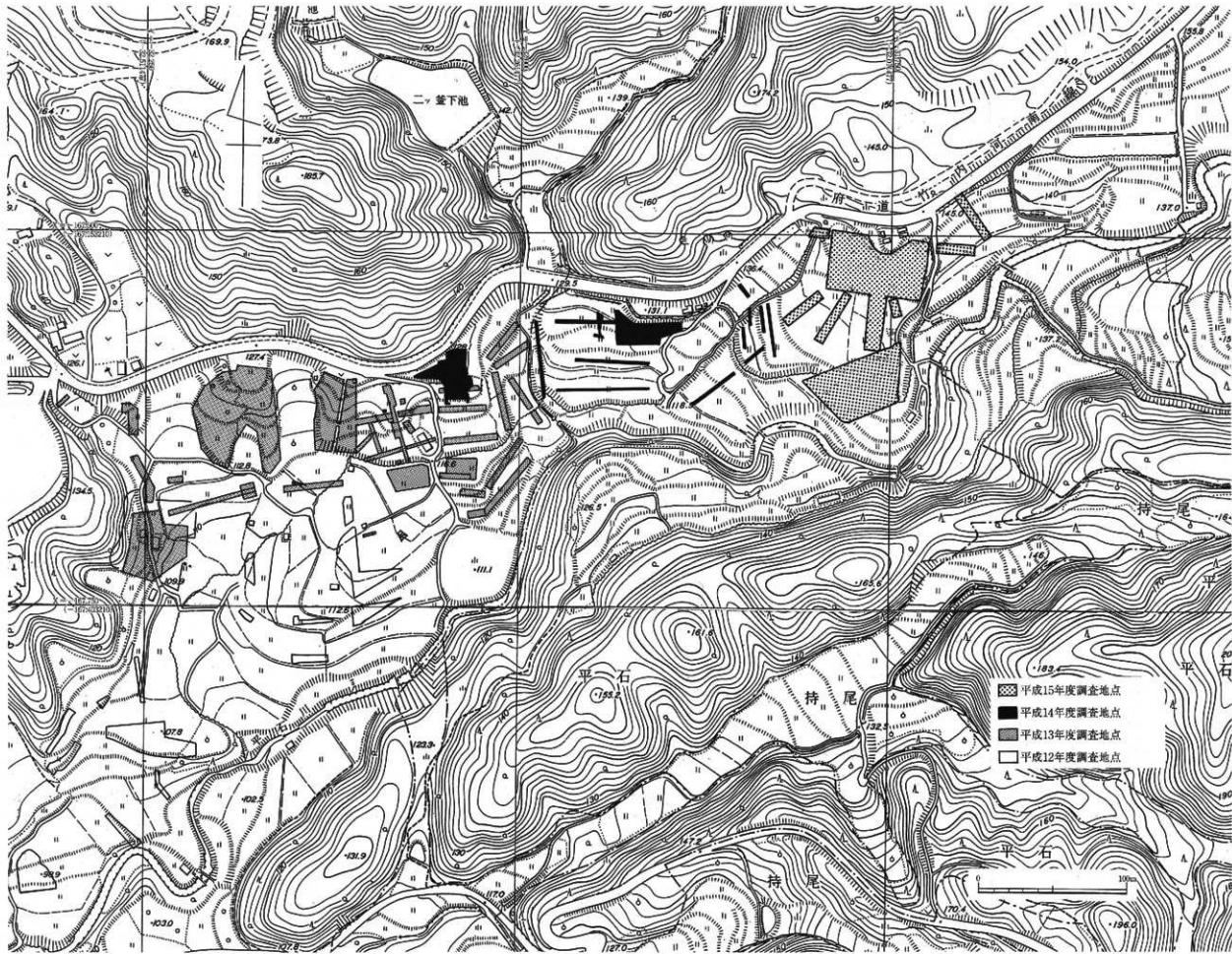
- |               |                      |
|---------------|----------------------|
| 1 加納古墳群1号墳    | 9 同大原古墳              |
| 2 同2号墳        | 10 同大原2号墳            |
| 3 同5号墳        | 11 同バチ川古墳            |
| 4 同6号墳        | 12 同バチ川2号墳           |
| 5 同7号墳        | 13~16 同ツカマリ北古墳他      |
| 6 平石古墳群シヨツカ古墳 | 17~19 一須賀古墳群P支群2~4号墳 |
| 7 同アカハゲ古墳     | 20~23 同M支群2~5号墳      |
| 8 同ツカマリ古墳     | 24 駕田古墳              |



第2図 周辺の古墳分布図

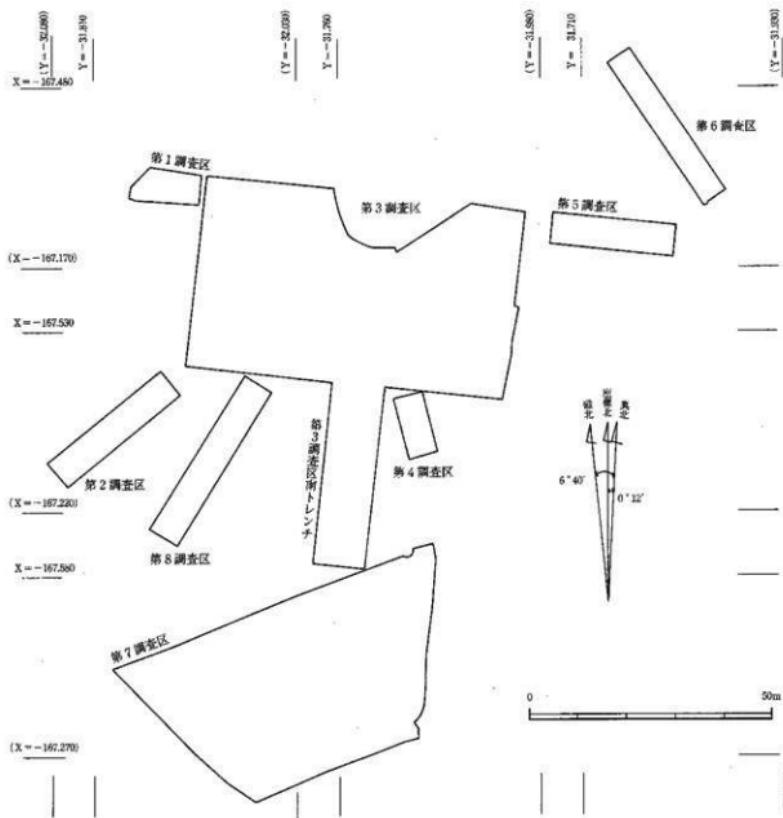


第3図 南河内こごせ地区事業位置図



第4図 平成12～15年度調査区位置関係図

研究員奥田尚氏、墳丘・壇の地下の状態について電気、レーダ探査を実施していただいた天理大学教授置田雅昭氏並びに同大学生の皆様には心より御礼申し上げます。それらの調査結果は第4・5章に掲載させていただいた。調査期間中は平石地区区長西谷安一氏をはじめとする地元の多くの方々にご協力ご助言を賜った。なお平成15年2月28日（土）に午前11時より午後3時まで現地を一般に公開し、午前・午後2回にわたって調査結果を説明した。約750人の見学者があった。この現地説明会では昭和40年（1965）にアカハゲ古墳、昭和54年（1979）にツカマリ古墳の石室内部を調査された神戸商船大学名誉教授北野耕平先生による、両古墳の調査成果についての説明もあった。このことをご快諾いただいた北野耕平先生に心より感謝申し上げます。



第5図 平成15年度調査区位置図

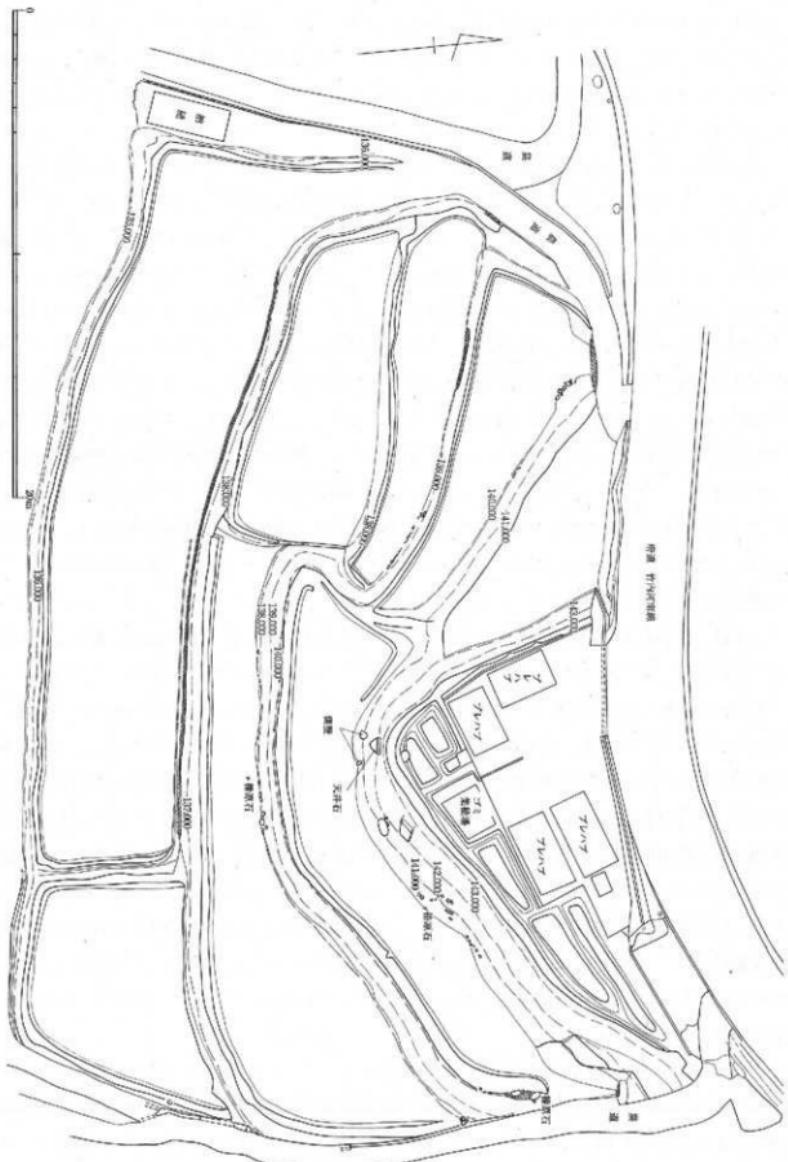
## 第2章 アカハゲ古墳の調査概要（第1・3・5調査区）

## 第1節 調査前の地形（第6、7図）

アカハゲ古墳の墳頂南縁に立つと、南西方向に平石谷開口部への展望が拡がる。そしてこの開口部を塞ぐように後方に嵐山が聳え、その前面には石川を挟んで富田林方面の平野部が展開する。一方、平石谷開口部（T.P.102m）に立って谷の内奥を望むと、このアカハゲ古墳の南西側の輪



第6図 調査区と地籍の位置関係図



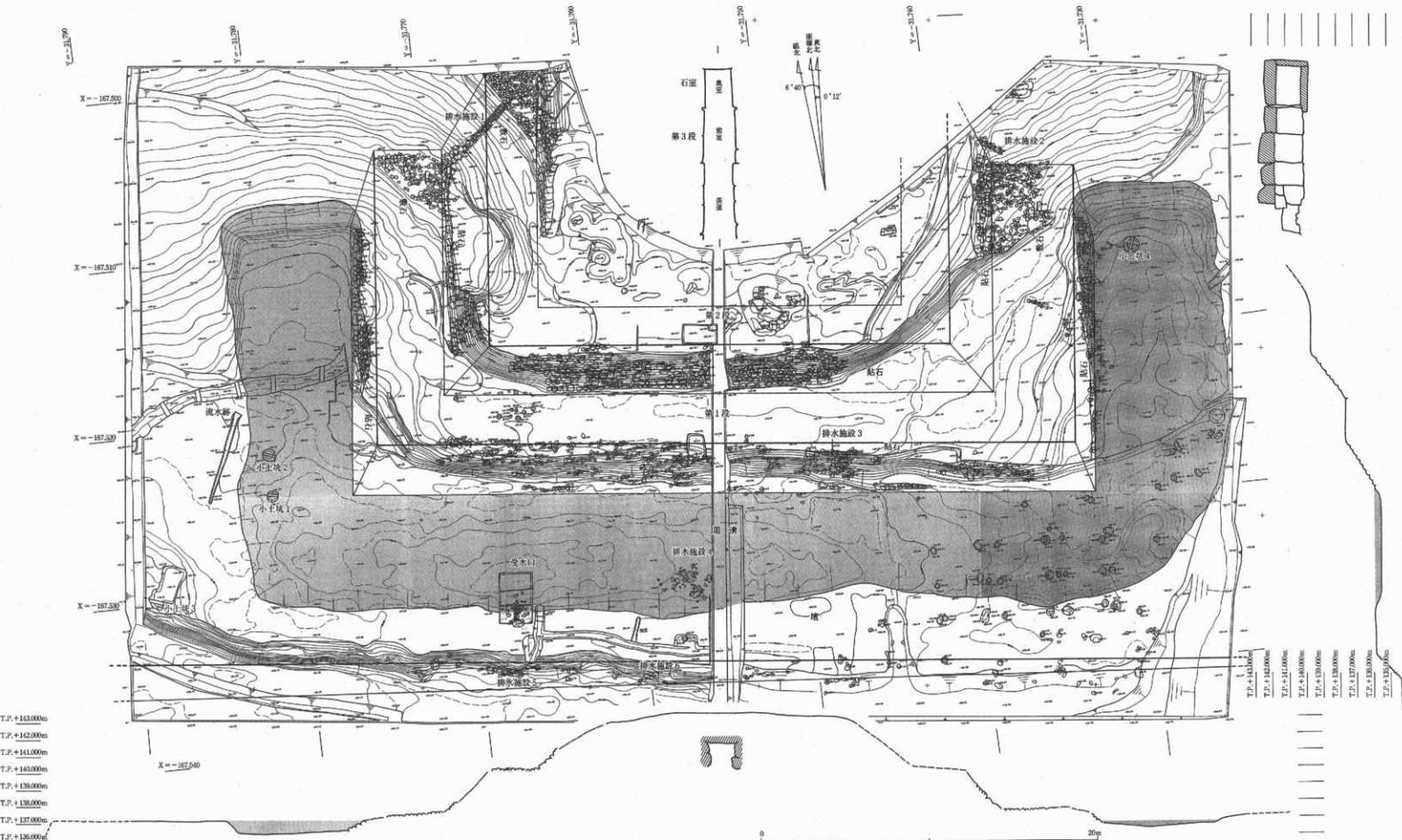
第7図 アカハゲ古墳調査前の地形図

郭がまず目に飛び込んでくる。かりに谷伝いに葛城山西麓へ至る古代の往来を想定すると、南に突出する平石谷右岸の数カ所の段丘は、山塊から谷水に下る景観に変化を与え、視覚的効果をもたらす格好の地形を提供している。そこに仰ぎ見るような古墳を築くのは、自然景観を巧みに取り込もうとする造形意識が働けば、自然なりゆきであろう。アカハゲ古墳はその最も顯著な地点を占めている。

アカハゲ古墳一帯の現状は棚田であり、石室開口部前は疎らに果樹の植え込みがある平坦な畑地である。墳頂はT.P.143.4mの平坦なコンクリート敷き民有地350m<sup>2</sup>で、3×5mのプレハブ物置2棟、同3×6.5m 2棟が配置され、その南は墳頂縁辺に沿って栗の木を植えた畠となっている。北側は府道竹内河南線が南に張り出すカーブにあたる。この府道を越えた北側は昭和39年（1964）の宅地造成によって破壊され、現在は造成頓挫した放置状態になっているが、本来はT.P.221.2mの山頂から南西に下る舌状の山塊が屹立していた。墳頂はその先端にあたる。したがってアカハゲ古墳の占地には、平成13年度に調査されたシショツカ古墳でみられた山頂から南下する尾根の稜線の下降ラインを意識したような造営プランを再確認できる。ここをほぼ中心として、東西両側で谷地に下る軽い脊梁が南に延びている。古墳は、その間約80mの東西に拡がる空間で尾根の比較的安定した張り出し部を占め、比高差9m以上、棚田にして5~6段に整えられた斜面に築かれている。平石谷ではこのような安定した小地形は無駄なく棚田として利用されるのが一般的であり、後述するように壇上にさらに3段の墳丘を築いた本墳のような方墳であれば、棚田としての再利用になおさら好都合であったろう。

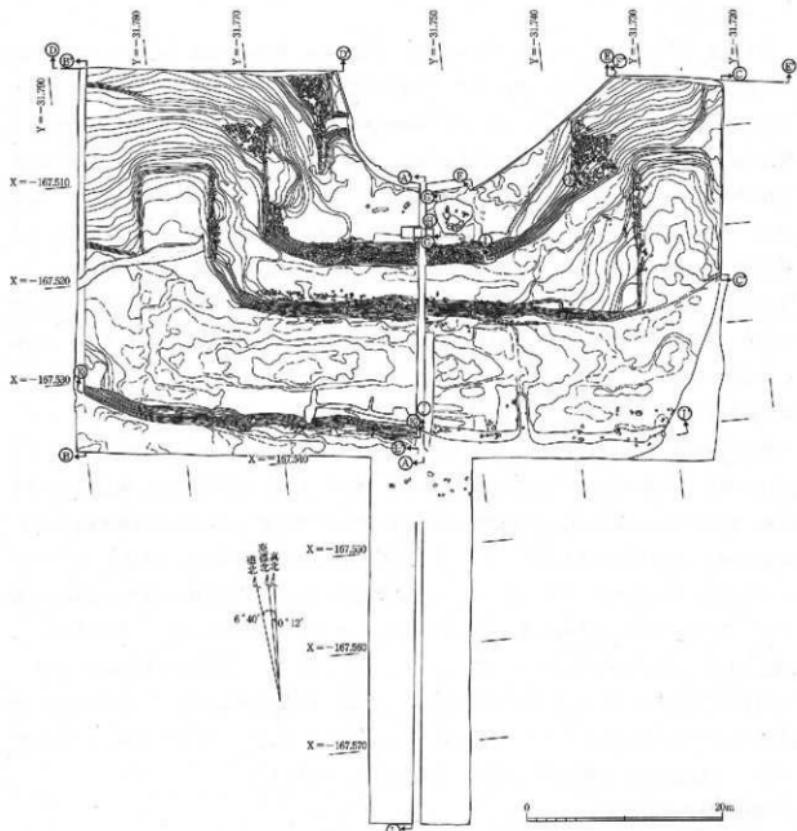
石室は、閉塞石上に被る表土と一部前端が露出する天井石との間、高さ0.35m、幅1.20mをして開口した状態である。地元の方々によると1940年代には石室の天井石が露呈していた状況で、それ以後当該地が物置場として利用され始めた頃、府道レベルと合わせるため天井石の上に盛土をしたという。そうであれば現在石室を覆う盛土は必ずしも本来の墳丘を反映するものではない。平面的にみると西辺は比較的直線的に南に突出するのに対し、東辺は北東~南西の不明瞭な斜辺となっているのもそのためである。地籍図では墳丘部にあたる棚田に「赤几（=禿）、その南の東西に長い棚田に「塚廻り」の字名がみえ、古墳の範囲をうかがわせる。「アカハゲ」とは墳丘盛土が露呈して、赤土が見えていた状況を指しているとも考えられる。この範囲では棚田の縁に集められた砾の中に、榛原石の破片が混じっている個所があり、それを採取するだけでもコンテナ数箱になった。この種の石は平石谷の飛鳥時代の古墳に用いられる特徴的な石材であることが知られている。おそらく古墳が開墾に伴って搅乱され、農作業の妨げになった結果各所に集められたのであろう。

墳丘の南の古墳の壇に相当する棚田は他の部分に較べて、水はけが悪く、秋の収穫期を迎える水を流さなくなってしまって、常に湿地のような状態であった。このことは農業用水には必ずしも関係なく、東西を谷で画されたアカハゲ古墳の範囲の地下水の浸透による可能性が高く、この水仕舞いが古墳築造にあたっても課題のひとつであったにちがいない。



第8図 アカハゲ古墳全体図

平成11年度に実施した平石谷一帯の試掘調査では、アカハゲ古墳周辺に12個所の試掘坑を設定して古墳の形状、範囲、残存状態の把握に努めた。石室開口部の墳丘周辺では傾斜面や石の集中する個所を認めたが、それより低い棚田では一部に石の集中するところがあり、古墳の外部施設の可能性は高まった。ただ墳丘の西辺に設定した試掘坑で南北方向の直線的な地形変換ラインを認めたので、従来想定されてきた円墳のイメージは薄らいだ。しかしそれでも古墳の範囲は、後世の墳丘盛土の形状に目を奪われたことも相俟って、石室開口部のある墳丘を中心とする径10m程度の円墳以上の規模を想定する根拠は得られなかった。調査担当者として、棚田に反映される方形墳の姿を積極的に想定できるようになるのは、やはり平成13年度のシショツカ古墳の調査以後のことである。



第9図 第3調査区断面図観察位置図

## 第2節 墳丘

### 1) 墳丘の形状と規模（第8～12図）

墳丘は3段築成で、形状は横長の方墳を企画している。この墳丘がその南に前もって築かれた壇の上に積み上げられるので、一見すれば4段築成にも見える。壇上面（T.P.135.9～136.3m）と現状墳頂（T.P.143.4m）との比高差は7.1～7.5mを測る。墳丘の搅乱は各所に及び、各段のコーナー部分を中心として、当初の輪郭はかなり損なわれていた。最も損壊が激しいのは、3段目の南側から東側にかけてである。この個所は昭和40年（1965）の調査以後も開墾が行われ、石室構築石材の一部が3×4m、深さ1.5m以上の不定形に掘り込まれた穴に、廃材や黒色のビニールゴミ袋の破片と紛れて投棄されていた。しかし、東西・南北の辺を留めるところを結んで辺長は復原でき、そのラインは墳丘に石を貼る際用いられた黒褐色の粘土の残る部分をたどって得られるラインとも合致した。

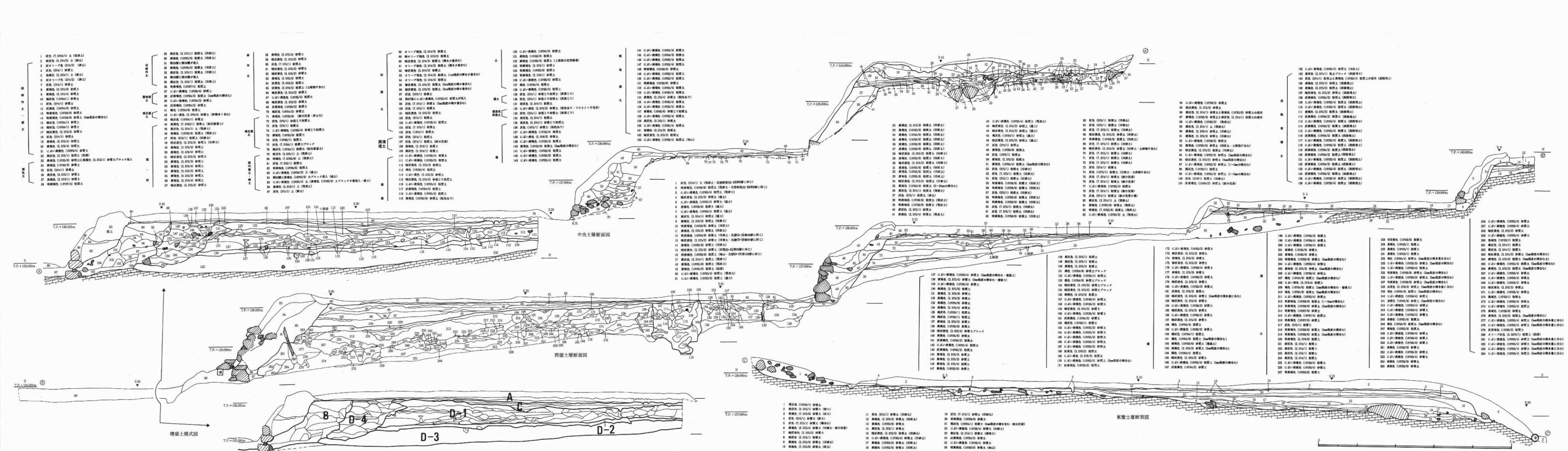
まず東西辺長をみていくと、第1段上場41.7m、下場44.4m、第2段上場27.5m、下場32.8m、第3段下場21.7mを得る。南北辺長は南から北へほぼ水平に延長したラインが尾根の斜面にあたるところで終えており、数値は一定していない。第1段西辺では上場17.5m、下場16.0m、東辺では上場16.6m、下場15.0m、第2段西辺では上場16.5m、下場14.6m、東辺では上場11.6m、下場13.5m、第3段西辺では下場14.4m以上、東辺は調査区内では完全に失われて不明であるが、かろうじて残った土色の変化からすると下場7.0m以上となる。得られた数値を比較すると、東西辺長では第1段から第3段への縮小率は66～74%である。南北辺長は第1段では東側が長く西側が短く、上場と下場は0.9～1.0mの差があり、第2段上場下場では1.1mの差がある。当然、この差は、尾根の張り出し具合が東と西では異なる地形的制約に起因している。しかし1.0m内外の差はその地形を一定のプランに取り込もうとする強い企画性がなくては生じ得ない差と考えたい。第3段は北端が調査区外に及び、下場の長さ14.4m以上というしかない。

墳丘第1段裾から現状の墳頂までの高さは、南辺中央で7.4m、東辺中央で6.6m、西辺中央で6.8mを測る。各段の高さは、第1段は南辺で1.6m、東辺で1.1m、西辺で1.5m、第2段は南辺で1.8m、東辺で1.3m、西辺で1.3m、第3段は現墳頂から西辺の貼石裾レベルとの比高差3.4mとなり、第3段は第1、2段の2倍程度の高さとなる。東に高く西に低い緩やかな斜面地で東西のバランスをとって墳丘が構築されていることは、東西周溝の底面レベルのわずかな比高差0.2～0.3mにも現れている。段の傾斜角を貼石の残るところでみると、第1段南側では40～42°、東側では43°、西側では35°、第2段南側では32°、東側では44°、西側では42～43°、第3段西側では45°を測る。

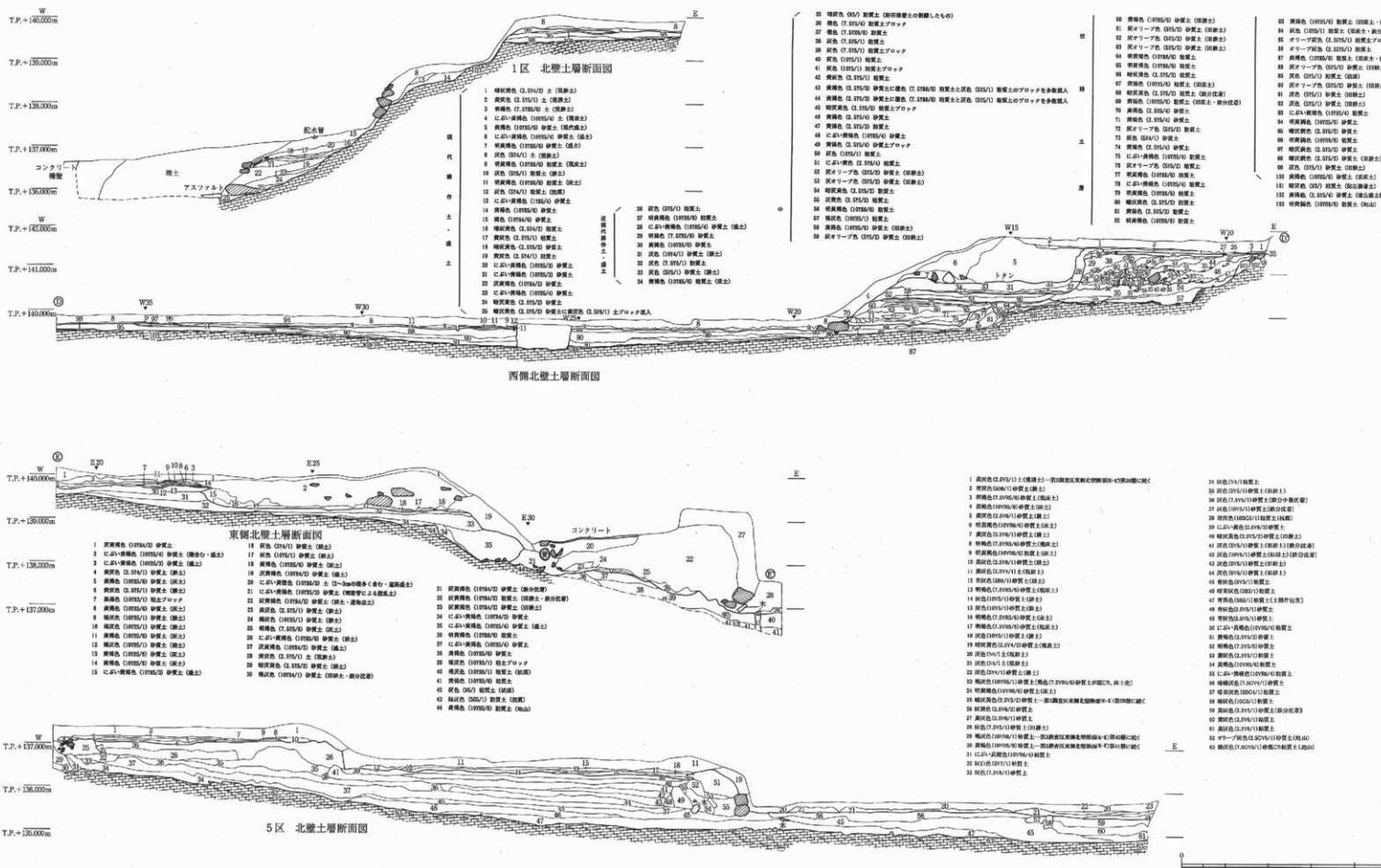
各段の上面はテラスとなる。第1段では南側幅4.0m、東側と西側では削られてはいるが、段斜面の傾斜角との関連から、それぞれ幅4.8m、4.3mとなる。第2段のテラスでは同じように計測すると、南側幅2.3m、西側幅3.1mを得る。東側は2.9mと復原される。

### 2) 墳丘の構造（第12図）

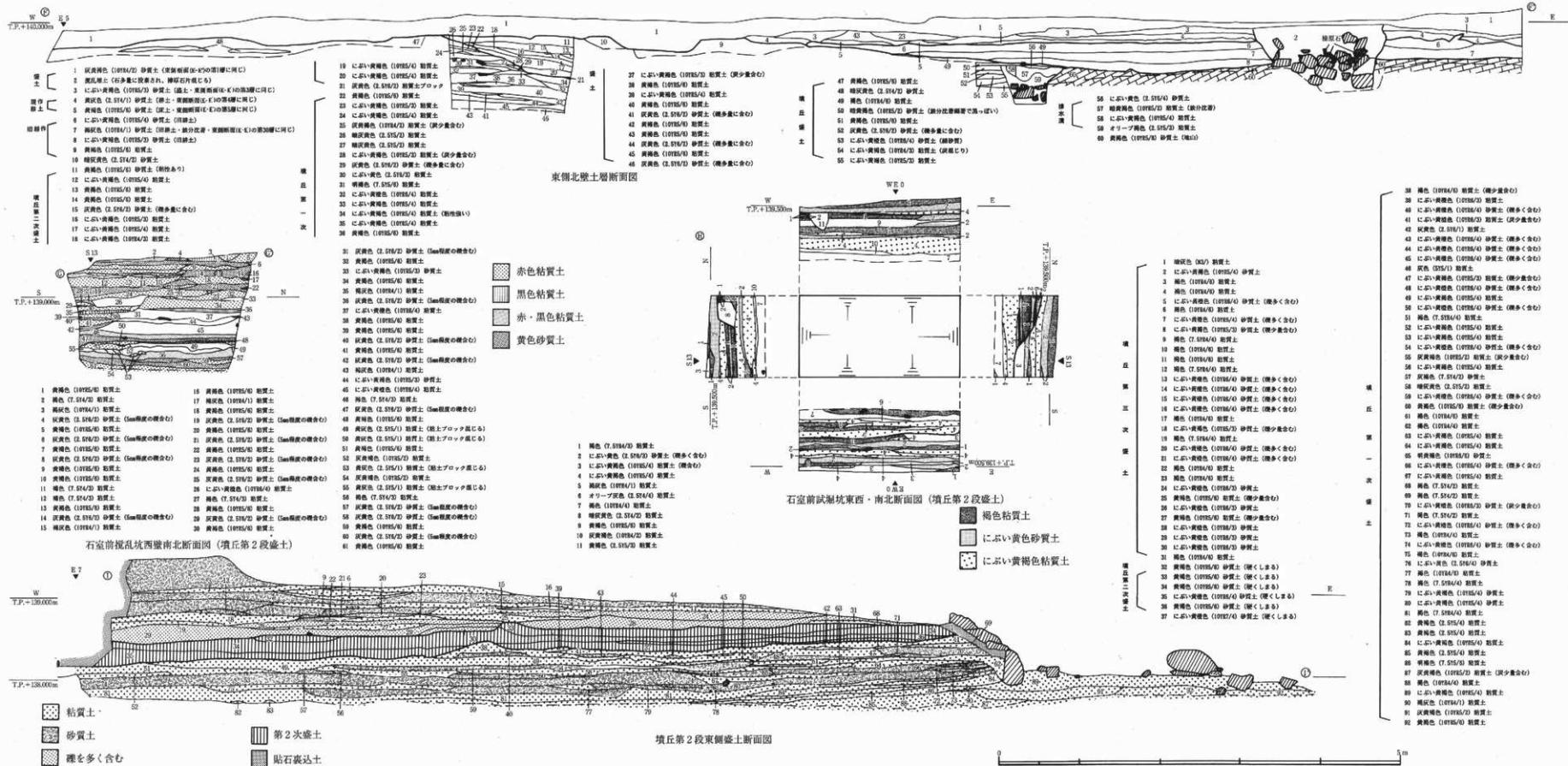
開墾により損なわれ、貼石下の盛土が露呈した部分や、搅乱坑を利用した最小限度の狭小な補



第10図 第3調査区断面図



第11図 第1・3・5調査区断面図

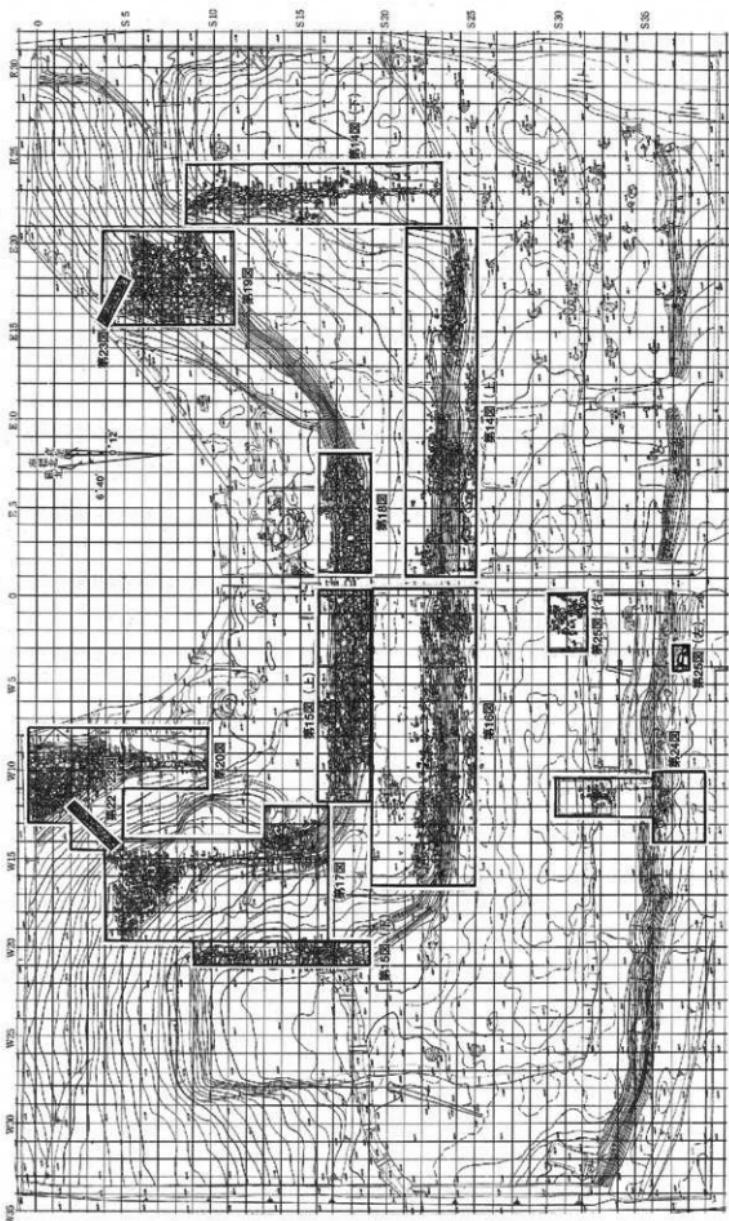


第12図 増丘盛土断面図

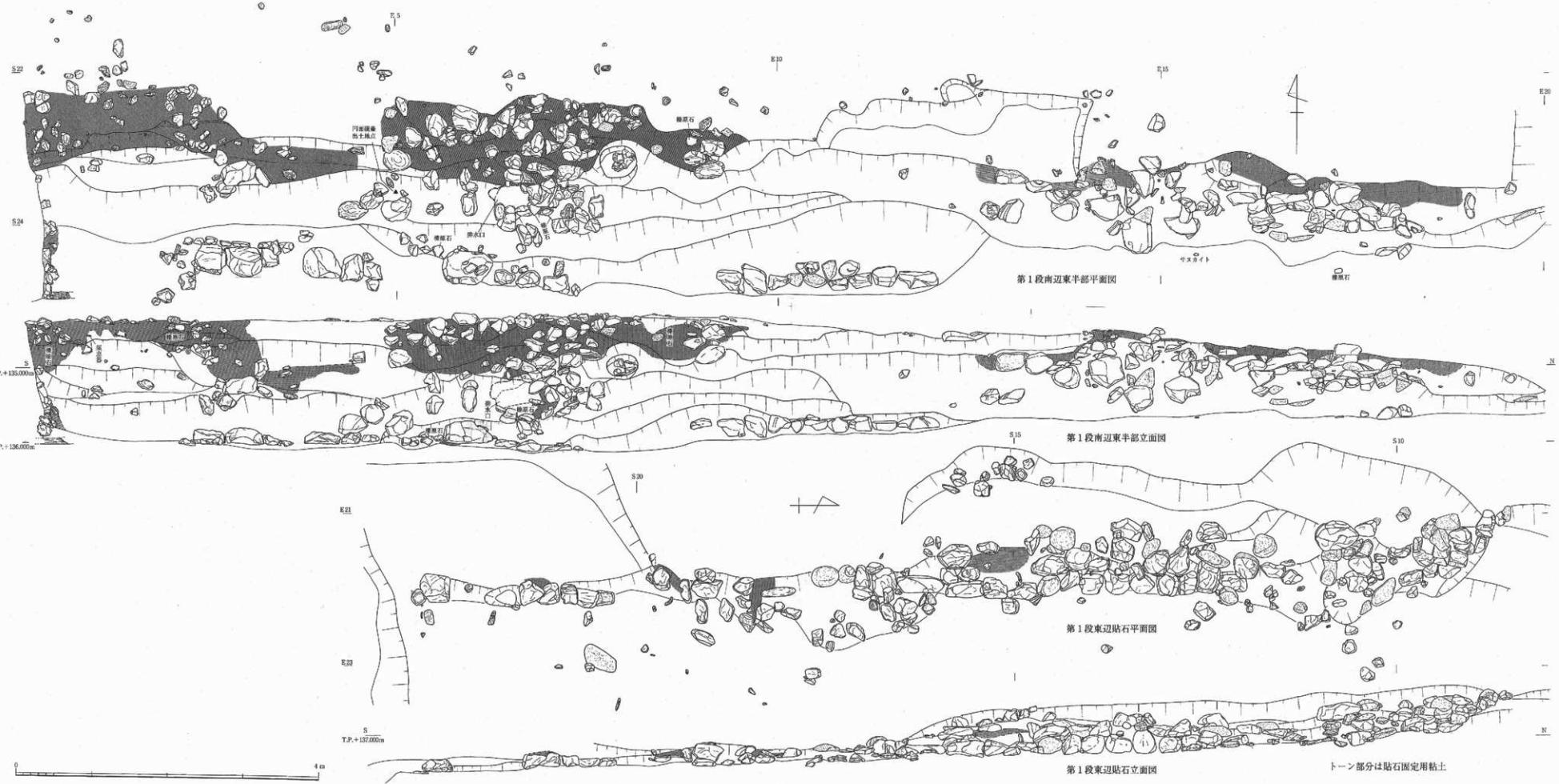
足トレントを設定して、出来る限り現状を損なわない形で、墳丘の構築状況を観察することに努めた。第1段では、大きく削り取られた南東コーナーの斜面を清掃し、また第2段上面テラスでは石室開口部前の攪乱坑の四面を整えてそれぞれについて断面を観察した。

第2段の構築状態の一部を反映すると見られるのは、削り取られたその南東コーナーのE7~20にかかる断面である（I-I'断面）。第1段の盛土の上に高さ1.7mまで積み上げている部分がみられる（E7にかかる付近）。盛土は、大きいまとまりでみると3次に渡っている。第1次の盛土は第1段盛土面より上に0.4~0.9mの厚みで積み上げられている。断面位置が墳丘南東コーナーを斜めに削った面となるので、断面図の東側のそれぞれの層界がやや高くなるのは、正確には北にやや高くなっているのであり、つまり、北から南へ若干傾斜した面が反映されていることになる。下層に0.15~0.40mの厚みの粘質土を何度も積み、それより上位に0.05~0.10m厚の砂質土とやはり同じような厚さの粘質土を交互に積んでいる。次いで第2次の盛土が施されているが、これは層厚0.2~0.3mの非常に堅くしまった砂質土を5~6層水平に盛っている。土圧により下位の粘質土に沈み込んでより安定した上面が得られている。この工程の後、最後の盛土がなされるが、まず盛られるのは疊を多量に含む粘質土、もしくは砂質土である。この盛土の上から、それより下の盛土をしっかりと固定させるかのように、最終的に厚さ0.7mの粘質土と砂質土が互層となって積み上げられる。特にその粘質土の部分は赤土のように見え、墳丘第3段階の攪乱個所の露呈した土質に似ている。以上の段の盛土を終えてから側面に黒褐色粘土を用いて石を貼った様子が、この断面の東斜面によく現れている。ここでは粘土の厚さは0.1m程度であり、また盛土の崩れを防ぐために厚さ0.25m程度の石を立て据えていた。

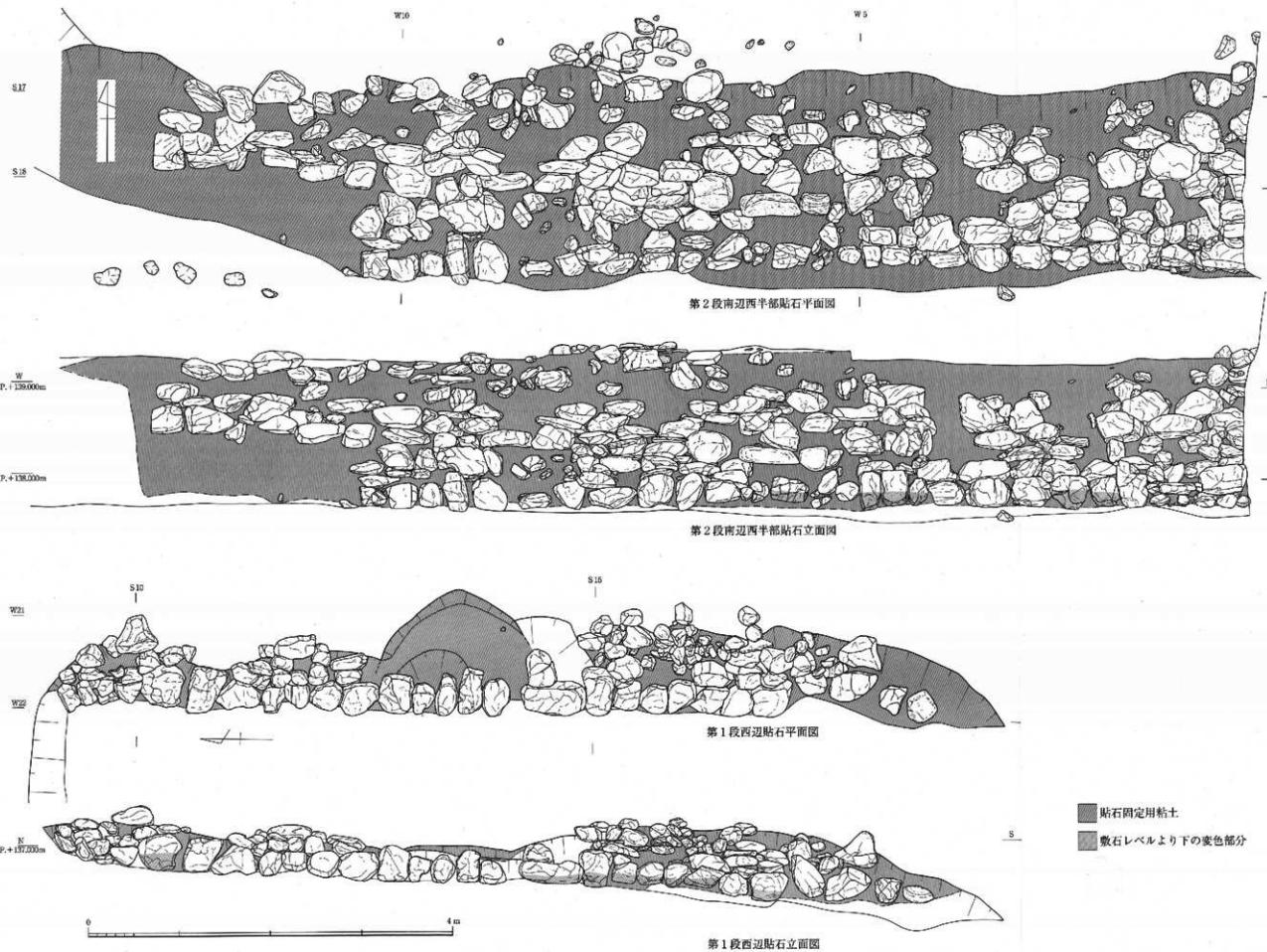
石室開口部前の攪乱坑を利用した断面（G-G'断面）観察も第2段の構築状態を示し、面積は狭小ながら、こちらは南北方向からの積み上げ状態が観察できる。これによると観察された断面には大きく2回の工程がみられた。最初の工程は、0.1m以下の薄い層と0.10~0.15mの厚い層を交互に水平に盛り上げ、南側をいったん斜面としてから、再びその南側斜面を覆っていくように今度は厚さ0.05mの土を水平に盛り上げている。ここでも粘質土と砂質土を交互に用いていた。これらの盛土は第1段のそれとは異なり、比較的薄い層を細かく積み重ねている点で、版築状の盛土といえるかも知れない。この工程を経て、盛土は貼石を施工する前の盛土、つまり墳丘の原形となる。同じような断面は調査区東側の南西~北東方向の壁面に設定した補足トレント（F-F'断面中央）でも確認された。そこでは東に傾斜する層界を観察したが、やはりこのラインを挟んで2工程の盛土となっている。これらの断面は南側から東側へと、墳丘の最初の盛土を巡るようにその外側に積み上げられた一連の作業を示すと考えられる。このように少なくとも第2段の構築には前後2回の過程があったことが知られた。しかしそれが中心から周辺に向かって積み上げていく単なる過程に過ぎないのか、その間に何か別の工程を挟んでいたのか、それを判断できる証拠は得られなかった。水平に盛り上げていく各土層の中に、このように前後2回に渡る工程が識別され、その層界のラインが石室からみて南と東に傾斜する形となっている。そして最初の工程を



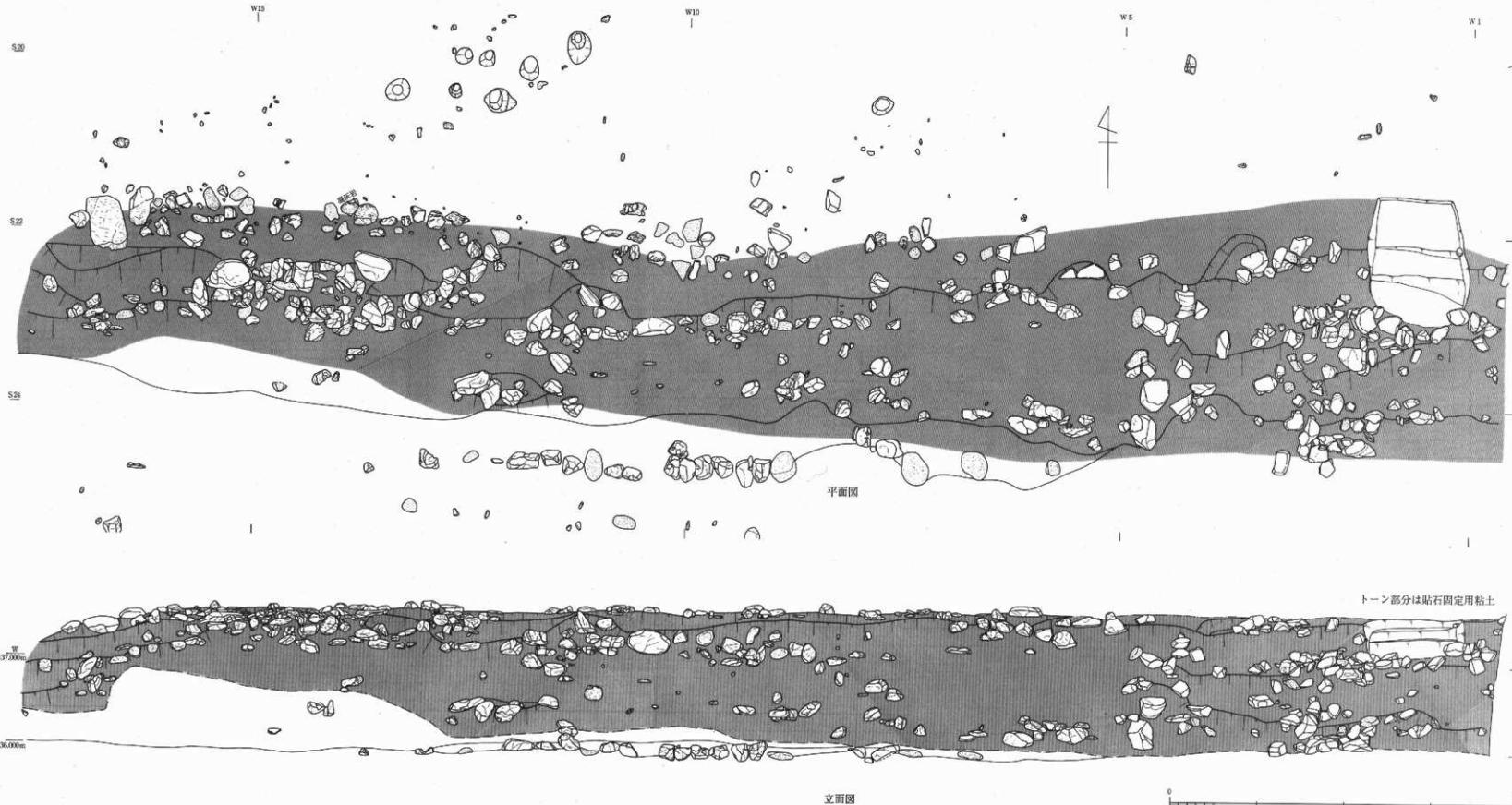
第13図 アカハゲ古墳微細図位置図



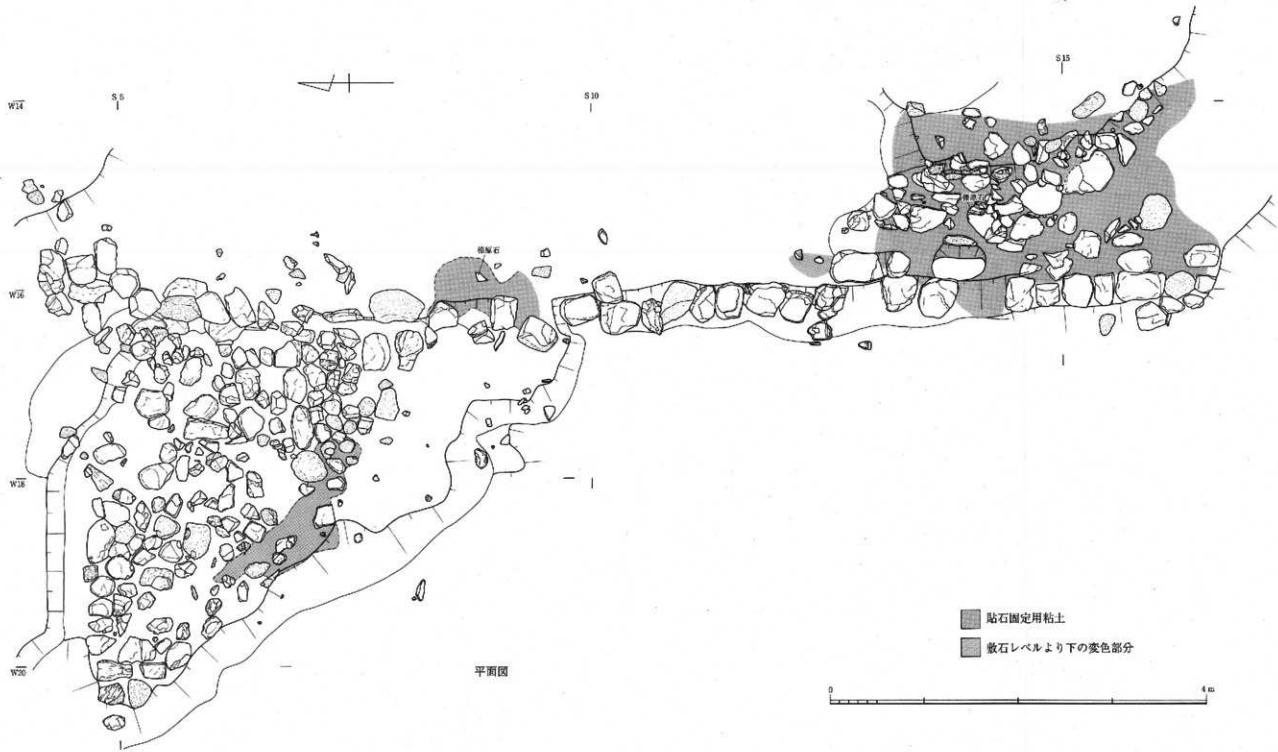
第14図 墳丘第1段南辺東半部および東辺貼石平面・立面図



第15図 墳丘第1段西辺および第2段南辺西半部貼石平面・立面図



第16図 填丘第1段南辺西半部貼石平面・立面図

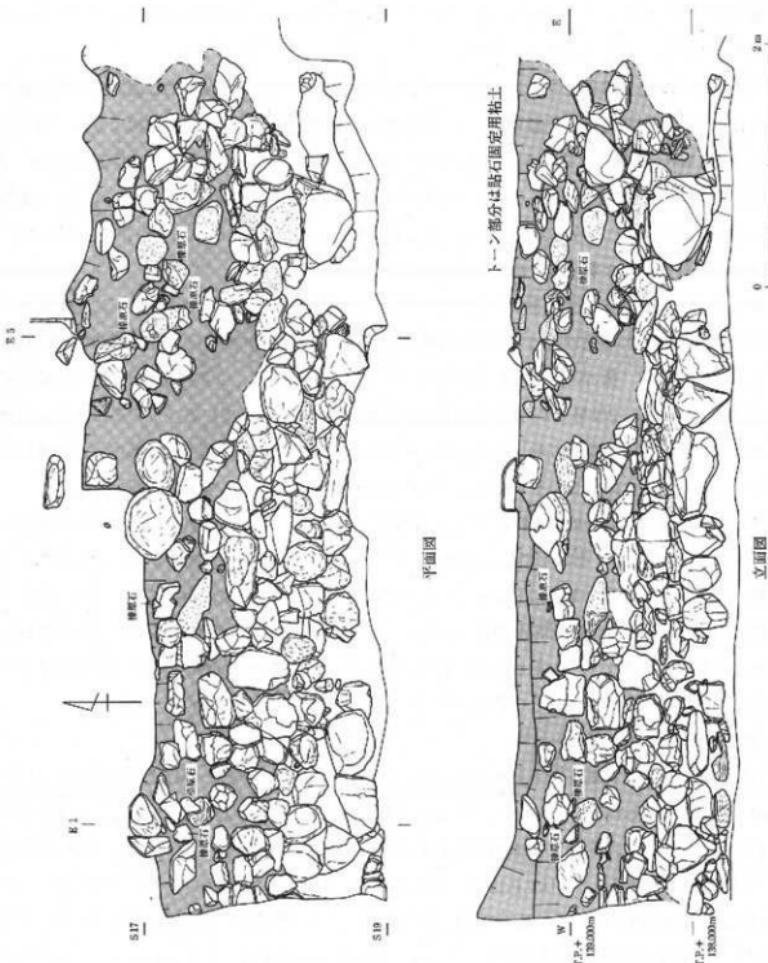


第17図 墳丘第2段西辺貼石および第1段西辺敷石平面・立面図

終えた段階で、墳丘第2段の土台はできあがっているとみられる。つまり、石室構築の基礎はこの段階で得られていることになる。

### 3) 貼石（第13～18図）

貼石が良好な状態で残っていたのは第2段南側で、ここでは段据からテラス面までほぼ斜面全体の様子を掴むことができた。しかしそ他の部分については、各段に裾の貼石だけが残る状態であった。さらに墳丘のコーナーの貼石については、既に述べたように墳丘角がすべて削られていた関係上、どのように石が貼られていたのか分からぬ。全体的にみると南側と西側の貼石は、



第18図 墳丘第2段南辺東半部貼石平面・立面図

まず墳丘裾に縦長のほぼ一様な石材を用い、それより上位の貼石の基礎としている。規模は東側のそれに較べて大きく、均一な材を使用しようとしたことが明らかである。すなわち、墳丘第1段西側、第2段南側、第3段西側では0.5~0.7m×0.3~0.4mの石が多く使用されているが、第1段東側や第2段東側では0.5mを超えるものは非常に少ない。貼り方についてみても、南側から西側にかけては比較的整然としているが、東側は雑然とした印象を受ける。また西に低く東に高い地形に制約されるので、西側の段の高さを東に延長すると、どうしても段そのものの立ち上がりが東側では際立たなくなる。このことからみて平石谷開口部に面する南西側の側面がここでは重視されざるを得ない地形となるのである。

貼石の良好に残る部分についてみると、特に最初に据えられる石は基本的に直方体の石を選んでおり、これを縦位置と横位置で据える。墳丘第2段南辺を例にとると、中軸線より西ではW2、W5、W7、W9、東側ではE3、E5、第1段西側ではS11、S13、S15、S17などに縦位置で用い、その間を横位置で貼る傾向が認められる。作業の区切りとして何か目印のようにそうするのであろうか。南辺の縦位置の石の部分を少し浮かせて裏面を見てみたが、黒褐色粘土が存在するだけで、特段注目されるような事実はなかった。

貼石と敷石の施工上の関係を示唆するものとして、第2段南側や西側の裾の貼石に水平方向に変色部分が認められる石がある（第1段西側南北のS14~17にかかる貼石、第2段西側南北のS11~12にかかる貼石、第2段南側東西のW2~3、4~6にかかる貼石）。この変色のラインは1段目でT.P.136.5~136.7m、2段目でT.P.137.9~138.0mを測り、ほぼ一定している。このことから石が貼られた後、テラス面が整えられ、その上に石が敷かれたので、貼石の側面の下部はある程度埋まり、それより上位は露呈したままになったため風化により変色したと考えられる。

貼石の残る部分には、墳丘の構造で述べた黒褐色の粘土が必ず用いられている（第14~20図のトーンで示した部分）。石はこの粘土に押しつけて貼られている。また貼石が外れた部分でもこの粘土の残るところがある。粘土は貼石をより強固に固定させるために用いられたようである。

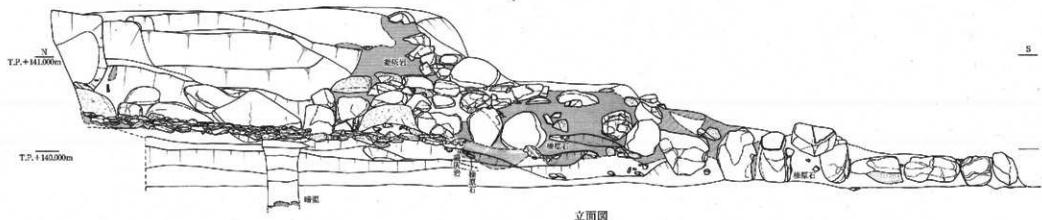
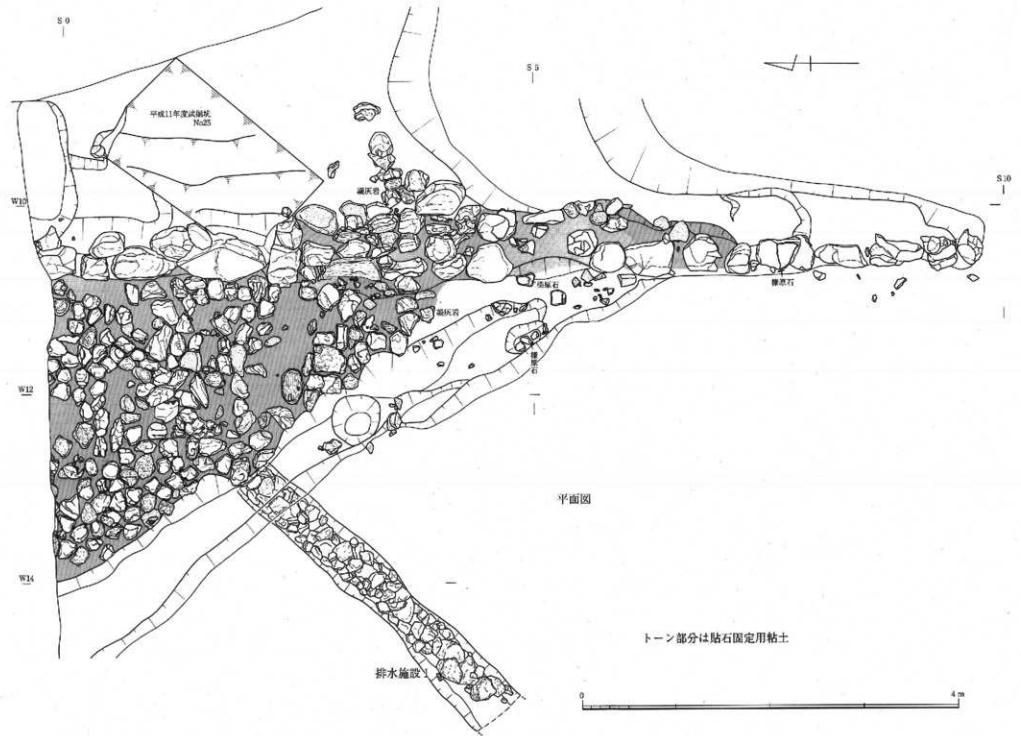
貼石の中にはいわゆる棟原石が散見される。しかしそれは特にこの石材でなければならないというような状態ではなく、大きさもまちまちである。一般に石室内に用いられるのがこれまでの調査で判明しているので、おそらくその余りを外部にも用いたと考えたい。

#### 4) 敷石（第17、19、20図）

各段上面のテラスに石を敷き詰めたもので、第1段・第2段の北西隅、第1段の北東隅において検出された。第1段北西隅では7.0m<sup>2</sup>、第2段北西隅では6.8m<sup>2</sup>、第1段北東隅では15.8m<sup>2</sup>が開墾から免れて残った。第1段北西隅の敷石はT.P.138.2~138.5m、第2段北西隅のそれはT.P.140.1~140.4m、第1段北東隅のそれはT.P.138.3~138.6mで、全体的にみて北から南へ若干傾斜面をなす。第1段北西隅のこのレベルと、貼石のところで述べた石の一部に変色部分がみられるレベルとを較べると、0.30~0.50mの高低差が生じている。このことからすると南北方向のテラス面のレベルは必ずしも水平ではなく、北から南に下がる地形の緩傾斜面に合わせている。それは単に合わ



第19図 墳丘第2段東辺貼石および第1段東辺敷石平面・立面・断面図



第20図 塡丘第2段西辺敷石および第3段西辺貼石平面・立面図

せていたというにとどまらず、石敷きの雨水などを始末する上では、若干の勾配をつけたほうが水はけに都合がよい。さりとてこの程度の傾斜なら、水平な段と平坦なテラスのイメージが損なわれるほどのこともない。後述する排水施設1の底面レベルをみても第1段テラスに高さを合わせているので、テラス面の滲水ができるかぎり南に落とそうとする意図が施工段階から働いていたとみられる。

第1段と第2段の北西隅、第1段北東隅に敷き詰められた石に共通するのは、0.2m大の石が多用されていること、風化して砂状になった石が認められること、必ずしも石の平たい面を揃えてはいないことである。またこれらの3個所の敷石を比較してみると、最も丁寧に密に整えて施工しているのは第2段北西隅であり、また第1段北西隅では石と石の間にやや隙間が目立つが、この南端の一部に2段目と同様に密に敷き詰めた部分が残るので、本来は2段目とほぼ同じような丁寧な施工が行われていたと考えられる。これに対して第1段北東隅では石の大きさがまちまちであることに加えて、敷石間の凹凸が激しく、用いられている石も大振りの0.4mを超えるものを乱雜に置いている。よって前2個所にみられたような平坦面とする意識は薄い。ここでは貼石裾の傾斜角が比較的緩くなっていることとも相俟って、テラス面から段斜面への変換は一見すると気づかないほど漸次的に移行する。

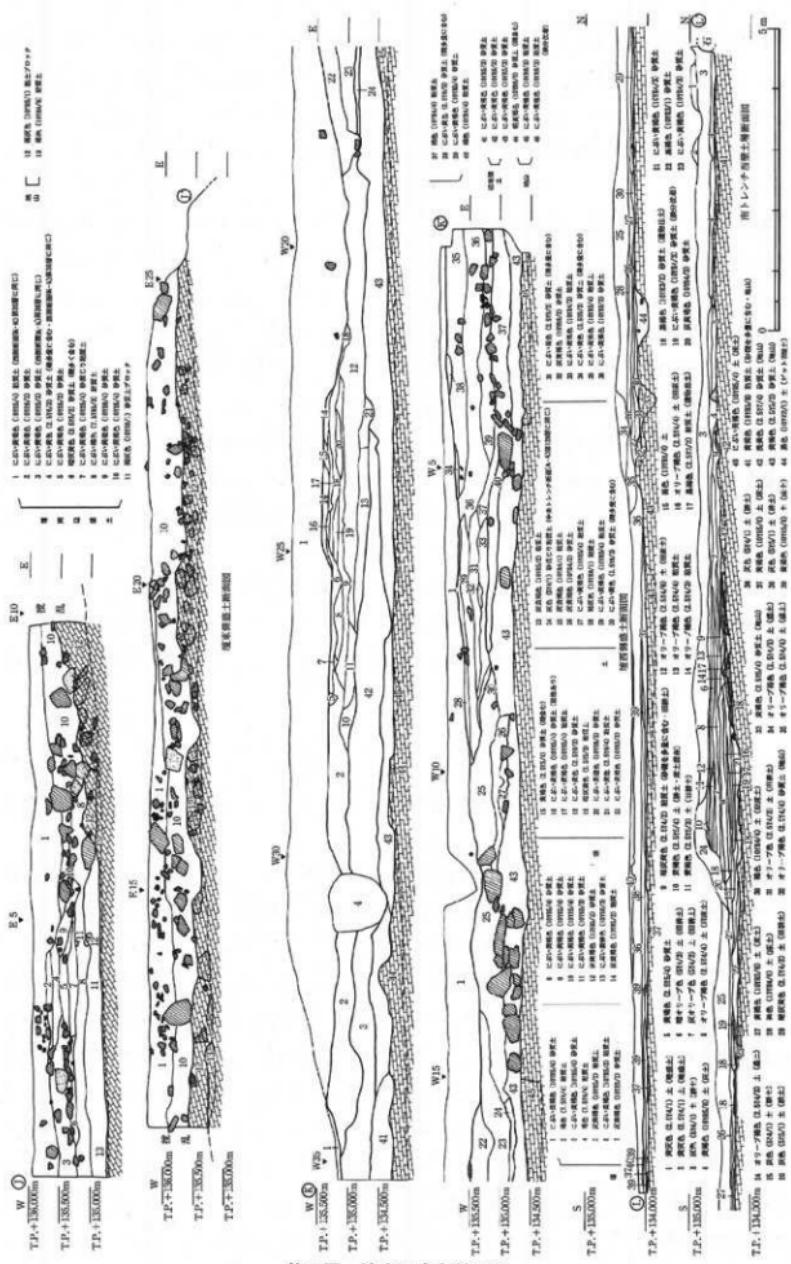
以上の3個所以外の敷石は耕地開墾の過程でほとんど取り去られてしまっていたようである。ただ貼石と同様、石を固定する黒褐色粘土はここにも使用されており、そのわずかな痕跡が各所に認められたことも含めて、敷石は本来少なくとも第1・2段のテラス全面に施されていたと考えたい。

### 第3節 外部施設

外部施設としては壇丘の上台となる壇、その上面に壇丘裾を三方からを取り巻く周溝がある。

#### 1) 壇 (第21図)

壇丘の南に南北約25m、東西は、東が農道によって削られ、崖面となり、西は谷地への傾斜面までの余地を勘案すると、少なくとも70mを測る。また東では第5調査区、西では第1調査区の東西トレンドでいずれも谷地への傾斜変換部を捉え、これをそれぞれ南へ延長し、壇の東西ラインを交わるとこから見ても少なくとも70mを下回ることはない。壇上面の東端はT.P.136.3m、西端はT.P.135.9m、南辺での地山面と盛土面の境は東半でT.P.135.5～135.7m、西半でT.P.134.3～134.7mであり、東端と西端の比高差は1.4mで、この高低差を盛土によって克服し水平な壇造成を行っている。壇の盛土を南北方向で見た場合(第10図中央土層断面図)、地山面は南端でT.P.134.8m、北端でT.P.135.0mと北から南へ緩やかに傾斜し、その上に厚さ0.35～0.50mの粘質土(第132層)が堆積している。土質は均一で、サヌカイト剥片が出土し、壇の盛土以前の堆積土と思われる。これより上に壇の盛土が行われている(同図壇盛土模式図)。それは大きくD-3→D-2→D-1の順に積み上げられ、D-4で南の斜面を補強して壇の盛土は完了する。D-1の盛土の過程



第21図 壇南辺盛土断面図

でも南側を先に土手状に盛り上げておいて、それによって低くなった北側を盛る傾向がみられる。その結果北側の墳丘裾寄りに浅い凹部ができたが、これが周溝となって、墳丘構築後そこに徐々にレンズ状に粘質土（C）が溜まつていった。その後は棚田の中に埋没し、耕土・旧耕土などのブロックが混じる後世の耕作土（B）、さらにその南端に石積みして棚田を造成した際の盛土（A）に覆われた。

壇の造成に用いられている土やその盛り方は、墳丘で観察されたものとはまったく異なっている。粘質土が主体であるが、墳丘にみられるような互層状ではなく大部分が土塊状となっている。礫は特に東半部に混入が著しい。上記の壇盛土以前の第132層は壇より南、すなわち第3調査区南トレンチではまったく認められずそこでは地山だけとなっていること、また地山の土質に似ていることから、礫まじりの地山を削って、それを盛土として用いた可能性が高い。

## 2) 周溝

墳丘裾の東・西・南の三方を囲む浅い溝である。東側および西側の北端は尾根の傾斜面を東西約8m幅に斜めに削り、溝端の区画をついている。南側は東西55.0~58.0m、幅5.0~7.0mを測る。底面レベルは、東側では北から南へかけてT.P.136.75m~136.33m、同じく西側ではT.P.136.47~136.72m、南側では中央やや西のW10~15/S30~32付近が最も深くT.P.135.5~135.6mを測り、深さは0.3m強となる。等高線もこの付近を中心として東西に長い楕円形のラインを重ねている。埋積土は中央断面（第10図中央土層断面図）に現れた第108層で黒褐色を呈し、これが帶状となって墳丘裾を巡る形で検出される。壇の説明でも述べたように、この浅い周溝は掘り下げたものではなく、壇の盛土の過程で窪んだ状態となり、結果的に溝の形となっている。そして東と西の北行き部分の尾根の地山を周溝幅に合わせて東西幅約7.0mを削り、南側からの溝幅を連続させている。これによって北から斜面に沿って流れ下る雨水などが、石室を覆う墳丘第3段の東西両側から振り分けられる形で、南側の周溝へ落ちる。徐々に洗い流される貼石固定用の黒褐色粘土や山間部からの腐植土も周溝内に沈殿し、その結果ピート質の土壤が堆積することとなったのであろう。周溝南辺の肩から底面にかけては鉄分の沈着が著しい。アカハゲ古墳北側には現在の道路が嵩上げされる以前、地下水の湧水が西に流れ、この水は鉄分が多くて地元では伝えてくる。このような水質の影響も受けているのだろう。

周溝底面では後述する排水施設の一部、小土坑、流水跡を検出している。埋積土より土師器・須恵器の破片が僅かに出土したが、いずれも細片のため器種等は不明である。

## 第4節 排水施設

### 1) 排水施設1（第22、23図）

墳丘西側第2段の斜面からテラス面にかけて設けられた暗渠である。古墳の中軸線から北で約45° 東に振る。この付近では墳丘は地山を整形して段をつけ、西端では墳丘第1段西側テラス面の敷石レベルと大差なく、次いで貼石・敷石の施工となるが、それに先だって幅0.4~0.5m、深

さは東端で0.5m、長さ約3.5m以上にわたって垂直に掘り、その底面に0.1~0.2m大の礫を密に敷き詰め、それから掘り上げた土で再度埋め直している。溝底礫敷き上面は10°の傾斜角をなして、北東へ高くなる。暗渠はさらに北東方向へ延び、少なくとも第3段の立ち上がり部までは続くものと思われる。礫上面のレベルは北東から南西へT.P.139.4~139.0mを測る。

### 2) 排水施設2 (第23図)

墳丘第2段の斜面からテラス面にかけて設けられた暗渠である。古墳中軸線から北で25°西へ振る。施工方法は排水施設1と同じで、いったん築いた墳丘を掘り、その底面に礫を詰める。礫は0.1m大の石で、その上に0.2~0.3m大の礫を被せるように置いている。暗渠掘方幅は0.4~0.6m、深さ0.25m、長さは2.7m以上で、溝底礫敷き上面は5°の傾斜をつけて、北西に高くなる。中軸線との振れは、西の排水施設1と差があるが、排水施設1に対応して北西方向に設けられたことは明らかである。礫上面のレベルは北西から南東へT.P.139.3~138.8mを測る。

### 3) 排水施設3

第1段の東側斜面、E6~7/S24~25の範囲に0.50×0.70mの規模で開口する空洞部分がある。奥行きは0.50mほど確認できたが、それ以上は追跡できない。内部には底面に粘泥が溜まっている。開口部では榎原石の板石が崩れたような状態で出土している。この個所は段斜面の貼石が開墾により著しく取り外されているので、原状は復しがたいが、榎原石は排水口に用いられた可能性がある。この排水施設の開口部底面はT.P.136.4mで内奥はやや北上がりである。第2段盛土の過程で施工された暗渠であろうか。石室を内包する墳丘第3段との位置関係が注意される。

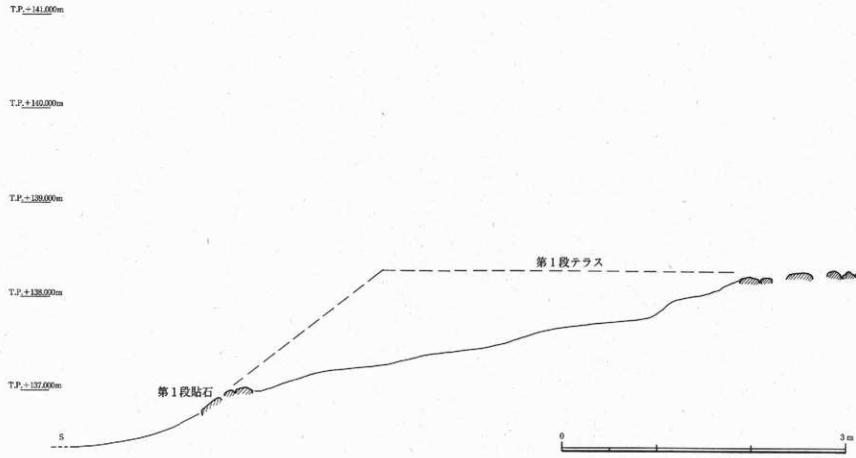
### 4) 排水施設4 (第25図)

排水施設5から東へ約8mのところの壇の南斜面で検出された排水口である。被覆石と考えられる長さ0.6m、厚さ0.2mの長手の石が土圧で押し潰された状態となっていた。後世の開墾で側石が外された結果被覆石が落下したかも知れない。やはり地山面を底面としている。規模は排水施設4と同様であり、施工方法も似ているから、この排水施設も北側の壇の盛土中に受水口が設けられていると考えるのは自然であろう。

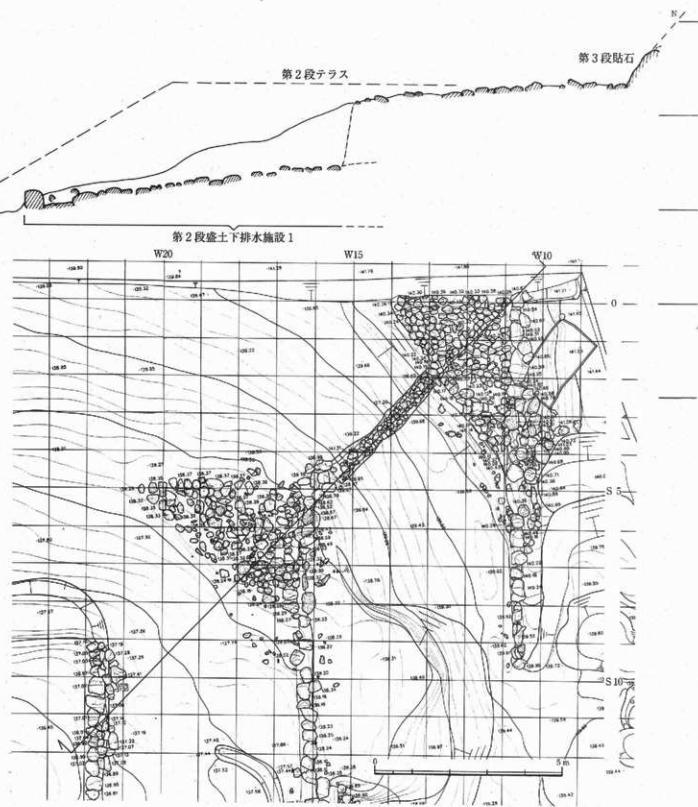
### 5) 排水施設5 (第24図)

この排水施設は、壇南斜面が露呈した段階で排水口部分が検出された。その後壇上において実施したレーダー探査によって反応があった個所を補足的にトレチを設定して掘り下げ、地下の状態を観察したところ、排水口の北側で受水口部分を検出するに至った。平面的および縦断的な位置関係から見てもこれらの施設は一連の排水施設と捉えられる。

**排水口** 墳造成の基盤となる地山面上に長さ0.3m、厚さ0.15mの直方体に近い石を内法0.35~0.40mを確保して側石とし、これを両側に据え、その上にそれぞれ0.25~0.30m、厚さ0.10~0.15mのやや小振りの同様な石をほぼ水平に積み、その上に長さ0.7m、厚さ0.12~0.17mの石を横長に載せて被覆石とする。これによって内法は0.35×0.25mの空洞を得ている。その周辺には壇の盛土による崩れを避ける補強の石が置かれた後、被覆石の上に高さ0.8mに達する壇の盛土



第22図 排水施設1断面図

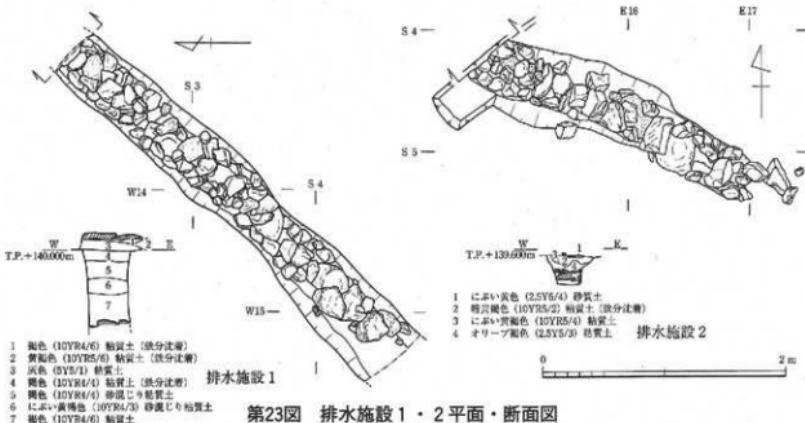


がなされている。排水口底面レベルはT.P.134.70m、被覆石上面ではT.P.135.15mを測る。

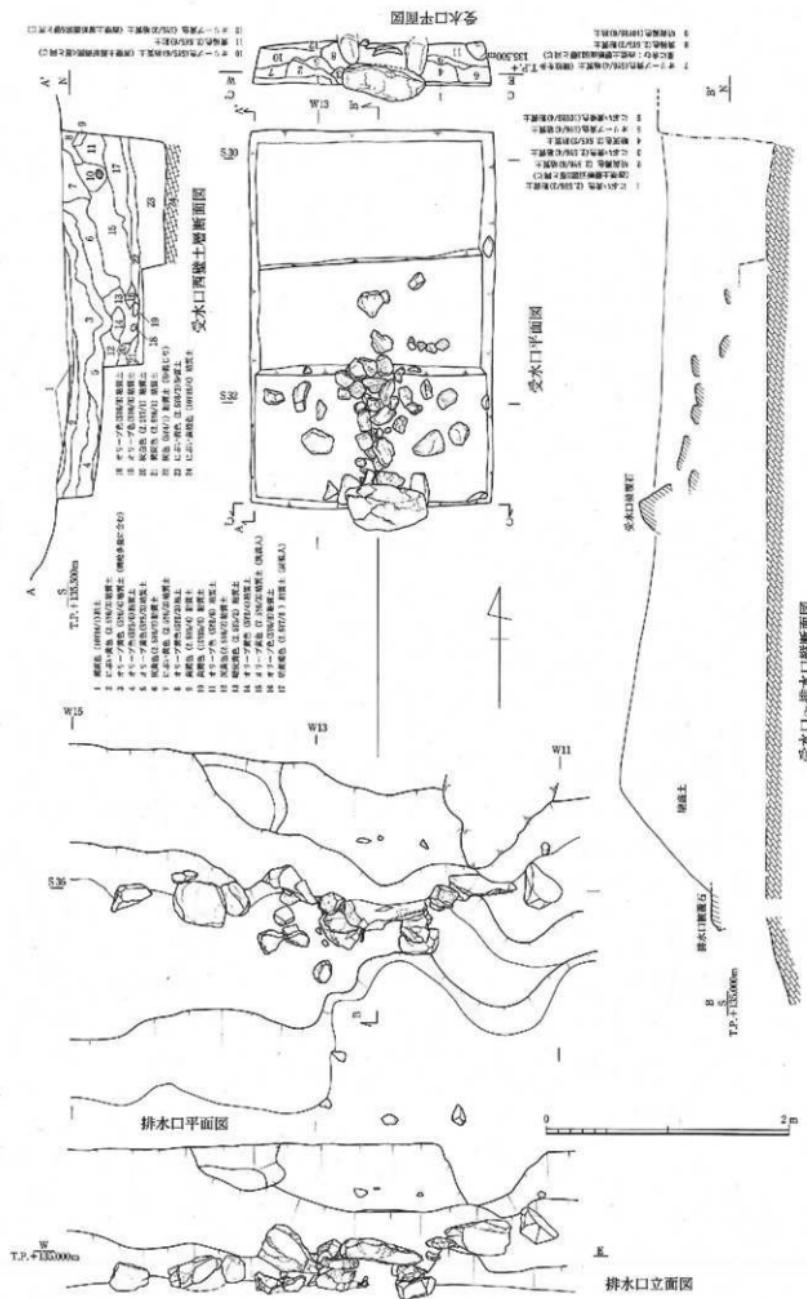
受水口 排水口突端から北へ3.2mの壇南辺近くに受水口が設けられている。地山面上に堆積する古墳造営以前の旧表土（受水口西壁断面第23層）の上に積み上げられた壇の盛土の内、T.P.135.2m付近に厚さ0.15~0.20mの長手の石を、排水口の側石とは違って縦長に用い、内法0.25×0.40mの空間を確保して長さ0.7m、厚さ0.25~0.30mの石を差し渡して被覆石とする。内底面のレベルはT.P.135.3m、被覆石上面はT.P.135.75mである。受水口の北側に設定した2×3mの小トレーナーの範囲では、受水口の前面（北側）に1.7m四方の範囲に礫の集中する個所があった。0.1m以内の小振りのものから0.3mの大振りのものまであるが、特に中央の0.8m四方の範囲では石を密に敷き詰めて、礫上面を揃えほぼ平坦面とし、さらながら掌のように石を並べている。そのレベルはT.P.135.3mで、この平坦面が受水口の底面に連続する位置に設けられているから、おそらく水の浸透をここで受け、受水口を通して南に落としていたものと思われる。周溝のところで述べたように周溝底面ではこの個所が最も深い部分にあたっていることもこれを裏づける。以上の受水口と排水口の底面レベルでの比高差は0.6mあり、傾斜角では7~8°の勾配をなしている。

#### 6) 排水施設6（第25図）

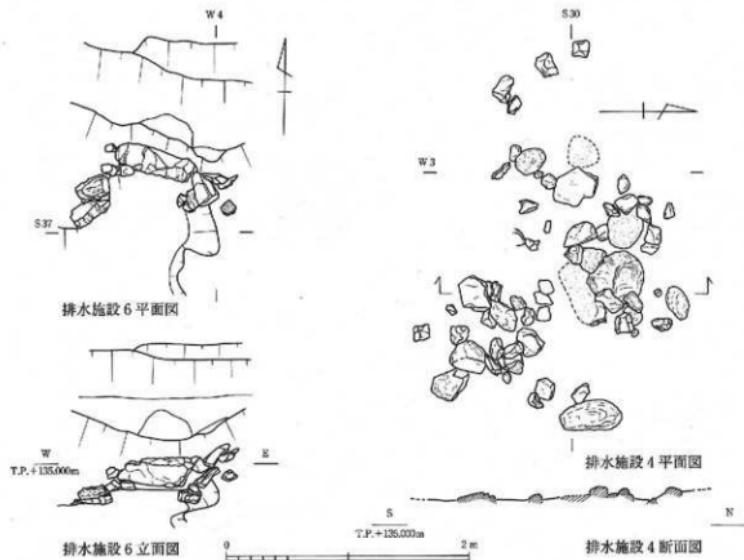
周溝底面のW1~4/S29~31の範囲、約2.0m四方で検出された礫溜まりである。礫は、0.4m大から0.1m内外まで、大小さまざまである。花崗岩の風化して砂状となったものも含まれる。これらの礫は壇の盛土の過程で入れられたようである。これを排水施設とする根拠は排水施設5にみられる受け口部の礫溜まりと類似することである。さらに排水施設4との位置関係から見て、それとの関係が強いこと、そしてなによりもこの個所が周溝の最も滞水の著しい個所にあたっていることである。そのような場所の盛土中に礫を多く用い、礫と礫の間隙を多く作っておいて、周溝の滯水をより効率的に地下に浸透させ、排水施設5のように、南斜面裾より排水させたと思われる。排水施設4との関係を発掘によって確認していないので、ここでは別個に説明した。



第23図 排水施設1・2平面・断面図



第24図 排水施設 5 平面・立面・断面図



第25図 排水施設4・6平面・立面・断面図

## 第5節 その他の遺構

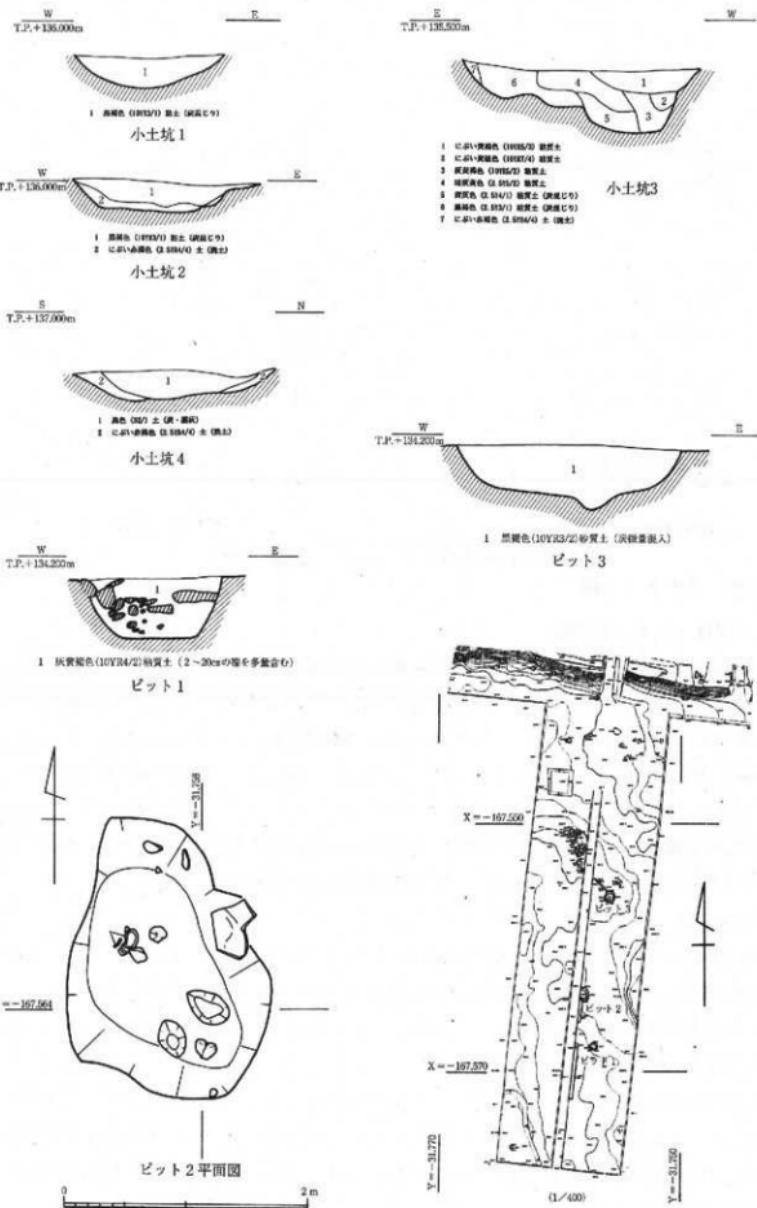
### 1) 小土坑（1~4）（第26図）

周溝底面で3個所、壇南西部で1個所検出されたほぼ円形の土坑である。小土坑1（W26-28/S24-26）は径0.72~0.74m、深さ0.17m、小土坑2（W26-28/S22-23）は径0.64~0.65m、径0.16m、小土坑3（W33-34/S31-32）はその北端の一部は、平成11年度試掘調査の試掘坑No.30の南端にあたり、径0.80m、深さ0.10m程度残す。小土坑4（W24-25/S10-11）は周溝東側の北端付近で径0.84~0.94m、深さ0.17m。周溝底面で検出された3個所の小土坑では、1では炭まじり黒褐色土、2では上層が炭まじり黒褐色土、下層が赤変する焼土、3では上層の炭は燃えた藁の痕跡が明瞭であり、下層はやはり赤変した焼土となっている。いずれの土坑にも出土遺物はみられなかった。

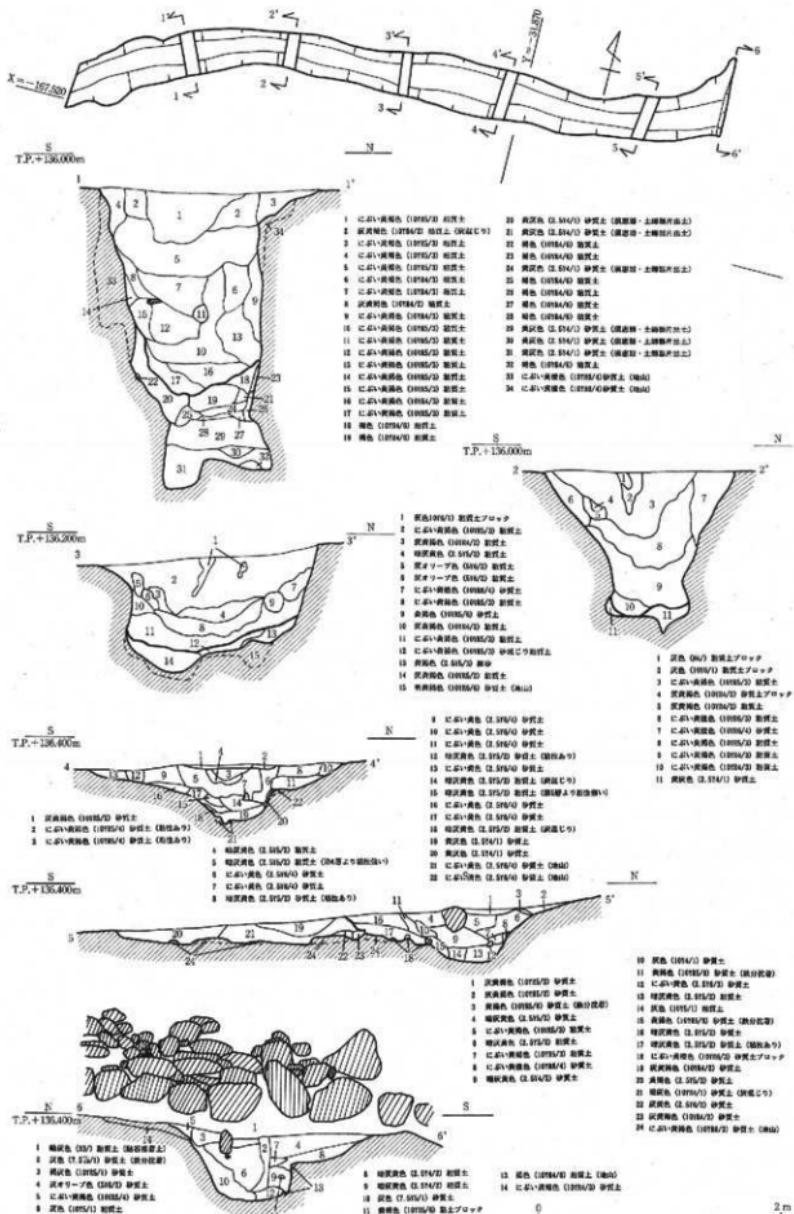
### 2) ピット群

壇丘第1段テラス南西コーナー付近（W10-14/S20-21）で検出された径0.18~0.25m、深さ0.12~0.13mのピットである。埋積土は貼石や敷石を施工する際に用いられた黒褐色の粘土である。テラスの盛土を終えた後、敷石が施されるまでのピットである。掘り込まれたというより石のようなものを取り除いた跡形とも考えられる。

壇丘第2段裾南西コーナー付近（W13-15/S24-25）で検出された東西約3mに並ぶピットである。既述のピットとは異なり、やや横長の不定形な0.04~0.05mの浅いもので、旧耕作土が埋積土である。壇丘第1段南面の裾石ラインの延長上に並ぶので、開墾により取り外された裾石の抜き取り穴とみられる。



第26図 第3調査区小土坑および同南トレンチ検出遺構平面・断面図



第27図 滲水跡断面図

### 3) 流水跡（第27図）

壇西側の壇丘第1段から調査区西縁のW22-35/S16-22付近、周溝底面で検出された幅0.65～1.10mの北東～南西方向の流水跡である。東から西へと底面レベルは下降し、東端では深さ0.46m、西端では1.57mを測り、約1mの比高差を生じている。底面は流水の渦巻で抉られた凹凸が各所に認められ、その窪みとなったところに粗い砂が堆積する。激しい流水によって急激に下刻した状況を示している。その砂の上には若干粘質土が溜まった後、西の深い部分を中心に一気に埋め戻している。東端では浅い分、周辺に溢れて広い範囲に砂が被っていた。平面的に緩やかに蛇行しているのは、尾根の地山の等高線に沿って、そこから南の壇の盛土の、地山に比して軟弱なその上面を、筋を引くように流れた結果である。

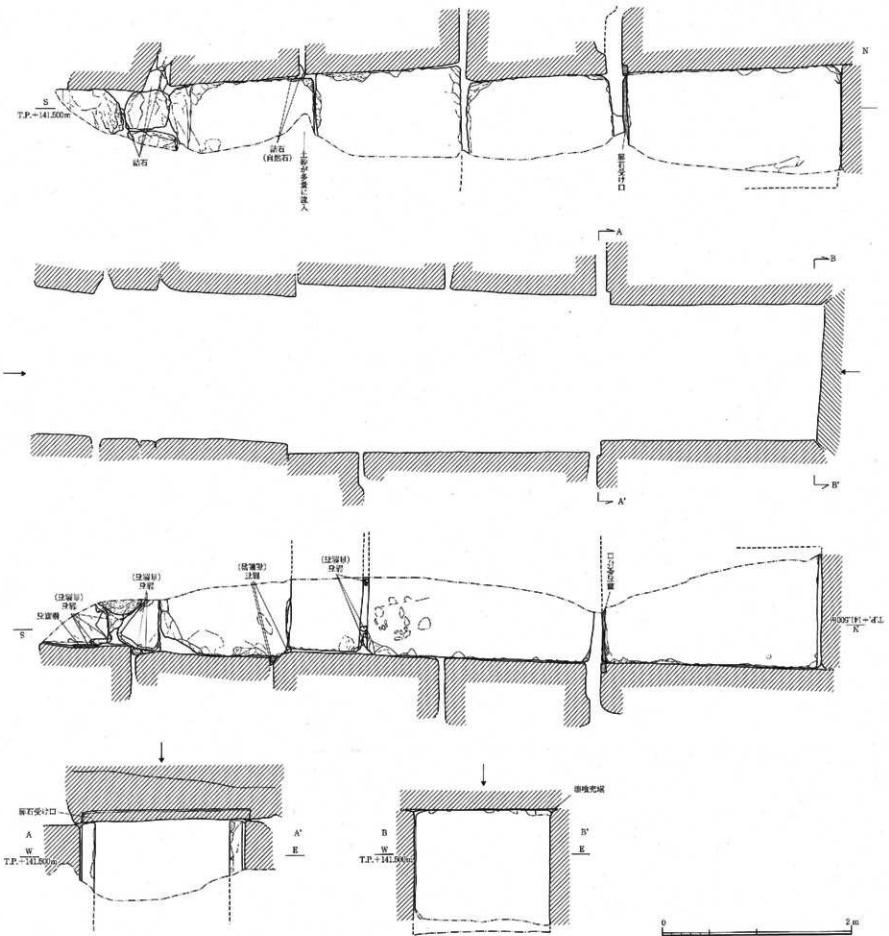
底面に堆積した粗砂からはサスカイト、須恵器、土師器の破片が、また埋め戻しの土からは炭が出土している。須恵器には坏蓋、高坏の破片（第29図1・3）がある。高坏は坏部から脚部にかかる破片で、透かし窓の一部が残る。かなり摩滅が激しく、流水によって古墳背後の山手から流れしてきたと考えられる。したがって砂層出土の遺物は山手に存在した何らかの遺構（古墳か？）から遊離した遺物の一部とみるのが妥当だろう。

流水跡は、壇丘を構築する前の壇の造成が完了した後にその上面から切り込んでいるから、壇から壇丘への構築過程で不意の出水に見舞われたことがわかる。大雨など出水のある季節を考慮しなければならないが、壇造成から壇丘築成への一連の作業工程の途中のことであったか、壇造成と壇丘築成との間に時間的な隔たりがあり、まだ壇丘が築かれない壇だけの状態の時のことであったか、そのいずれかであろう。どちらにしてもこの流水は北東の山手から壇丘の西側斜面を流れ落ち、平地となる壇に至ってこれを深く刻みはじめ、調査区西辺を越えた付近（壇の西端もほぼその辺りか）で西側の谷地への急激な傾斜変換部分を削って谷へ流れ込んだようである。

### 第6節 石室の現状（第28図）

今回は石室内の発掘作業は行わなかった。現状を観察し、記録するにとどめた。石室は現在開口部より奥壁に向かって傾斜する状態で土砂が堆積している。特に西側壁の前室第1石目と2石目との境、奥室と前室との境から内部に土が多く流れ込んでいる。また羨道第2石目と3石目の境の裏側が空洞状態となっていて、壇頂部でその個所に当たる部分が陥没をくり返している。その陥没を埋める土がまた空洞に流れ、さらにそこを介して石室内部へ流入するといった状況である。

昭和40年（1965年）の調査時の実測図と比較すると、前室第1石に載る天井石がやや前にずれているようであり、さらに羨道第2石と第3石との間の天井石付近も若干開きが大きくなっている感じがする。閉塞石より南は側壁の先端が一部露呈する以外はすべて腐植土に覆われている。壁面では東側壁の前室第2石の先端部分や羨道の第3石にところどころ剥離が進み、窪みとなっているところが認められる。同じく東側壁では奥室と前室の側石の間は0.15m以上空隙となり、そこからは奥室と前室の天井石の端面が観察される。奥室天井石の前面は平坦な面から上端にかか



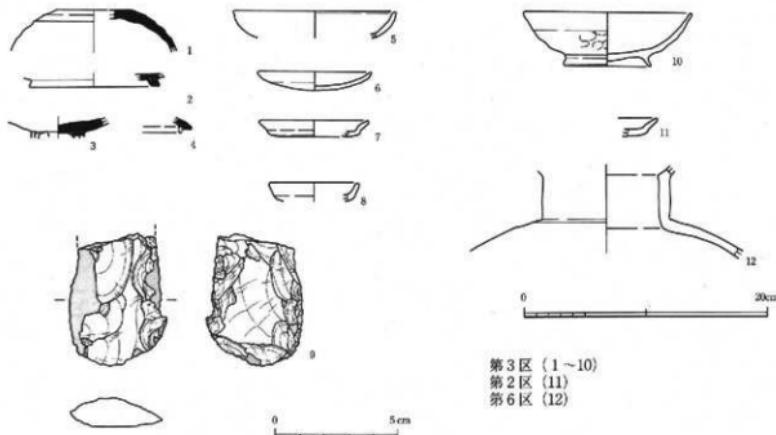
第28図 アカハゲ古墳石室現状図

るところが丸みをつけて加工され、これに組み合う前室の天井石後端面は下端より内反りに加工した後、上端面は奥室天井石に向かって軽く突出させ、平坦に仕上げられている。同様のことは西側でも見受けられるが、前室天井石後部が欠けている。後世に割れた可能性がある。奥室扉受けのカーブ部分も剥離は進んでいた。

天井石と側石との組合せには自然石や花崗岩、棟原石の破片を詰めた個所（羨道部東側壁と天井石との間）がある。天井石の安定を図るために側石上面を削った痕跡は全体的に認められた。壁面への漆喰塗布は見いだせなかった。しかし奥室北端東側壁付近の土砂の上にわずかに漆喰の破片が落下していたことからすると、おそらく側壁と奥壁と天井石との隅の隙間を充填していた漆喰であったかと思われる。

### 第7節 出土遺物（第29、30図）

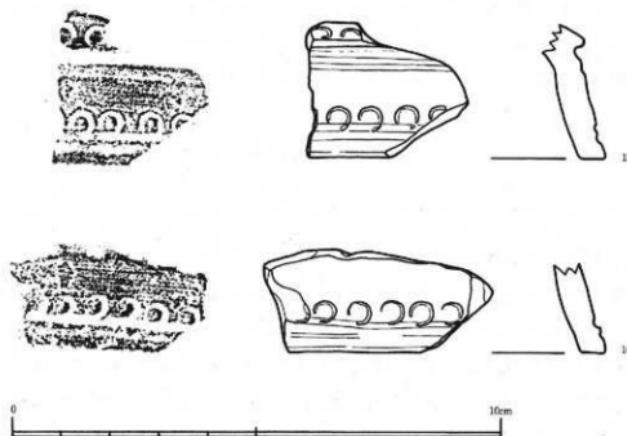
墳丘を覆う中世から近代にかけての耕作土（9）、壇上面に堆積する中世耕土（6～8）、壇上面の周溝の堆積土（4・5）、壇西側上面の流水跡に堆積した砂層（1・3）から僅かに遺物が出土している。しかし細片がほとんどで、図化できたものは限られている。そのうち墳丘第2段南辺貼石を覆う中世耕土から出土した黄褐釉円面鏡の蓋の破片2点（13・14）は、昭和40年（1965）の石室内部の調査で出土したものと同一個体になるものと考えられる。また平成11年（1999）、本課がアカハゲ古墳墳丘第1段上面付近で行った試掘調査の際にもこの器種の破片が1点出土している。これ以外に漆塗籠棺の微細な破片も貼石覆土中より出土している。いずれも石室内部が盜掘その他の搅乱を受けて外部に投棄されたのだろう。棟原石はコンテナ5箱程度採取した。この石材は調査前の墳丘周辺で表採した数箱分以外に、墳丘貼石覆土中、それに第7調査区の中世包含



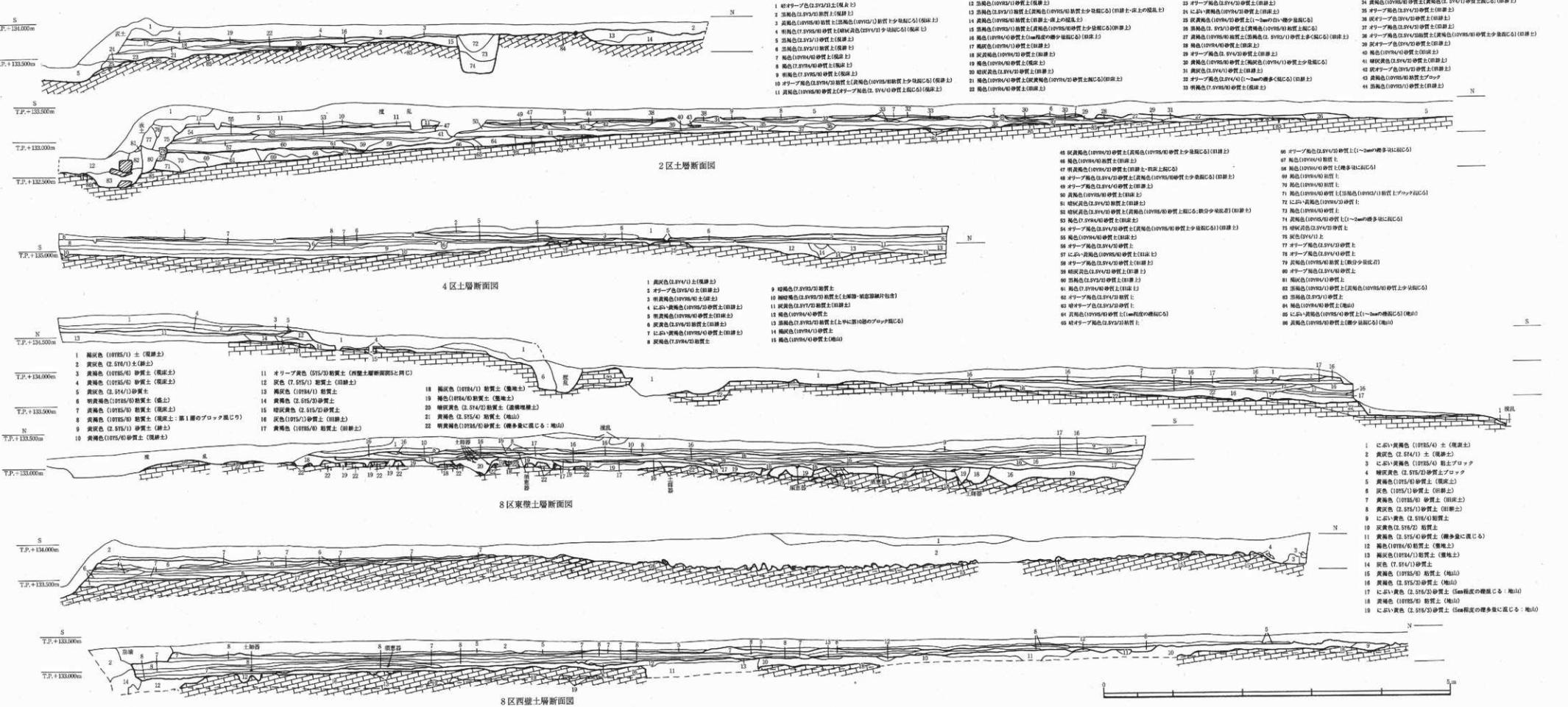
第29図 第2・3・6調査区出土遺物

層（耕土層）でも出土している。墳丘周辺の開墾に伴って、かなり広い範囲にわたり遊離したようである。

以上の遺物の中でアカハゲ古墳に直接結びつく遺物は、円面鏡、漆塗籠棺、棟原石のみである。



第30図 アカハゲ古墳墳丘第2段南辺貼石覆土出土遺物



第31図 第2・4・8調査区断面図

### 第3章 その他の調査区の概要

#### 第1節 古墳周辺の調査（第26、31、32図）

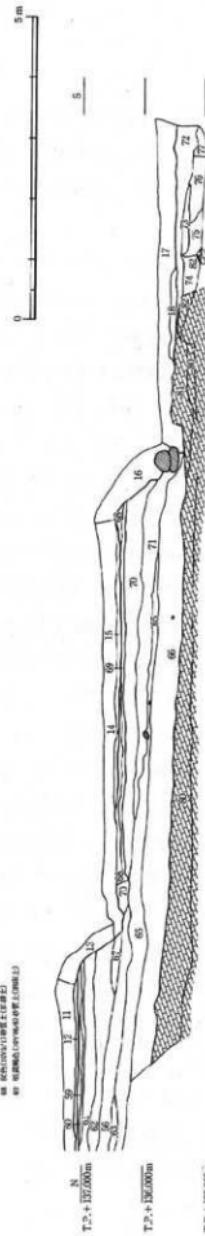
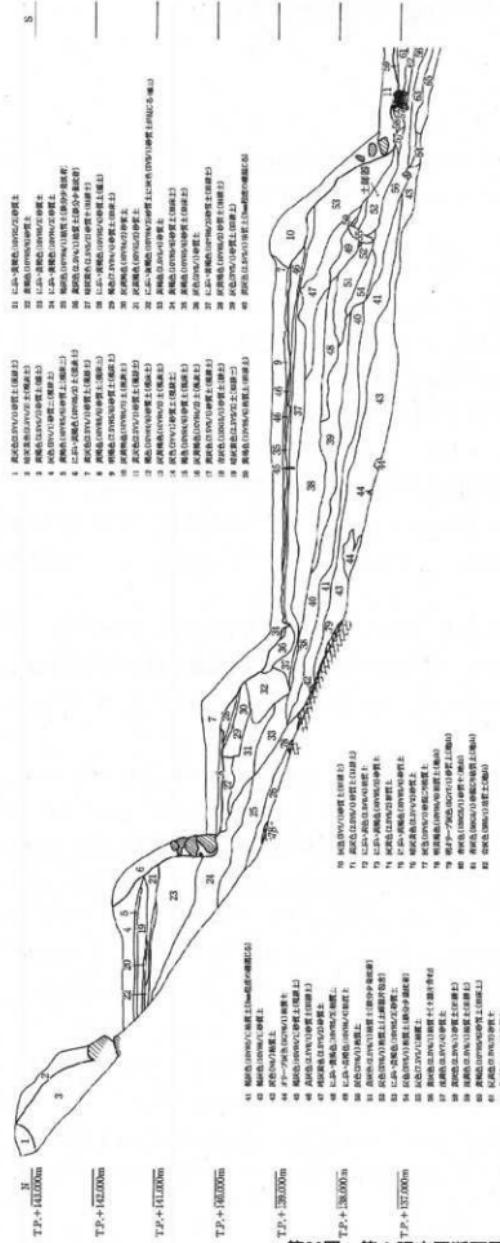
アカハゲ古墳を直接対象とする第1・3・5調査区の概要が前章の内容であったが、ここでは別章を立てて、古墳周辺に設定した第2・4・6・8調査区および第3調査区南トレンチの概要を略述する。

**第2調査区** アカハゲ古墳の南西に、北東から南西方向に設定した現状の2段の棚田にかかる6.0×27.0mのトレンチである。黄色粘質土の地山面は北側ではT.P.133.8m、南側ではT.P.132.6～133.3mを測る。地山面上は中世から近代にかけての耕土が堆積する。その最初の耕作地が開墾された段階で旧地形は削平されている。南端には地山面に盛土をして耕作面を揃えた様子がうかがえる。北側で現在の耕土以下で検出された土坑以外に遺構はみられなかった。中世耕土層から土師器・須恵器・瓦器・土師質小皿（第29図11）の細片が少量出土した。

**第3調査区南トレンチ** アカハゲ古墳壇南辺中央に南北方向に設定した10.0×33.0mのトレンチである。砂質土の地山面はT.P.134.5～134.8mで、アカハゲ古墳の壇南端より南へ13.0m付近で北側と南側の棚田の段差がつく。中央付近でピットが3箇所で検出され、そのうちピット2から土師器碗が出土した（第29図10）。

**第4調査区** 第3調査区南トレンチの東に、北西から南東方向に設定した6.0×12.0mのトレンチである。T.P.135.0mの砂礫土の地山面上に中世耕土層が堆積する。北端部で褐色系の上が溜まる浅い落ち込みがみられ、土師器細片が出土した。器種は不明であるが、中世以降の耕土化以前の古い堆積土と思われる。

**第6調査区** アカハゲ古墳の東方の状況を掘むため、東約30.0mの斜面に造成された5～6枚の棚田に対し、南北方向に設定した5.0×35.0mのトレンチである。標高は北端でT.P.143.3m、南端でT.P.135.7m、比高差7.6mを測る。北半では急傾斜で危険なためトレンチ全体にわたって地山面を確認できなかった。部分的には、北端より5.0～9.0mのT.P.139.2～138.0mで明黄褐色の地山粘質土に、19m以南の南半部ではT.P.135.9～135.5mにわたって礫を含む青灰色の粘質土や砂質土の地山面に達した。南半は平石川の蛇行部にあたり、北東から南西にかけて幾度となく流水の攻撃面となっていたことが青灰色の土壤の堆積状況より察知される。これらの地山面の上に累々と棚田造成の盛土がなされている。その大半は耕土や床土の繰り返しであるが、水平堆積のラインを示すのは現耕土面より0.40～0.60mの層厚に認められるだけで、それより以下の堆積土はそれらの耕土層を築くための盛土であったようである。その盛土のうち第56層と第66層において土師器（第29図12）・須恵器・瓦器が出土したが、これらの遺物は以上の棚田造成の客土に紛れ込んだものであろう。遺構としては棚田の段差部に積み上げられた石垣や同じ個所に畦溝を観察したのみである。



第32図 第6調査区断面図

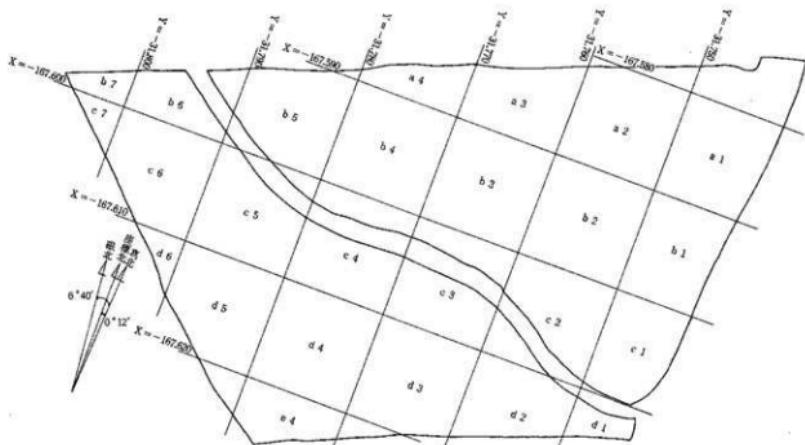
この地点はアカハゲ古墳と東160.0mのツカマリ古墳との間に位置し、両古墳の立地するそれぞれの尾根を区切る谷地形にあたっている。これまでの平石谷の古墳の立地や調査結果から見て、このような地形には後世の棚田の造成や拡張以外の痕跡は認められなかったところであり、ここでのトレンチ調査によっても同じような造成方法を観察できた。

**第8調査区** 第2調査区の東に、南北2段の棚田にそれとほぼ平行する形で設定した6.5×36.0mのトレンチである。黄色粘質土の地山面に中世～近代にかけての耕作土が堆積する。北半部はもう1段あった棚田を近代に削平して1枚の田としたらしく中世耕土層も認められない。南端に残る中世耕土層から土師器・瓦器の細片が出土した。

## 第2節 河川蛇行部の調査（第7調査区）

### 第1項 位置（第5、33図）

7区は、アカハゲ古墳が築造されている尾根の最南端に設定され、調査区北辺はアカハゲ古墳羨道部先端より南方約70.0mの位置にある。本調査区より北西15.0～60.0m以内には、「野田」、「大深」、「土桶」などの小字名の水田が散見し、昨年度調査を実施した第2～7区もここに位置する。調査区は、南東から北西にかけ、等高線に沿って流れる用水路を調査区内に取り込み、南北約35.0m、東西約60.0m、調査面積は約1840m<sup>2</sup>となる。調査前は南に突出する尾根の等高線に沿って開墾された5面の棚田が広がる耕地で、棚田各段の現地表面レベルを北から南へたどると、それぞれT.P.132.6m、T.P.131.6m、T.P.131.1m、T.P.129.6m、T.P.127.7mを測り、南北の高低差は約4.9mとなる。3段目と4段目の棚田の間に現用水路が通る。調査区の南方は尾根の先端で崖面となり、その下方を大きく蛇行しながら平石川が西流する。



第33図 第7調査区区割図

## 第2項 基本層序（第34図）

尾根の張り出し部分に營まれた1～5段の棚田に対して直交するように、北東から南西方向に堆積土の観察位置を決定した（中央南北断面）。さらにこれより東約14.0mの小規模な張り出し部にもそれとほぼ平行するように断面観察位置を設定した（東側南北断面）。また南半部堆積土の状況を把握するため調査区南壁を東西断面として利用した（南壁東西断面）。以上の3箇所の断面図を示して、本調査区の層序を説明する。なお、新闢場に用いられる現耕上層は予め重機により取り除いたので、断面図にはそれ以下の土層のみを示しており、断面図上面に平均0.20mの灰色（5Y4/1）砂質土の耕上が被るレベルが現耕作土上面ということになる。調査区南北断面は3段目と4段目との間の用水路により断ち切られているが、土層自体は連続している。以下記述の便宜上、用水路より北側を北半部、南側を南半部とする。

### 北半部（1～3段目棚田）

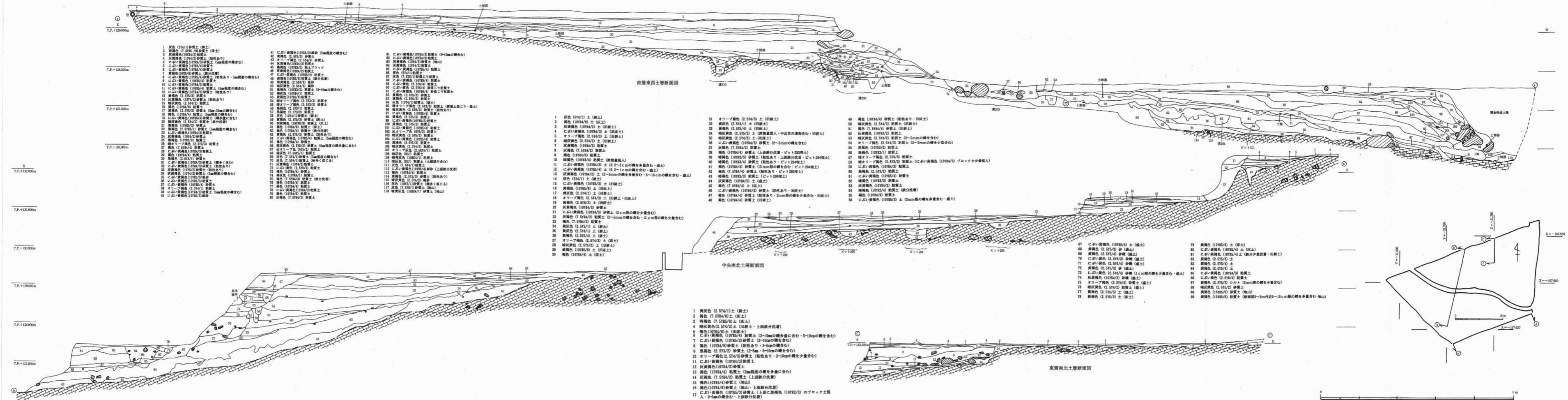
棚田と断面図との位置関係は、1段目棚田が中央南北断面図0～3.0m間に、東側南北断面図全体に、2段目棚田が中央南北断面図3.0～6.5m間に、3段目棚田が同断面図6.5～16m間にそれぞれかかっている。この区域では、地山層の上に棚田整地層と旧耕上・床土層の堆積が観察できた。

地山層 中央南北断面中の第89層である。上面のレベルは、調査区北端でT.P.132.4m、1段目棚田南端でT.P.132.1m、2段目棚田北端でT.P.131.2m、3段目棚田南端でT.P.130.2mを測る。1段目と2段目の棚田では比高差は0.9mあり、急斜面となっているが、それより南方は緩やかな傾斜を見せる。この地山直上を遺構検出面と捉えた。

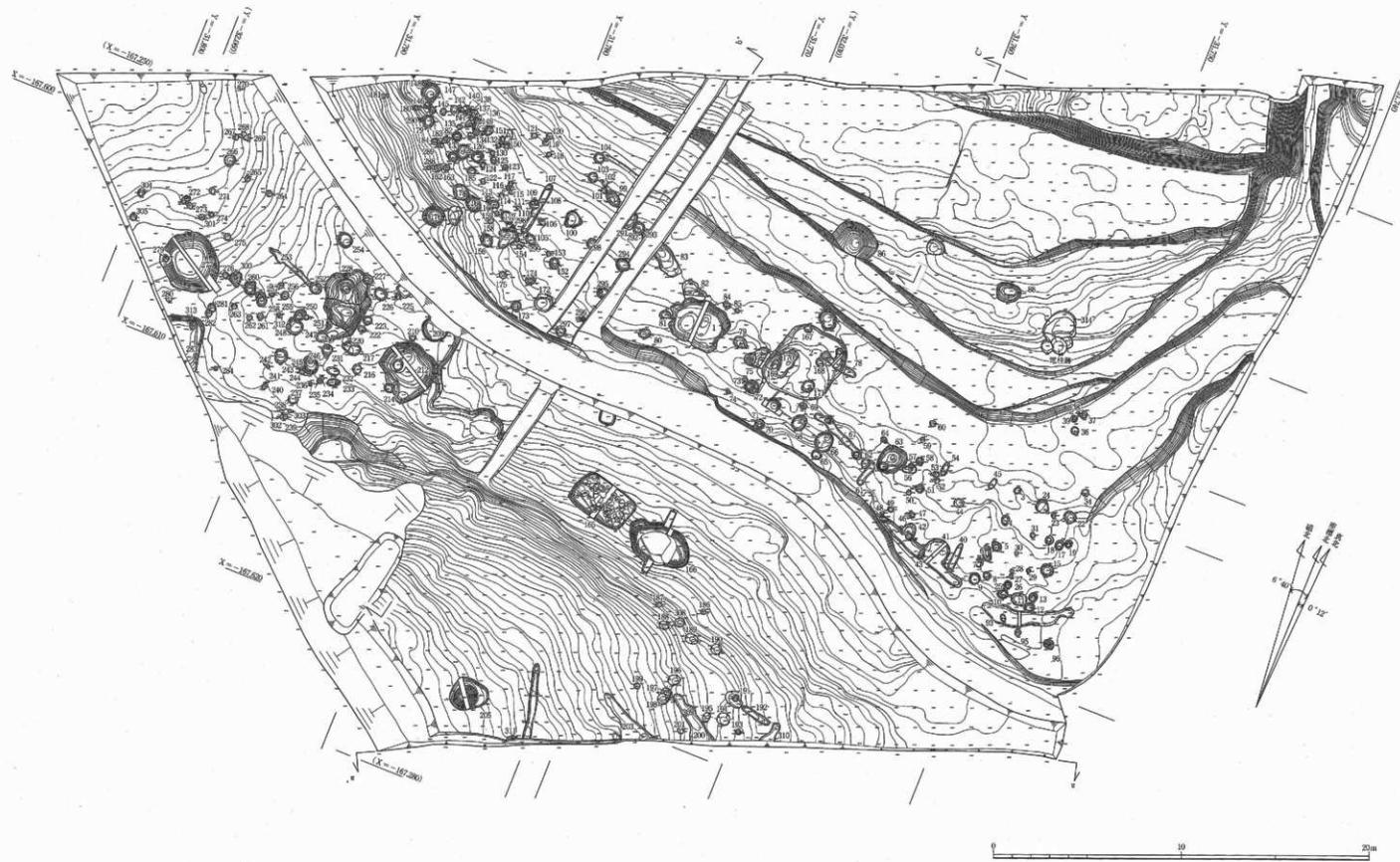
遺物包含層 1段目棚田は第8層、2段目棚田では第21、22層、3段目棚田では第36、37層とした灰褐色や黄褐色の土である。中央断面1段目棚田北方でT.P.132.3m、南方でT.P.131.5m、比高差は約0.8mあり、層厚は約0.1mを測る。2段目棚田ではT.P.131.1m、層厚は約0.15mを測る。3段目棚田では、にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（中央南北断面第36層）が堆積し、北方でT.P.130.9m、南方でT.P.130.4m、比高差約0.5mとなり、層厚は約0.15mを測る。遺物は土師器・須恵器・瓦器・土師質小皿などが出土している。この中世包含層の上にはそれより以降の旧耕土が旧床土と互層をなして堆積している。現耕土以前に繰り返し行われた棚田造成を反映する土層である。

棚田造成土層 中央南北断面に示した1段目棚田の第7層と2段目の棚田の第20層である。1段目棚田でT.P.132.2m、層厚約0.05m、2段目棚田でT.P.131.2m、層厚約0.1mを測る。調査区の北東部は、自然地形が北西から南東にかけて傾斜しているために、低い南東側での整地土は層厚を増している。それは2層に大別することができ、上層はにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（中央南北断面第21層）で、現地表面レベルがT.P.132.4m、層厚は約0.25m、下層は西方でもみられる灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（同断面第22層）で、現地表面レベルがT.P.132.1m、層厚約0.15mとなる。これらの整地土では遺物は出土しなかった。

旧耕土・床土層 どの棚田でも4層確認できる。現地表面レベルと層厚は、1段目棚田



-



第35図 第7調査区検出遺構全体図

T.P.132.4m、層厚約0.2m、2段目棚田T.P.131.4m、層厚0.15m、3段目棚田T.P.130.9m、層厚は0.1～0.4mを測る。

#### 南半部（4～5段目棚田）

両段の棚田の堆積土の状況は、4段目棚田が中央南北断面図17.2～27.6mおよび調査区南端南壁断面図0～18m、5段目棚田が中央南北断面図29.2～32.2mおよび調査区南端南壁断面図23.2～33.4mに反映される。南半部の堆積土は、地山上に下層・中層・上層の遺物包含層（古代～中世）、その上に中世棚田造成土の最上層、そして旧耕土・床土層として観察される。

地山層 中央南北断面の第90層で、北半部が砂質土であったのに対し、南半部では粘質土へと変化している。上面のレベルは、水路南側でT.P.129.4m、中央南北断面図20.6m付近及び調査区南端断面図7m付近でT.P.129.1m、それより南西では急斜面となり、調査区南端ではT.P.125.7m、その比高差は約3.4mである。この地山層上面を遺構検出面と捉えた。

#### 遺物包含層（8世紀～中世） 遺物包含層は3層に大別できる。

下層は調査区の最南端に堆積している粘質土（南壁東西断面図第88・90・108・110層）である。上面のレベルは東方約T.P.127.3m、西方で約T.P.126.1m、比高差約1.2mとなる。層厚は東方約0.4m、西方約0.2mを測る。これらの土層のうち同図第108層では縄文晩期の土器片が出土している。

中層は中央南北断面図中の第63層である。上面のレベルは北方でT.P.128.6m、南方でT.P.126.7m、比高差約1.9mとなる。層厚は約0.3～0.5mを測る。8世紀代の遺物が主体である。この土層と地山面との間で本調査区南西部に堆積する砂質土では遺物は出土しなかった。

上層は黒褐色（10YR3/2）粘質土（中央南北断面第55層）である。4段目棚田全体に堆積する。上面のレベルは北方でT.P.129.0m、南方でT.P.128.4m、比高差約0.6mとなる。層厚は北方約0.1m、南方約0.6mを測る。遺物は8世紀代から中世にかけての遺物を含んでおり、前者の比率が高い。以上のことからこの遺物包含層は8世紀代を中心一部中世にかけて形成されたものと考えられる。

最上層（中世棚田造成土） 中央南北断面図中の第53・54層である。上面のレベルは、4段目棚田T.P.129.0m、層厚約0.2～0.5m、5段目棚田T.P.127.5m、層厚約0.25（東方）～0.70m（西方）を測る。遺物は土師器・須恵器などに混じって、瓦器・土師質小皿など小片となった中世遺物が出土している。その上には、東側水路寄りで灰黄褐色（10YR4/2）粘質土（中央南北断面第52層）が堆積する。中央南北断面では17.2～19.8mの間にこの土層は反映されないが、面としてはほぼ全体的に堆積する。上面のレベルはT.P.129.3m、層厚は約0.1mを測る。遺物は土師器・須恵器に加えて土師質小皿などの中世遺物を含むが、図化できる破片は少ない。

旧耕上・床土層 機械掘削によって新圃場に再利用される現耕土の下に堆積する土である。4段目棚田では4層確認できる。現地表面レベルと層厚は、4段目棚田がT.P.129.6m、層厚約0.5m、5段目棚田がT.P.127.7m、層厚約0.2mである。

#### 第3項 検出された遺構と遺物（第35図）

遺構は調査区中央部、すなわち地山層が緩やかに傾斜している平坦部に集中する。現用水路は

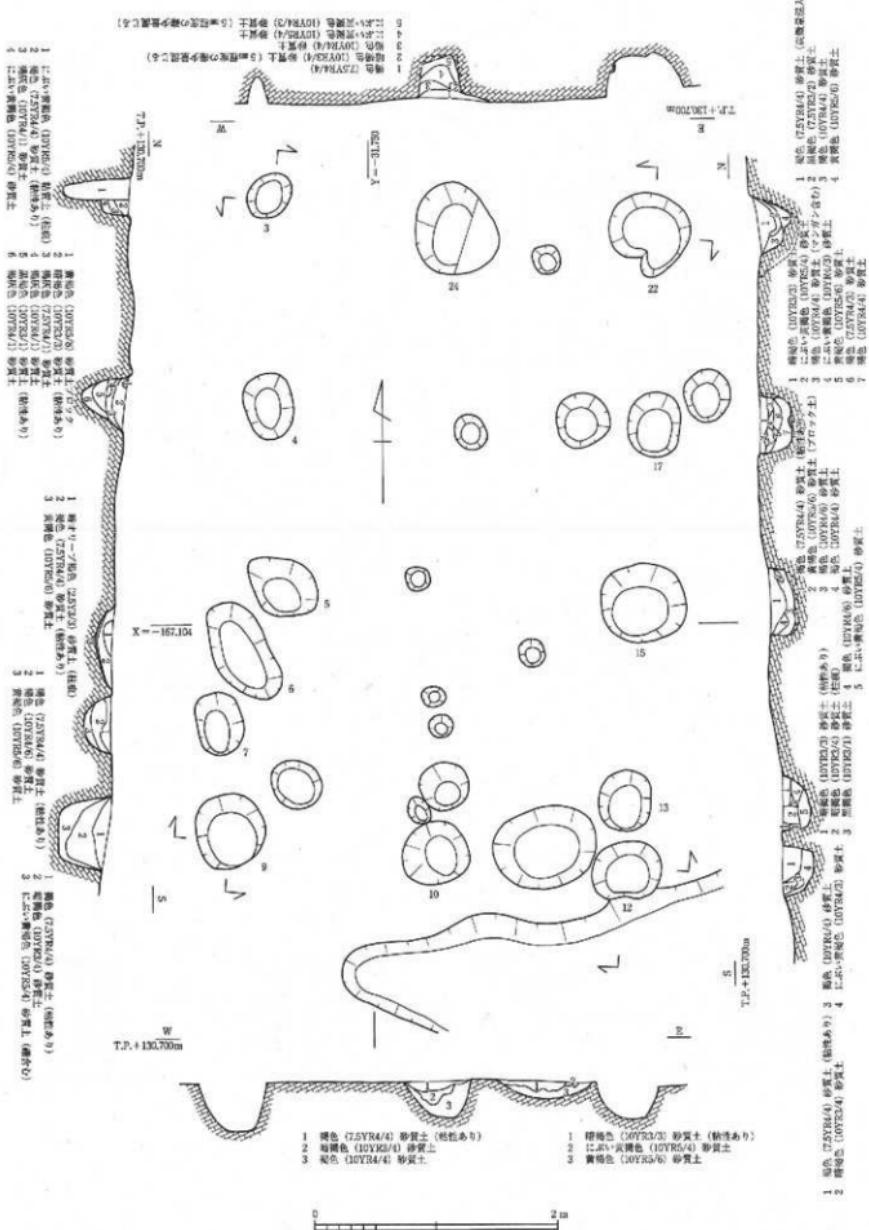
ほぼ等高線に沿って設けられているが、それを境に北側と南側では遺構の内容の違いがある。個別に以下に述べるように、北側では建物をはじめ土器類の廃棄坑や、ピットでもかつては一定の施設を構成していたと考えられるような列をなすものが認められるのに対し、南側では自然の営為に伴う痕跡が目立っている。後世、柵田造成の段階でかなり削平が進んだ結果であると思われるが、この水路設置面の傾斜変換線付近が、舌状に延びる尾根の中世以前の土地利用の南限とみてよいのではないか。以下、個別に主だった遺構について略述する。

**掘立柱建物（第36図）** b・c-2・3で2間×3間の掘立柱建物跡を検出した。検出面の標高は、北側でT.P.130.5m、南側でT.P.130.3mである。主軸方向はN-4°-Eで、ほぼ磁北に合っている。建物の規模は、梁行約3.2m、桁行約5.5mを測り、床面積は約17.6m<sup>2</sup>である。梁行の柱間寸法は約1.6mであるが、桁行の柱間は整然としない。桁行東側の柱間寸法は、北から順に約1.70m、約1.65m、約2.15mである。桁行西側はピット5・6のどちらを採用するかによって異なってくる。ピット5を採用した場合、北から順に約1.75m、約1.40m、約2.35mとなり、ピット6なら、約1.75m、約1.95m、約1.80mとなる。南側梁行はピット10を採用したが、ピット25の可能性もある。ピット25とした場合、桁行長は約5.1mとなり、建物の規模は縮小する。この建物は、ピットの検出状況からみて、改築がなされたと思われる。

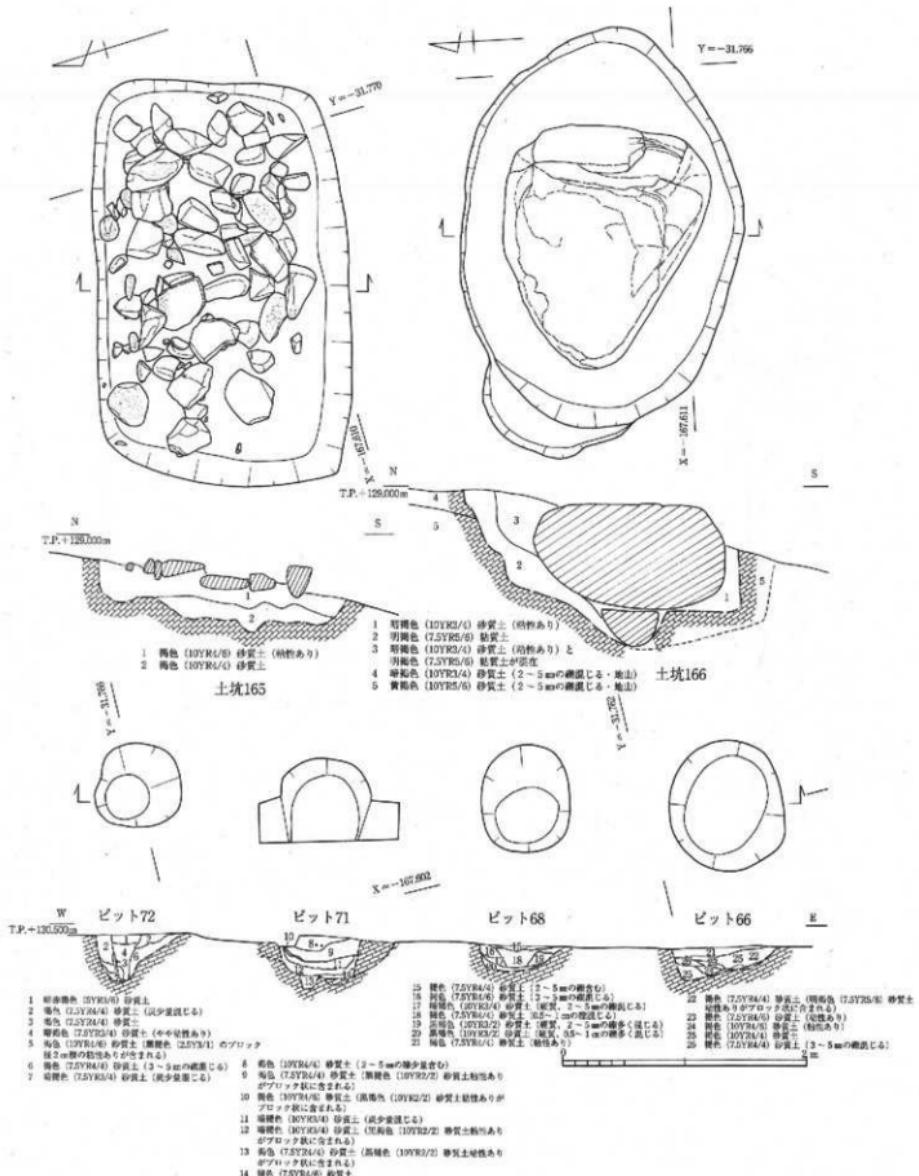
柱掘方は径0.35～0.75m前後の円形～楕円形を呈するものである。断面形は梯形を呈するものが多く、深さは約0.15～0.43mを測る。検出時には、ピット3・4・6・7・13・15・22の柱掘方から柱痕跡を検出したが、断面ではっきりと観察できたのはピット3・5・6・13についてであった。柱痕跡は径約0.2m、深さ0.07～0.57mを測る。柱掘方の埋土は、上面は褐色(7.5YR4/4)～黒褐色(10YR3/3)の砂質土で、それぞれ3～7層に分層できる。ピット5・6・10・25の柱穴から土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはない。

**ピット群** 調査区中央部を中心に、掘立柱建物に関連するピットを除いて、約270箇所のピットを検出することができた。規模は直径約0.2～0.7m、平面形は円形～楕円形、断面形はU字形、深さは0.05～0.25mを測るものが多い。柱痕跡を検出できたものはピット110・171・172・260・295・296である。ピット出土遺物は上師器・須恵器・瓦器などであり、その大半が図化に耐えない小片であるが、10数点ほど図化できた（第40図15～28）。一方、調査区南半部のd-2・3範囲を中心に検出されたピット群は、検出面では包含層の溜まりが認められたが、掘り下げるに、一様に炭化した腐植土が堆積し、壁面には小さい穴が各所に認められたことから、樹根の痕跡とみられる。よってかつて一帯は現在の対岸のような山林であった可能性が高い。

**ピット列66・68・71・72（第37図）** 以上のピット群のうち、c-3で検出したこれらのピットは、堆積上・方向・規模などの点で上記のピット群とは区別されるものである。列の検出長は約6mで、方向はN-75°-Wである。建物を構成するのか、または廻の一部を成すものかと考え、周辺を詳しくみたが、並ぶのはこの4箇所のピットだけだった。柱掘方の規模は径約0.7～1.0mで、平面形は楕円形～隅丸方形を呈する。断面形は、ピット66・68は皿形、ピット71・72



第36図 掘立柱建物平面・断面図



第37図 土坑・ピット列平面・断面図

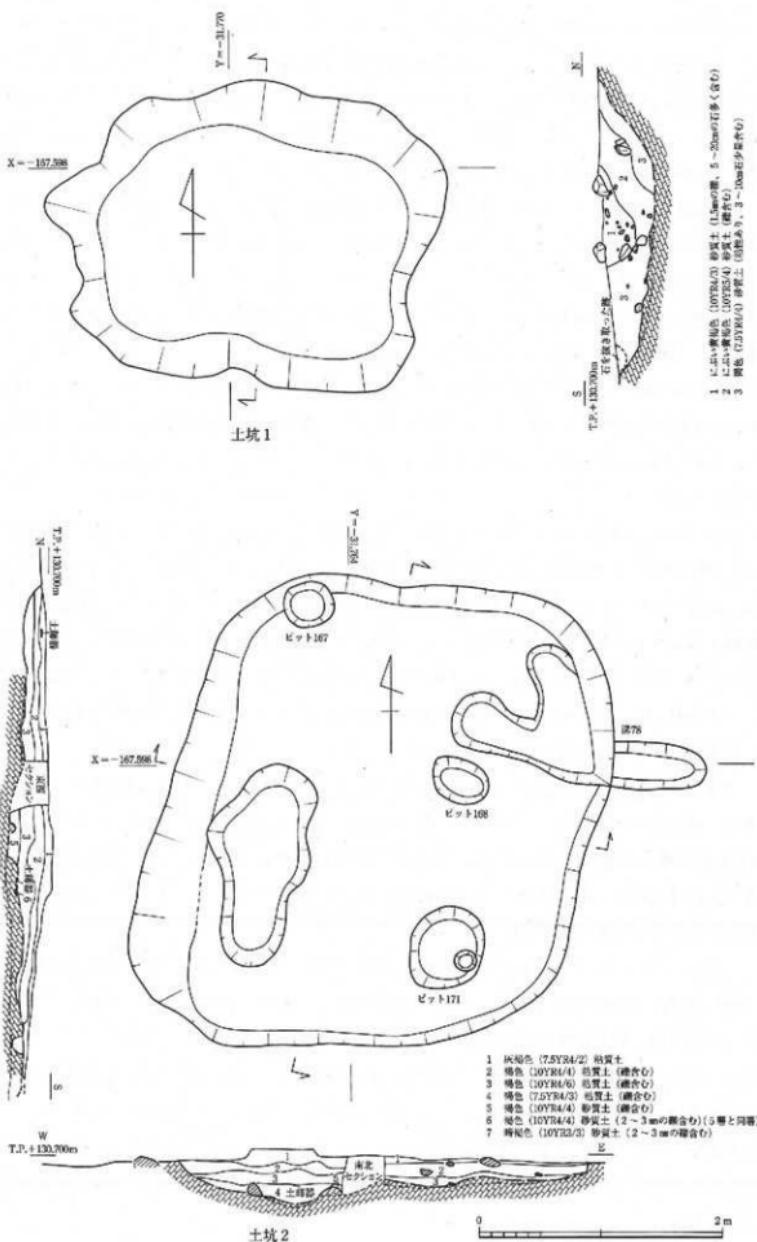
は楕形を呈する。深さは、ピット68は0.20m、他のピットは約0.38mを測る。柱痕跡はピット71・72で検出されており、ピット71は柱径0.22m、深さ0.08m、ピット72は柱径0.25m、深さ0.36mを測る。埋積土は、上面はいずれも褐色(7.5YR4/4)砂質土であり、6~7層に分層できる。遺物はピット68・71・72から土師器・須恵器の小片が出土している。うち図化できたのは8世紀前半の土師器甕口縁部である(第40図20)。

井戸209(第39図)c-5で検出した。北半は未調査である。現状の規模は南北0.92m以上、東西1.33mで、平面形は円形を呈するものと思われる。断面形は台形を呈し、深さは0.57mを測る。上面を耕作土が覆い、その下が井戸の埋土となり、7層ほどに分けられる。井戸が埋没した後に0.85×0.35×0.31m大的石が転落していた。最下層(第13層)上面には木板が敷かれていた。木板は、5枚の板状に加工された木材をつなぎ合わせて円形に仕上げられている。接合部にはかすがいの留め痕だけが認められた。規模は径1.16m、厚さ0.03mを測る。木板の上面には、0.05~0.10mの拳大の自然石が全面に敷き詰められていた。遺物は、上層で土師質小皿片が1点出土しているが、図化しえなかった。下層では鉄釘が出土している。現用水路設置以前の天水溜めの井戸と考えられる。

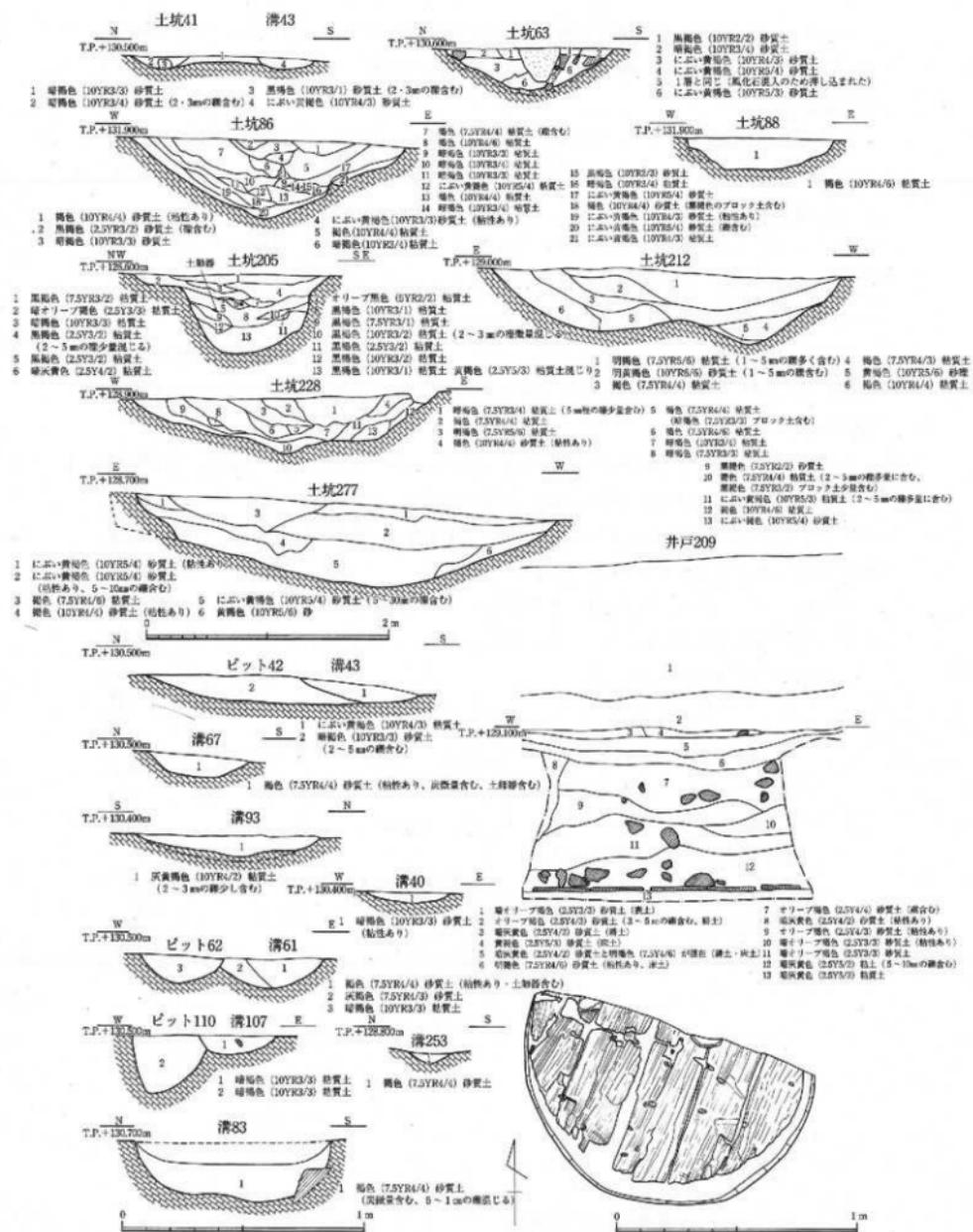
土坑(第37~42図)ピットより比較的大きい規模の穴を土坑として区別した。これらの土坑は、8世紀前半~中頃を中心とする遺物が礫と共に投棄されたもの(土坑1、2)、中世以降に棚田造成に妨げとなる石を埋め込むために掘られたもの(土坑165、166、314など)、平面不定形で、堆積土はレンズ状を示し、遺物はほとんど出土せず、風倒木の痕跡とみられるもの(土坑212、277、228、283)に分けられる。そのほかにこれらの土坑よりも小規模でピットよりは大きいものの(土坑41、63、86、88、205など)がある。遺物はほとんど出土せず、出土する場合でも上層に溜まる包含層からの遺物である。

土坑1 b-3・4で検出した。長辺(東西)3.05m、短辺(南北)2.43m、平面形は不整形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.45mを測る。埋土は3層に分層できる。第1層には0.05~0.20m程の礫が多量に含まれていた。各層から土師器・須恵器が出土したが、細片のため図化できるものは少ない。出土遺物からは8世紀前半から中頃の時期が考えられ、土坑は開墾によって整地された際の投棄穴と思われる。

土坑2 b-c-3で検出した。検出した時点では、上面に灰褐色(7.5YR4/2)粘質土の包含層(第1層)が残っていたため、長辺(南北)5.60m、短辺(東西)3.50mの不整な形として捉えた。包含層を取り除き遺構の規模を確認すると、長辺(南北)3.85m、短辺(東西)3.40mとなり、隅丸方形となった。断面形は皿形を呈し、深さは0.30mを測る。埋土は7層に分層でき、多くの遺物は埋土上層から出土している。遺物は土師器・須恵器・製塙土器など8世紀前半の土器類が中心であるが、一部中世包含層からの混入と思われる土師質小皿も含まれている。土坑2の底面ではピット167・168・171、溝169・170を検出した。この土坑も開墾の過程での投棄穴と考えられる。



第38図 土坑 1・2 平面・断面図



第39図 土坑・溝断面図、井戸平面・断面図

土坑41 c-2で検出した。南半は溝43によって切られているが、径約1.4mの円形を呈するものと思われる。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.18mを測る。埋土は3層に分層できる。遺物は土師器片が出土している。

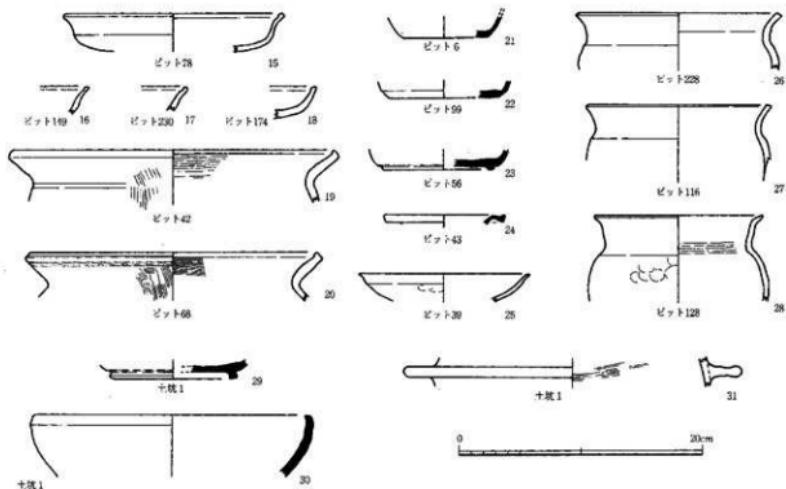
土坑63 c-2で検出した。一辺1.40mの隅丸方形に近い不整形を呈する。断面形は楕形を呈し、深さは0.38mを測る。埋土は6層に分層できる。遺構上面に0.2~0.4m程の疊が多量に堆積していた。遺物は出土しなかった。

土坑86 b-3で検出した。南北は削平されていたため不明であるが、現状の規模は南北1.5m以上、東西2.27mで、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。断面形は楕形を呈し、深さは0.63mを測る。埋土は21層に大別できる。遺物は出土しなかった。

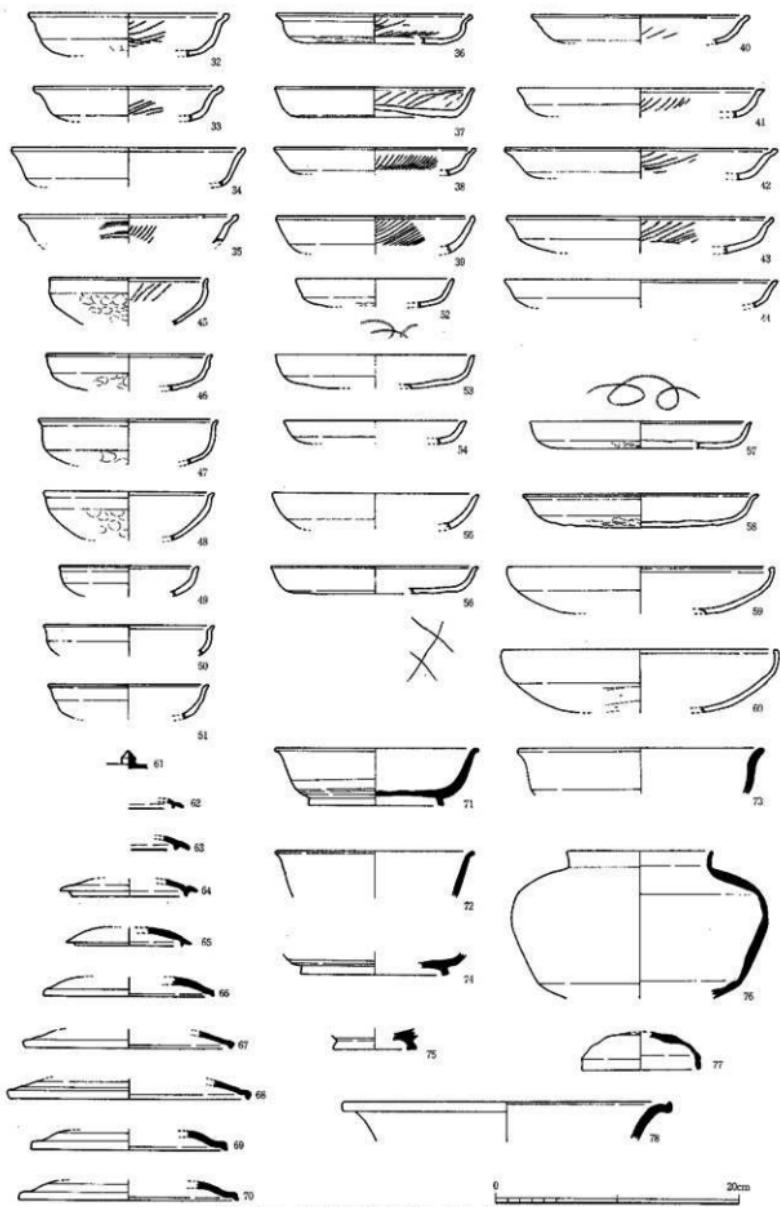
土坑88 b-2で検出した。長辺（東西）1.30m、短辺（南北）1.00m、平面形は楕円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.20mを測る。埋土は褐色（10YR4/6）粘質土の1層である。遺物は出土しなかった。

土坑165 c・d-3・4で検出した。長辺（東西）3.50m、短辺（南北）2.00m、平面形は長方形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.40mを測る。埋土は2層に分層できる。遺構上面には、0.1~0.5mを測る河原石が敷き詰められていた。遺物は8世紀前半~中頃の土師器甕口縁部、須恵器坏蓋、サヌカイトなどの破片が出土している。

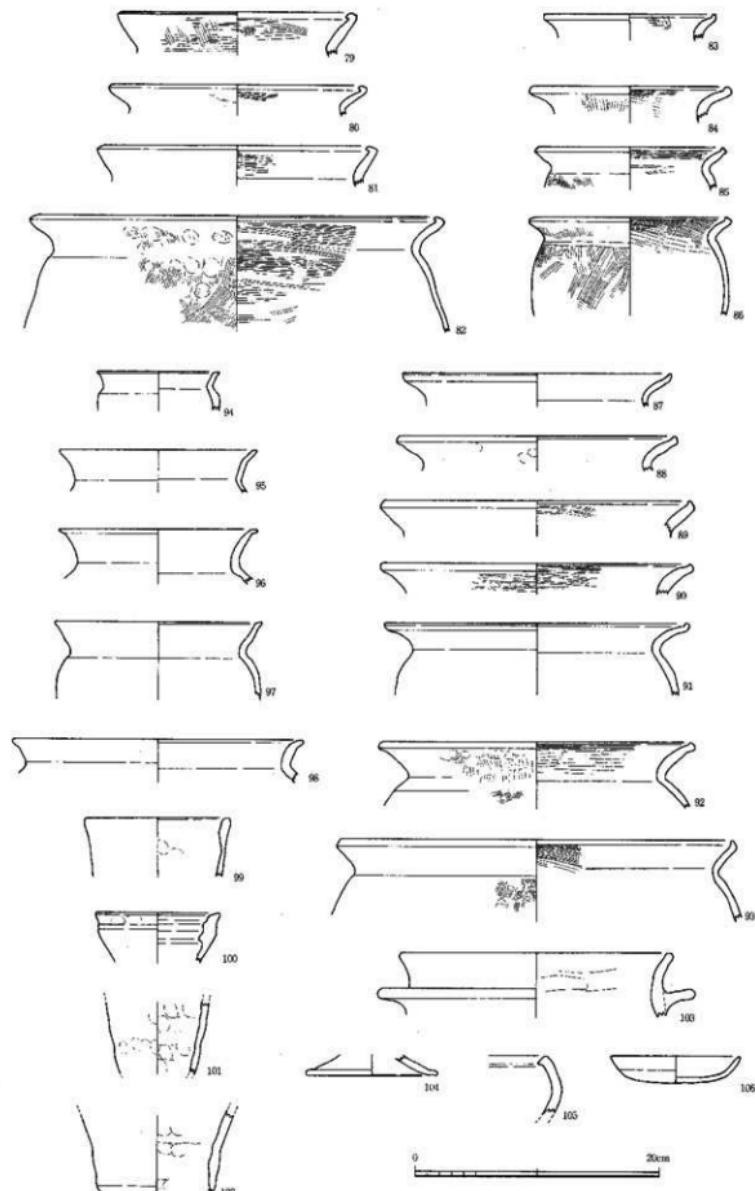
土坑166 c・d-3で検出した。長辺（東西）3.25m、短辺（南北）2.30m、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは1.15mを測る。埋土は3層に分層できる。遺構上面



第40図 第7調査区ピット・土坑1出土土器



第41図 第7調査区土坑2出土土器 (1)



第42図 第7調査区土坑2出土土器(2)

には $1.2 \times 1.8 \times 0.8$ mの大石があり、その下には $0.55 \times 0.38 \times 0.40$ mの石があった。遺物は8世紀前半～中頃の土師器、製塙土器、サヌカイトなどの破片が出土している。

土坑205 e-4で検出した。直径1.30mで、平面形は円形を呈する。断面形は楕円形を呈し、深さは0.70mを測る。埋土は13層に分層できる。遺物は土師器片が出土している。

土坑212 c-5で検出した。規模は南北・東西ともに3.00mを測り、平面形は不整形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.57mを測る。埋土は6層に分層できる。埋土の堆積状況より、風倒木痕と思われる。遺物は出土しなかった。

土坑228 c-5で検出した。南北4.10m、東西2.60m、平面形は不整形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.56mを測る。埋土は13層に分層でき、遺物は土師器片が出土している。

土坑277 c-6で検出した。南北2.80m、東西3.45m、平面形は不整円形を呈する。断面形は皿形を呈し、深さは0.70mを測る。埋土は6層に分層でき、遺物は出土しなかった。土坑212同様、風倒木による土坑であると思われる。

土坑314 調査区の北東端の尾根の傾斜変換線付近(T.P.131.5～131.6m)に掘り込まれた不定形の穴である。1.0×1.5m大の石がその穴に投棄されていたが、石の下には電柱の基礎を支える横木があり、それに南接して電柱の基礎部分が残っていた。おそらく旧の里道に沿った電柱の埋め込み穴であり、里道は幅2mほどの地山を平坦に削りだした面が東西に通っている。この付近の東南の崖面に平石谷の対岸へ渡る橋がかかっており、また北東にはアカハゲ古墳の東端に沿う現在の里道が南北に通じている。おそらくこの里道跡はかつてはそれらの往来と結びついていたのであろう。

溝(第39図) 検出された溝は、耕作に伴う鋤溝の痕跡や低地の凹凸に伴う流水の痕跡である。これらの溝の覆土からはその上に堆積する包含層や旧耕作土と同様な遺物が出土する場合がある。出土した遺物はいずれも細片で図化できるものはほとんどない。主だった溝について述べる。

北半部耕作溝では、傾斜面の等高線に沿う溝として、溝43、67、90があり、それに直行する形の溝としては溝40、61、107がある。溝43はc-2で検出した。検出延長5.70m、幅0.60m、方向はN-70°—Wで、直線的に延びている。断面形は皿形を呈し、深さは0.07mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土の1層で、遺物は土師器、須恵器の細片(甕体部片含む)が出土している。溝67はb-2・3で検出した。検出延長3.40m、幅0.40m、方向はN-70°—Wで、直線的に延びている。東端には径0.47m、深さ0.35m、平面形が円形を呈するピットにあたる。断面形は皿形を呈し、深さは0.09～0.11mを測る。埋土は褐色(7.5YR4/4)砂質土(粘性あり・炭微量混入)の1層で、遺物は土師器甕体部片、須恵器杯蓋で内面のかえりが口縁端部の線より上になる破片が出土している。溝93はc-1で検出した。検出延長4.90m、幅0.76m、方向はN-65°—Eで、やや弧状に延びている。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.11mを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(2～3mmの砾を少量含む)の1層で、遺物は土師器小片が出土している。溝40はc-2で検出した。検出延長1.51m、幅0.35m、方向は磁北に沿い、直線に延びている。

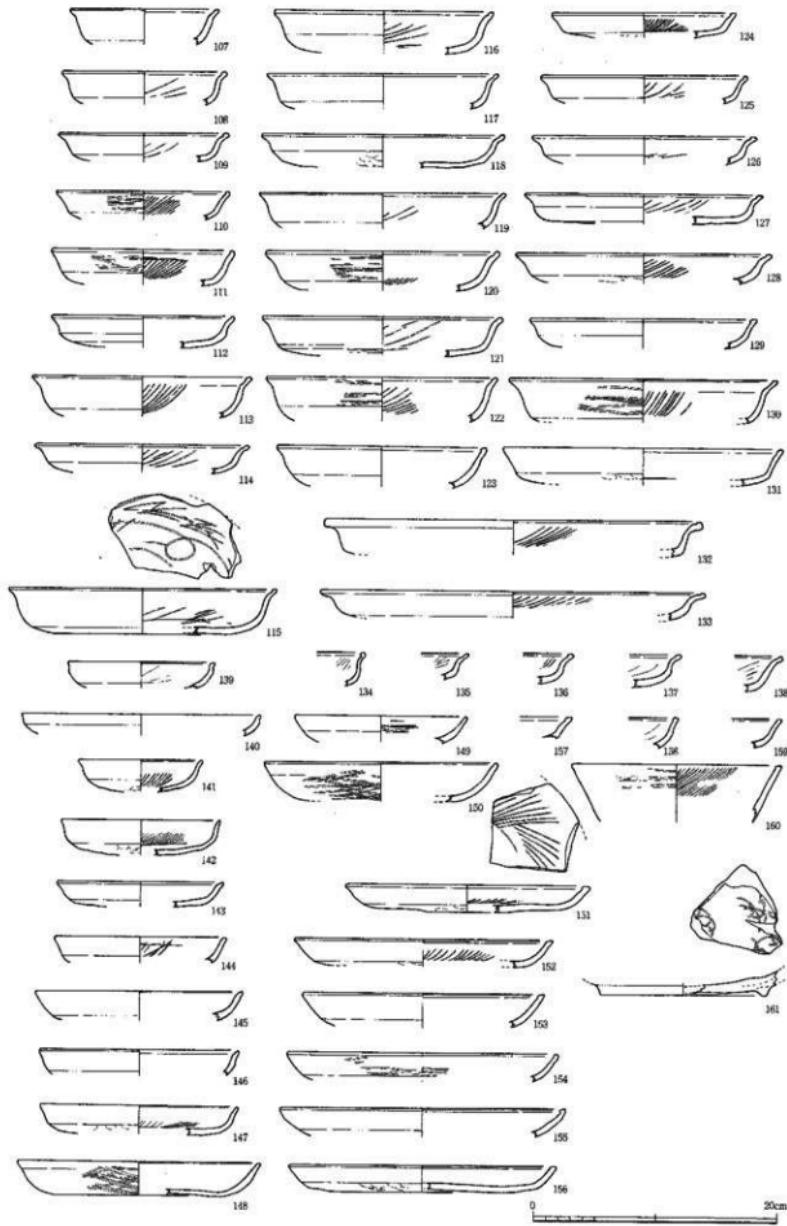
断面形は浅い皿形を呈し、深さ0.04mを測る。埋土は暗褐色（10YR3/3）砂質土（粘性あり）の1層で、遺物は土師器窓体部片が出土している。南北に長いピット45と並んで建物の西辺を画する可能性もある。溝61はc-2で検出した。検出延長1.47m、幅0.41m、方向はN-15°-Eで、直線的に延びている。北端西側でピット62に切られている。断面形は皿形を呈し、深さは0.12mを測る。埋土は2層あり、上層は褐色（7.5YR4/4）砂質土（粘性あり）、下層は灰褐色（7.5YR4/3）砂質土である。遺物は土師器窓体部片が出土している。溝107はb-4・5で検出した。検出延長3.05m、幅0.35m、方向はN-10°-Eで、直線に延びている。西側にあるピット110を切っている。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.08mを測る。埋土は暗褐色（10YR3/3）粘質土の1層で、遺物は土師器杯または皿の破片が出土している。

南半部で検出した溝は、用水路以南の傾斜面の砂もしくは砂質土に刻み込まれた流水の痕跡が大半である。したがって北の高所から南の低所に向かう方向を示すものが目立っている。溝200、203、204、310などがそうである。溝200はd-3で検出した。検出延長は2.75m、幅0.60m、方向はN-50°-Wで、直線的に延びている。南方にかけて幅が広くなっている。南端は調査区外で不明である。溝の底面からピット309を検出した。断面を観察すると、細砂～粘質土層が交互に入り組んでラミナを呈し、流水の痕跡を示している。遺物は土師器杯または皿の破片、須恵器は窓体部片、それにサヌカイトの小片が出土している。溝203はd・e-3で検出した。検出延長2.60m、幅0.53m、方向はN-60°-Wで、直線的に延びている。南方にかけて両肩ともに膨らんでいき、そこには0.2~0.5m程の石が堆積していた。南端は調査区外で不明である。埋土は2層に大別することができ、上層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土、下層は黒褐色（2.5Y3/2）粘質土である。埋土の堆積状況から、溝200と同様、流水の痕跡と考えられる。遺物は土師器小片が出土している。溝204は、d・e-4で検出した。検出延長4.05m、幅0.40m、方向はN-15°-Wで、直線に延びている。南端は調査区外で不明である。断面形は楕形を呈し、深さは0.20mを測る。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）粘質土の1層で、遺物は土師器杯または皿の体部片、須恵器は窓体部、底部の破片、サヌカイト片が出土している。溝310はd-2で検出した。検出延長1.00m、幅0.35m、方向はほぼ磁北に沿い、南方にかけて幅が広くなっている。南端は調査区外で不明である。断面形は皿形を呈し、深さは0.22mを測る。埋土は褐色（7.5YR4/4）砂質土の1層で、遺物は土師器窓体部の破片が出土している。溝253は北半部の地山のc-5・6で検出した東西溝であるが、この付近は北半部の地山が狭い舌状となって南へ延びるところであり、土地利用の条件としてはむしろ用水路以北の北半部と同様である。したがってこの溝も東西の等高線に沿った溝と理解できる。検出延長2.90m、幅0.30m、方向はN-70°-Wで、直線的に延びている。東端はピット252に切られている。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.03~0.08mを測る。埋土は褐色（7.5YR4/4）砂質土の1層で、遺物は土師器片が出土している。

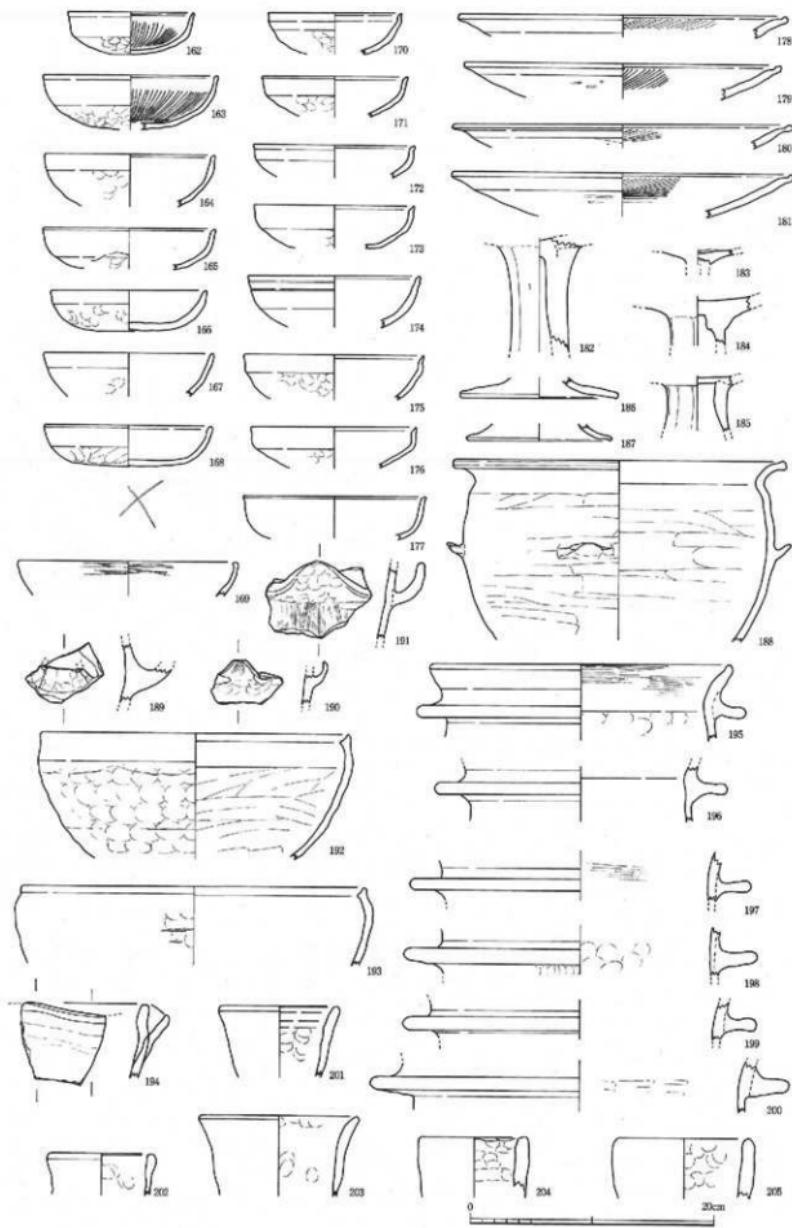
その他の溝としてはb-4で検出した溝83がある。検出延長1.80m、幅0.90m、方向はN-60°-Wで、直線的に延びている。北端は側溝により削平されている。ピット293の埋土の堆積状況

と類似することから、ピット293は溝83の北端部の可能性がある。そうであるならば、検出延長は2.90mとなる。断面形は皿形を呈し、深さは0.25mを測る。埋土は褐色（7.5YR4/4）砂質土（5～10mmの礫を含む・炭微量混入）の1層である。この溝の堆積土は土坑1や2にみられた褐色土と似ているので、中世以前、おそらくは8世紀代の遺構とみられる。遺物は土師器杯または皿の口縁部片、壺体部片、製塙土器片が出土している。これらの遺構の出土土器は小片が多く、図化しえなかつたが、いずれも8世紀代の土師器、須恵器と考えられる。

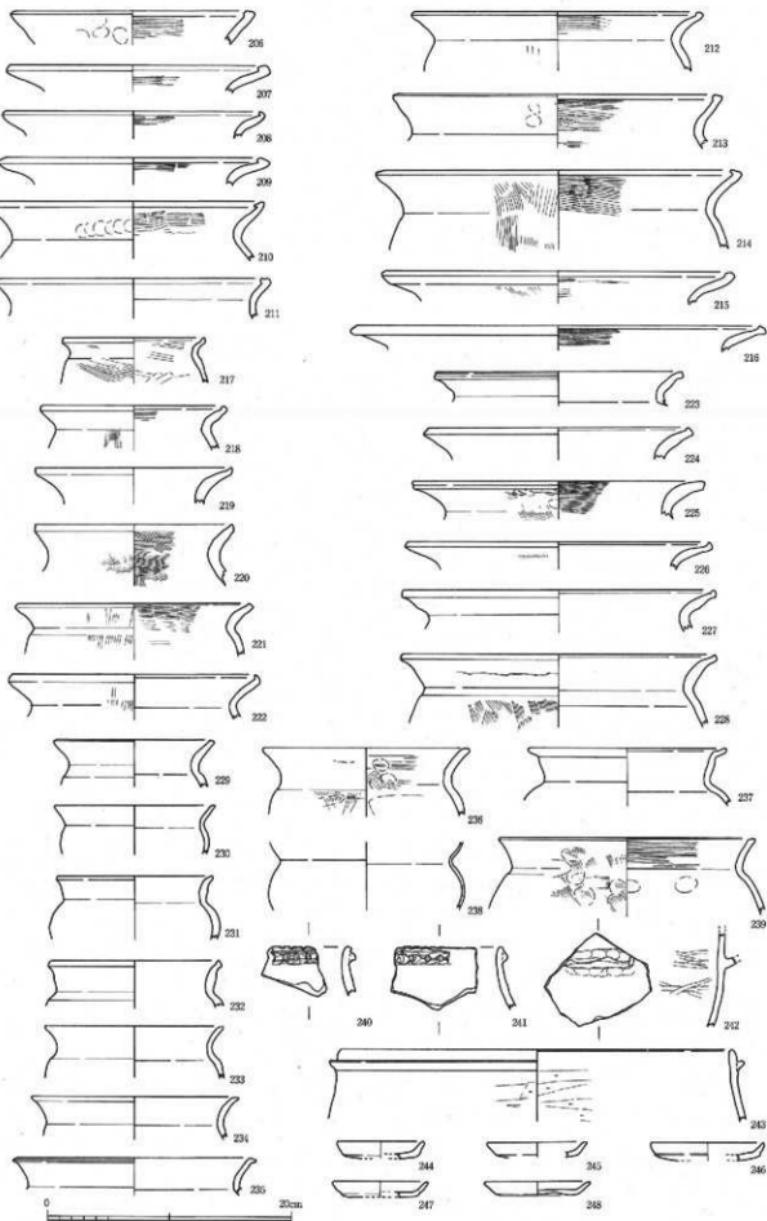
包含層出土遺物（第43～47図） 調査区南半部を中心に古代～中世の土器片がコンテナ10箱程度出土している。これには調査区南西隅の平石川に落ち込む崖面に近接する箇所で、斜面に堆積する土層より出土した縄文晩期の土器片が含まれる。大きく3つの堆積層を以て形成される包含層であるが、最上層のものは中世遺物を含み、おそらく水平な棚田を造成するための盛土と考えられる。それより以下の8世紀代を主とする遺物を含む包含層が傾斜面に流れ落ちたような斜面堆積をなすとの対照的である。このことからも当地に本格的な棚田開発が始まったのは13～14世紀頃と考えられる。一方、中世以前はおそらく北半部で中世の開発からかろうじて残った遺構（土坑2や掘立柱建物）にみられるように、南半部の包含層出土遺物もおそらくこの北半部の地山の安定した高所より遊離したものと考えられる。



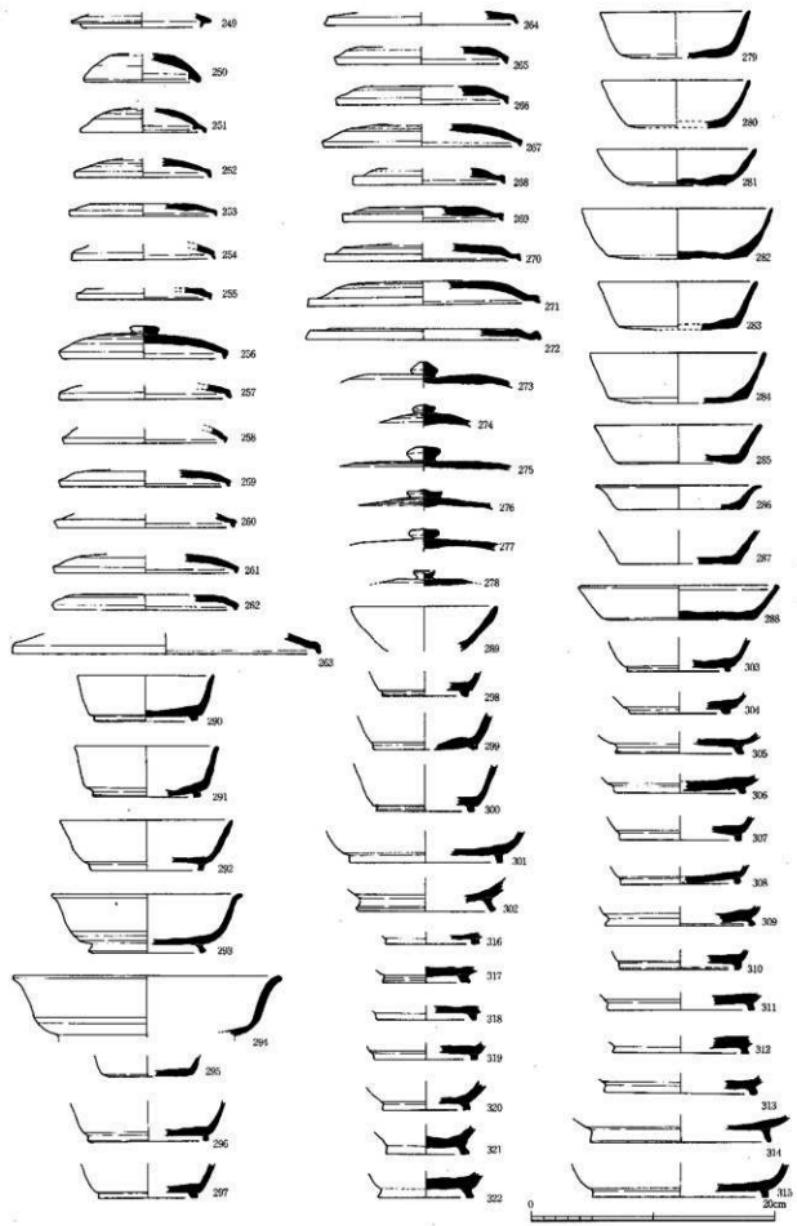
第43図 第7調査区包含層出土土器（1）



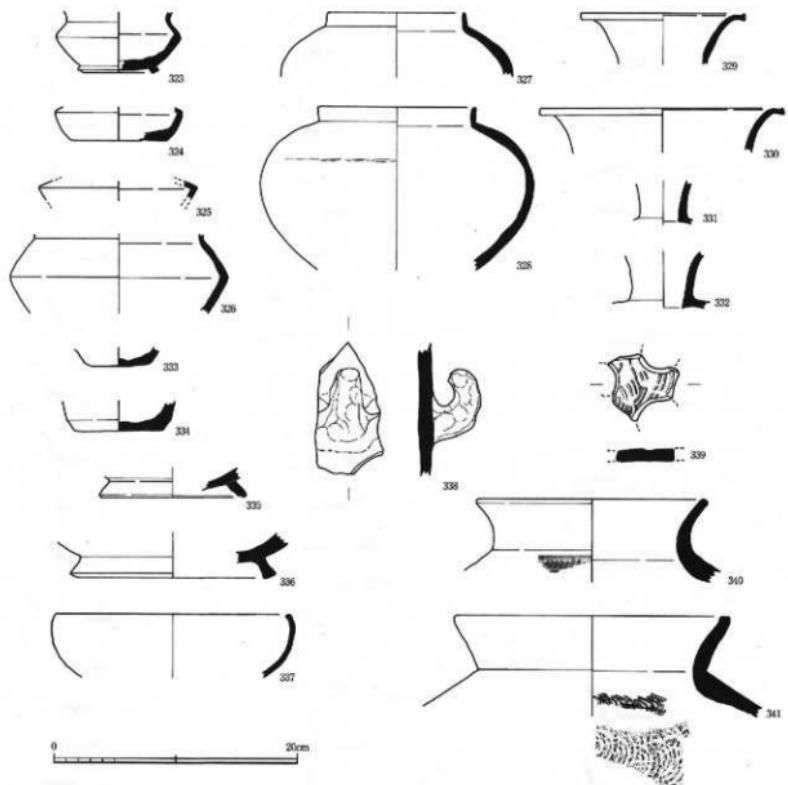
第44図 第7調査区包含層出土土器（2）



第45図 第7調査区包含層出土土器（3）



第46図 第7調査区包含層出土土器（4）



第47図 第7調査区包含層出土土器（5）

## 第4章 アカハゲ古墳の貼石・敷石の石種とその採石地

奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田尚

河南町の平石谷にあるアカハゲ古墳の墳丘に貼られた石とテラスに敷かれた石を裸眼で観察した。石材の石種の特徴と採石推定地について述べる。

### 石材の石種の特徴と採石推定地

アカハゲ古墳が位置する付近の平石谷では黒雲母花崗岩・片麻状斑雲母花崗岩が分布し、東方の平石から岩橋山にかけては角閃石が目立つ閃緑岩、平石谷の南部では角閃石黒雲母石英閃緑岩(葛城石英閃緑岩)が分布する。また、北方の峰を越えた山田付近には輝石が目立つ斑纈岩が分布し、飛鳥川の北側には二上火山岩の噴出物が分布する。このような岩石分布をふまえ、観察した石材の石種の特徴と推定される採石地について述べる。識別した石種は中粒アブライト・粗粒アブライト・細粒黒雲母花崗岩・中粒黒雲母花崗岩・粗粒黒雲母花崗岩・中粒角閃石黒雲母石英閃緑岩・中粒花崗閃緑岩・中粒閃緑岩・中粒斑纈岩・片麻状細粒黒雲母花崗岩・片麻状中粒黒雲母花崗岩・流紋岩質凝灰角礫岩・石英斑岩・流紋岩・石英安山岩・安山岩・輝石安山岩・玄武岩・流紋岩質溶結凝灰岩である(表1参照)。

中粒アブライト：色は灰白色で、粒形が角である。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が非常に多い。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

石種	石材の使用位置								石材の採取推定地
	西側1段目	西側2段目	西側3段目	南側2段目	南側3段目	南側4段目	東側2段目	東側3段目	
中粒アブライト	6	13	11	2	13	4	8	14	当付近の平石川
粗粒アブライト					4				当付近の平石川
細粒黒雲母花崗岩	46	61	21	86	175	4	92	26	当付近の平石川
中粒黒雲母花崗岩	51	34	11	74	75	5	48	26	当付近の平石川
粗粒黒雲母花崗岩	29	32	7	35	26	3	18	7	当付近の平石川
中粒角閃石黒雲母石英閃緑岩	3	7	2	17	4		9	3	当付近の平石川
中粒花崗閃緑岩	19	48	14	58	56	4	40	19	平石の山麓
中粒閃緑岩	8	13	4	15	17	5	16	6	平石の山麓
中粒斑纈岩				3	1		1	1	山田付近
片麻状細粒黒雲母花崗岩	6	13	8	21	10	2	10	5	当付近の平石川
片麻状中粒黒雲母花崗岩	15	9	6	44	35	4	23	12	当付近の平石川
流紋岩質凝灰角礫岩(鹿谷寺火成岩)	2				2				鹿谷寺跡北方
石英斑岩	7	1		3	3	1	7	1	
流紋岩(雄岳火成岩)		1		3			2	1	春日付近の飛鳥川
石英安山岩(寺山火成岩)				6					飛鳥北方
安山岩					8				
輝石安山岩(春日山火成岩)	9	4					9	6	春日付近の飛鳥川
玄武岩(芝山火成岩の岩脈)	1								
流紋岩質凝灰岩(喜生火成岩)	1				4	6		1	里生ダムの北方
合計	203	236	84	371	435	32	283	128	

表1 アカハゲ古墳の石材の使用位置と石種構成 (数字は個数)

粗粒アプライト：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英・長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が5~8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が5~15mm、量が多い。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

細粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1~1.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1~1.5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~5mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1~2mm、量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

粗粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が亜角～亜円である。媒乱しているものが多い。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3~4mm、量が中である。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

中粒角閃石黒雲母石英閃綠岩：色は灰白色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3~4mm、量がごく僅かである。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2~4mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が3~6mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は平石の南方の葛城山に分布する石である。平石の南方の谷にみられる。

中粒花崗閃綠岩：色は灰色で、粒形が亜角である。石英・長石・黒雲母・角閃岩が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~3mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が4~6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が2~3mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は平石の東方の岩橋山の西麓の谷にみられる。

中粒閃綠岩：色は灰色で、粒形が角である。長石・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が3~5mm、量が非常に多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2~6mm、量が中である。

このような岩相を示す石は平石の東方の岩橋山の西麓にみられる。

中粒斑櫛岩：色は暗灰緑色で、粒形が亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2~3mm、量が中である。角閃石は黒色、粒状で、粒径が2~4mm、量が多い。輝石は暗緑色、粒径が2~3mm、量が中である。

このような岩相を示す石は山田付近に分布する斑櫛岩の岩相の一部に似ている。山田付近の谷川で採石されたと推定される。

片麻状細粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が角である。顯著な片麻状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5~1mm、量が中である。長石は灰白色、

粒径が0.5~1mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

片麻状中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が角である。顯著な片麻状をなす。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2~3mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。片麻状の方向に沿う5~15mmのレンズ状部に集合している。

このような岩相を示す石は平石川の川原にみられる。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰白色である。構成粒は溶結凝灰岩と軽石である。溶結凝灰岩は暗褐色で、粒形が亜円~円、粒径が5~30mm、量が中である。軽石は灰白色、粒径が5~20mm、量が中である。基質は白色、緻密である。

このような岩相を示す石は二上層群下部とドンヅルボー層の凝灰角礫岩の岩相の一部に似ている。鹿谷寺跡北方付近が採石地と推定される。

石英斑岩：色は淡灰色で、粒形が角である。石英の斑晶が散在する。石英は無色透明、粒径が1~4mm、量が中である。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は岩脈の石と推定される。採石地不明。

流紋岩：色は白色で、粒径が亜円である。流理があり、黒雲母が流理の方向に並んでいる。斑晶鉱物は長石・黒雲母である。長石は灰白色、粒径が0.5mm、量がごく僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上層群の雌岳火山岩の岩相の一部に似ている。川原石様であることから、飛鳥川の川原で採石されたと推定される。

石英安山岩：色は青灰色で、粒形が亜角である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明で、融蝕されたものと自形をなすものとがある。融蝕された石英は球状で、粒径が4~5mm、量がごく僅かである。自形をなす石英は粒径が1~3mm、量が僅かである。長石は灰白色で、融蝕されたものと自形をなすものとがある。融蝕された長石は梢円形で、粒径が5~8mm、量が僅かである。自形をなす長石は粒径が2~4mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2~3mm、量がごく僅かである。石基はやや粒状で、ガラス質である。

このような岩相を示す石は寺山火山岩の岩相の一部に似ている。鉢伏山の南西斜面にある観音塚古墳付近で採石されたと推定される。

安山岩：色は灰褐色で、粒形が亜角である。球状の発泡孔があり、孔径が2~6mm、量が中である。流理があり、黒雲母が流理の方向に並んでいる。斑晶鉱物は長石と黒雲母である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2~4mm、量が僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上層群の噴出物には認められない。信貴山付近に分布する安山岩岩脈の岩相に似た石があることから、平石谷でも岩脈で分布することが予測される。採石地不明。

輝石安山岩：色は灰白色で、断面は暗褐色である。粒形は角で、流理がある。斑晶鉱物は長石・輝石である。長石は灰白色、粒径が $0.5\sim1\text{mm}$ 、量が僅かである。輝石は黒色、柱状で、粒径が $0.5\sim1\text{mm}$ 、量が僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上層群の春日山火山岩や石まくり火山岩の岩相の一部に似ている。川原石様であることから、飛鳥川の川原で採石されたと推定される。

玄武岩：色は灰色で、断面は黒色である。粒形が亜角である。斑晶鉱物は長石・輝石・橄欖石である。長石は無色透明、短柱状で、粒径が $1\sim2\text{mm}$ 、量が中である。輝石は黒色、短柱状で、粒径が $1\sim1.5\text{mm}$ 、量が僅かである。橄欖石は黄色透明で、粒状、粒径が $0.5\sim1\text{mm}$ 、量が僅かである。石基はややガラス質である。

このような岩相を示す石は二上山付近に岩脈として分布する玄武岩の岩相の一部に似ている。

流紋岩質溶結凝灰岩：色は灰色、灰白色で、板状節理が顕著である。顕著な溶結を示す。構成鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は褐色透明・無色透明で、粒径が $2\sim5\text{mm}$ 、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は白色透明・無色透明で、短柱状、粒径が $2\sim4\text{mm}$ 、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が $2\sim3\text{mm}$ 、量が僅かである。基質はガラス質である。

このような岩相を示す石は宇陀郡から山辺郡にかけて広く分布する室生火山岩の岩相の一部に似ている。採石地としては室生ダムの北方付近が推定される。

#### 石材の使用位置と採石地

アカハゲ古墳の石室の壁石・天井石には角閃石黒雲母石英閃緑岩の加工材が使用され、石室の敷石には流紋岩質溶結凝灰岩が使用されている。

流紋岩質溶結凝灰岩についてであるが、この石材は墳丘の貼石・敷石にもみられる。一般的な傾向であるが、石室に同石材の加工石が使用されている場合、墳丘の石材にも同質の石がみられる場合が多い。墳丘の石材として室生ダム付近から運ばれたと考えるよりも、石室に使用された残りの石材が墳丘に使用されているとした方がよいだろう。

観察個数が少ない西側3段目と南側4段目を除けば、他の位置には飛鳥川流域で採石できる火山岩類・凝灰岩類が使用されている。また、平石谷流域を採石地に推定した黒雲母花崗岩・片麻状黒雲母花崗岩・閃緑岩は竹内峠付近から山田付近にかけて分布しており、飛鳥川の川原石にもみられる。しかし、角閃石黒雲母石英閃緑岩は平石谷にみられる石である。

石材の石種を観察した結果、貼石・敷石の石材は平石谷流域と飛鳥川流域から採石されていると推定される。また、目地のような作業単位が確認できず、石材の採石地が使用位置によりかたよりが認められないことから、大きな古墳の墳丘にみられるような作業区画により、墳丘の石材の設置作業がなされたとは推測し難い。

## 第5章 アカハゲ古墳の物理探査

天理大学教授 置田雅昭

### はじめに

2004年3月1・2日にアカハゲ古墳で電気探査とレーダ探査を実施した。探査実施時には発掘調査がほぼ終了段階であった。今次探査の目的は、大阪府教育委員会からの墳丘の壇ならびに1段目側面にあらわれた暗渠排水溝が、どこまでのびているのかを確かめて欲しいという要請に従つたものである。これは科学研究費基盤研究による「レーダ・電気探査法による古墳復元の調査研究」(研究代表:置田)の一環として実施した。

実施にあたっては、現場担当の柄木哲氏ならびに現場作業に従事していた大阪府教育委員会の調査員および調査補助員の支援を受けた。天理大学からは吉永史彦、福家恭、奥見佳央、岩城圭吾、山下直人が参加した。調査中、高島徹課長補佐から適切な指示を頂いたほか、天理教喜志分教会からは過分の支援を受けた、記して感謝する。

### 機器と探査法

調査に用いた電気探査機は応用地質社製McOHM機である。通常、電気探査では電極間隔の2分の1が見かけの深さとされている。すなわち間隔5mでは、見かけの深さが2.5mになる。これを見れば実長としてよいが、あくまでも計算式で得られる深さである。

レーダ機は米国G.S.S.I社製Sir3000に200MHzと部分的に400MHzアンテナを装備した。データ解析に用いたソフトはアメリカ人Dean Goodman氏作成のGPR-Slice、アメリカGolden Software社製のSurfer8である。以下ではタイムスライス図を平面図、プロファイル図を断面図と呼ぶ。レーダ探査の場合、深さをns(ナノセカンド・ナノ秒・10のマイナス9乗)で表すが、日本の土壤ではこれを実際の深さに換算するのに3倍すればよいとされている。すなわち、10nsは深さ30cmである。

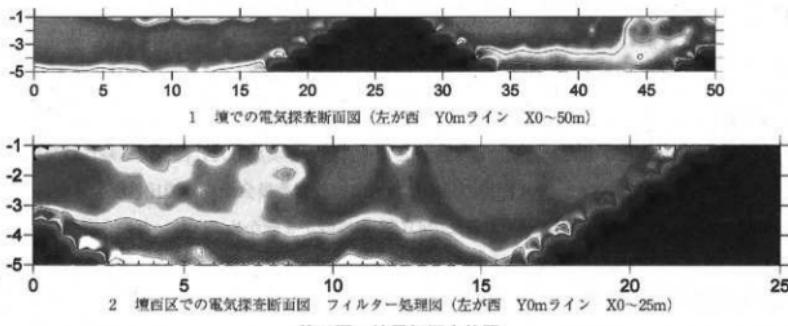
探査の地区設定は日本測地系座標に従って、壇の南西、すなわち、X-167530、Y-31780をX0,Y0とし、座標軸に並行するようにした。この結果、墳丘主軸との関係では北約5度東に振れるため、矩形の探査範囲を設定できなかった。

探査軸線のX0,Y0より北あるいは東に数が増え、南ないし西に行くときはマイナスを付けて呼ぶ。レーダ探査は測線間隔0.5mないし0.25mとし、東西方向に走査した。これは東西軸に長い距離がとれたことと、探査の目的である排水溝が南北に埋まっていると推定されたからである。

墳丘中央に南北方向の断面観察用土手と、墳丘盛上状況を観察する試掘溝があったので、各段とも東区、西区に分割した。2段目については探査直前に堤を撤去したので、1区画とした。

### 電気探査(第48図1・2、図版43上)

壇部分でY0mライン、X0～50mをウエンナー法で、水平(断面図)探査を行った。探査に要



第48図 墳電気探査位置

する日程が十分でなかったことと、南北間の距離が短かったので、平面探査は行っていない。電極間隔は0.5m、深さ-5mまでを探査した。X26mを中心とした東西が空白になっているのはトレシチのためである。

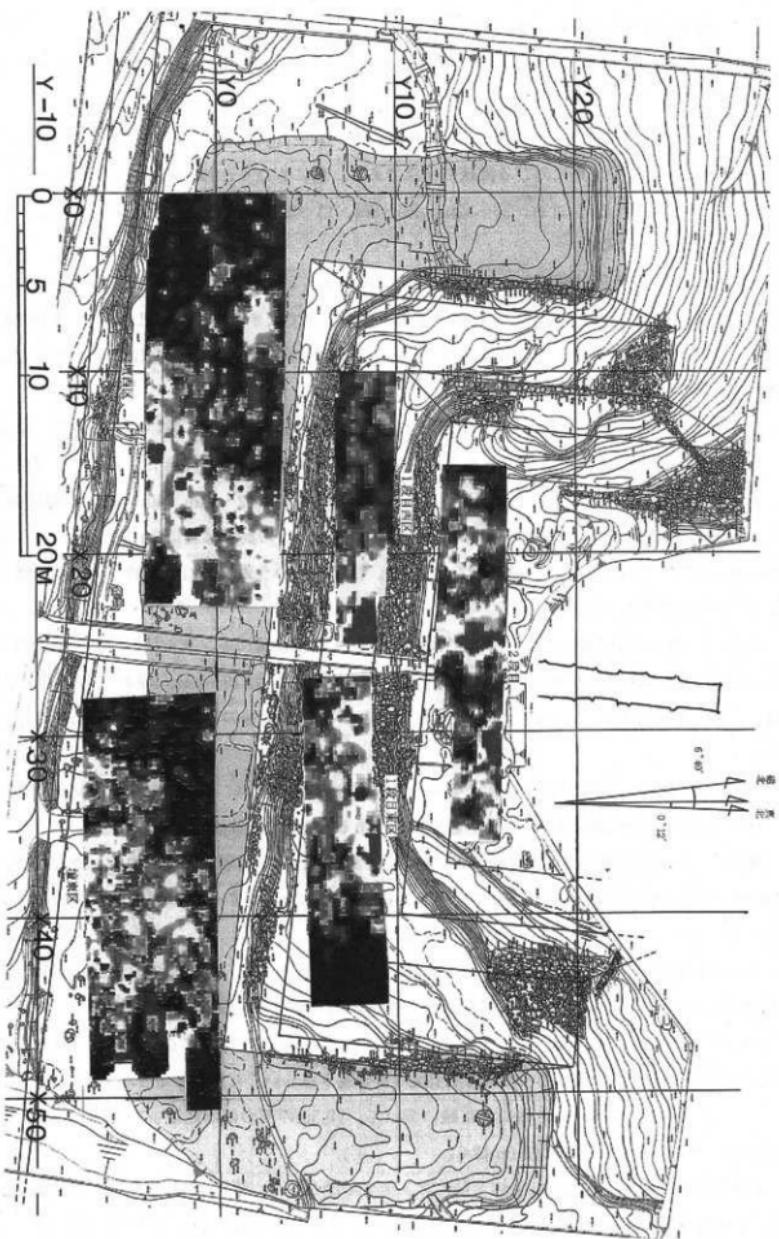
深さ-4.5mに比抵抗値の高い部分があり、X15mあたりから浅くなり、X43~44mで強い応答が地表に上昇する。これは地山もしくはその下部の岩盤をとらえているのであろう。しかし、浅いところにあるはずの排水溝を明確にはとらえていない。

局部的な異常をとらえるために、西半分を取り出しフィルター処理をすると細部を観察することができる。深さ-2m、X11m前後、深さ-2.5m、X14m前後と、深さ-2m、X18m前後の3箇所に比抵抗の低い部分があらわれている。3箇所に電気の通りやすい部分があるものと判断できる。

こうした視点で東半分についても検討すると、深さ-2m、X41mに比抵抗の低い部分を見いだすことができる。なお、X30~36mの地表近くに抵抗値の低い部分が見られるが、これは探査当時帯水していたからであろう。

探査範囲	200MHzアンテナ	400MHzアンテナ
塙西区	362m (0.5間隔)	222m (0.5間隔)
塙東区	403m (0.5間隔)	_____
1段目西区	72m (0.5間隔)	178m (0.25間隔)
1段目東区	119m (0.5間隔)	242m (0.25間隔)
2段目	131m (0.5間隔)	_____

表2 アカハゲ古墳レーダ探査地区別測線距離 (いずれも東西方向)



第49図 墳丘のレーダ探査全体平面図と地区名

### レーダ探査（表2、第49～51図、図版43ド）

壇西区 東西方向に最長24mを探査することができた。200MHzと400MHzの2種のアンテナを用いた。

平面図では東に応答の強い部分があらわされている。30～40nsで言えばY-4、X10～20m、Y4、X18～24mの南西から北東にのびる帯状の異常である。他にも点々と強い応答が見られる。20～30ns、X11～12m、Y-2m付近と、26～35ns、X6～8m、Y1～3mにまとまった応答が見られる。これらを断面図で検討する。

2種のアンテナとも同じ傾向を示す。両者を比較すると、いずれも50ns以下ではノイズが多い。ノイズ発生の上部に強い応答があるから、地層が深さ1.5mで大きく異なると思われる。200MHzアンテナは400MHzアンテナより5nsほど深いところまで見える。以下、200MHzアンテナによる断面図を観察する。

探査地区の最も南の走査ラインY-4mではX11～12m（第50図3）の間に強い応答がある。崖面に出ている排水溝の状況から、これをとらえていることが容易に推定できた。Y-2.5m、X12～13m、40ns（第50図4）では違った波形があらわれる。Y-1m、X12～14m、40ns前後（第50図6）では2箇所の抜けた部分があって、回りは強い応答である。この異常は北に1m(Y0m)進むと、僅0.6m前後の一つの抜けた状況（第50図7）になる。抜けたという表現は電波の通りがよい状態である。Y1.5mではこの異常が消える。

また、Y-1.5m（第50図5）のファイルではX17～18m、45ns前後にトンネル状の波形（第50図5）がみえる。この波形は北に行くと東に移動する、例えばY1mではX18～19mに乱れ（第50図8）があり、Y2mでは消える。したがって、北東方向にのびる幅1m前後のものが、深さ1.5mあたりに異常がある。

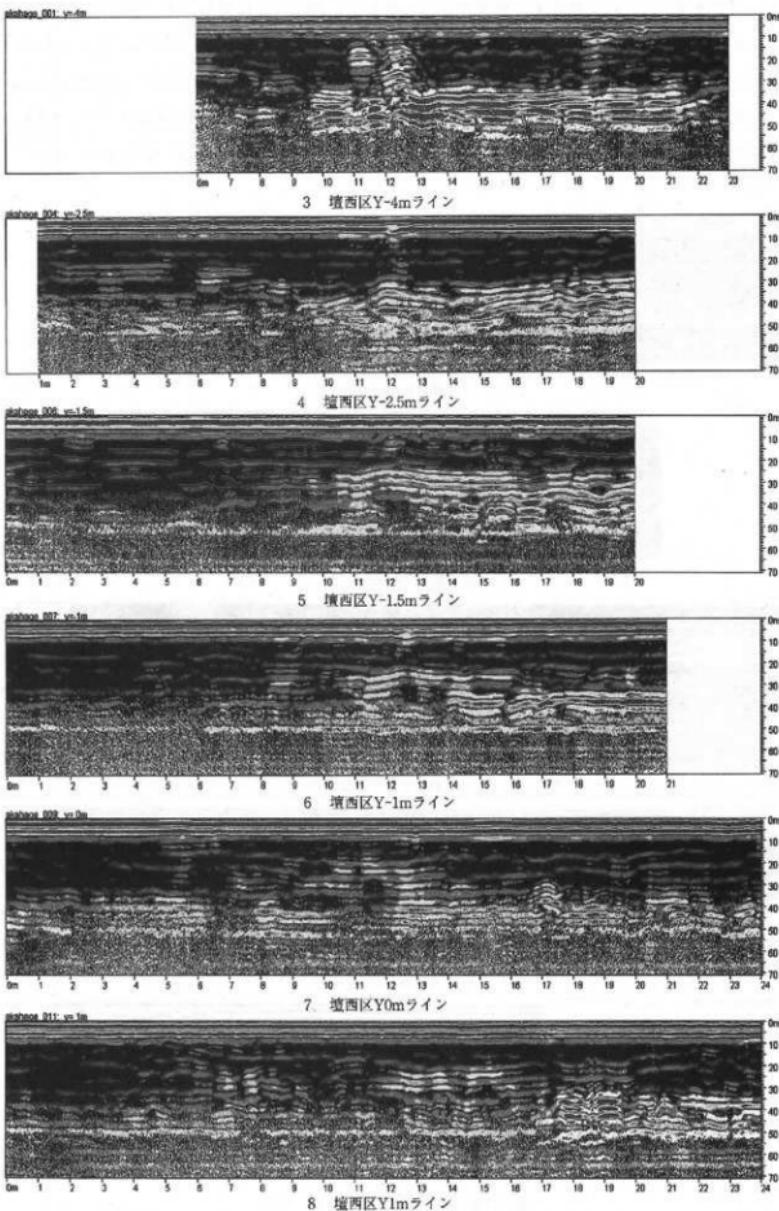
Y1.5m、X6～8m、20nsには別の強い応答（第51図9）があらわれ、Y3.5mではこの異常が終息するから僅2m位の範囲に何かがある。数個の疊があるのではないか。

壇東区 平面図全体の様子は南東半分に強い応答があり、北西は弱い。その中で、地表に近い10ns間での平面図に南北にのびる強い応答がある。X34～35m、Y-8～-5mに見られる筋状の応答である。そのほかの部分ではめだった応答を見いだせない。

断面図を検討する。Y-8m、X34～36m、地表から50ns（第51図10）に円形に抜けた部分がある。電波の通りよいことを示している。この様子は断面の形を変えながらY-5.5mで終息する。いずれの断面図でも地表近くに強い応答があって、左右にも比較的強い応答がある。いずれの断面図でもY37m前後に波形の乱れがあって左右で土壤の質が違うらしいことを知ることができる。

Y34～36mの波形の乱れはさらに北に続いている、Y0.5mの壇のはば北端までのびている。すなわち、異常は少なくとも南北8.5m続く。

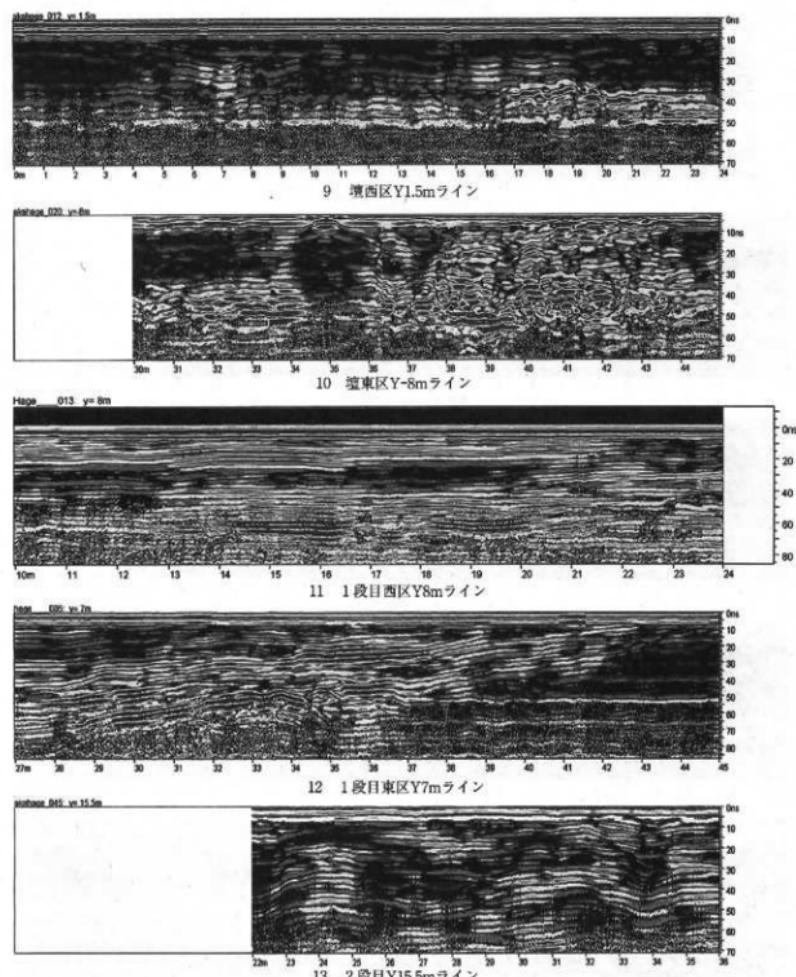
1段目西区 200MHz、400MHzの2種のアンテナで探査した。測線の間隔は0.5m、0.25mである。200MHzアンテナでは70ns以下で、400MHzアンテナでは40ns以下でノイズがあらわれる。



第50図 レーダ探査断面図（1）

平面図では浅いところで西の方に異常があらわれるが、深くなるに従って東に移動する。断面図でみると、X20mあたりで、強い応答の地層が浅いところであらわれる。状況からして地山をとらえているのであろう。ただし、これより西は地山（強い応答）が平坦である（第51図11）。

1段目東区 平面図では西の方に見られる異常が、深くなるに従って東に移動するが、X40mより東では電波の通りがよい。断面図にもこの様子があらわされていて、地層が東に行くに従って上



第51図 レーダ探査断面図（2）

がるのが分かる。地山をとらえているのであろう。すなわち、西の方では地山の上に疊が散在するが、地山は均質であると理解できる。X34～35m前後、深さ40ns前後に波形の乱れ（第51図12）が見える。平面で言うと南北方向に何かがあるらしい。探査範囲の北端、Y5mからY9mまでみえるから、幅1m、南北の長さ4m以上、深さ1.2mの異常と理解できる。

2段目 平面図では複雑なモザイク状を呈し、異常を摘出することができない。断面図では26～32m前後でその東西（左右）と大きく波形が異なるが、発掘の穴を埋め立てたものをとらえたものである。全体の地層に起伏が見られる。X34m前後、40nsあたり（第51図13）で隆起する。深いところの地山をとらえたものであろう。このあたりに古墳の中軸線がくるから、地山を巧みに利用して古墳が築かれたことを明確に示している。

### 考察

以上の結果、主要な異常地点と発掘結果を照合すると、表3のようになる。

壇西区Aの異常は発掘調査で排水施設5とされ、現地でも確認されていたところである。また、排水施設3も発掘で確認されており、整合する。南北の長さが約4mあることをレーダ探査で推定できたのは大きな成果である。

問題は排水施設4と6の関係である。発掘調査の推定では二つの排水施設と数えられているが、レーダ探査は連続した異常ととらえた。その長さは南北3.5m前後になる。

電気探査でも排水施設5・6ないしは排水施設4をとらえている。

壇西区Bの異常は排水施設5の北側に連続する部分であり、地下の水脈をとらえているのであろうか。壇西区Dの異常は先にも推定したように、深さ60cmくらいに数個の疊が埋没しているとみて良いであろう。

電気探査	レーダ探査	異常応答名称	発掘結果
X11 Y0	X11～12 Y-4 X12～13 Y-2.5	壇西区A	排水施設5
X14 Y0	X12～14 Y-1	壇西区B	排水施設5？
X18 Y0	X17～18 Y-1.5 X17～19 Y2	壇西区C	排水施設6 排水施設4
	X6～8 Y1.5～3.5	壇西区D	
	X34～35 Y5～9	1段目東区E	排水施設3

表3 レーダ探査の異常地点と発掘結果との照合

## 第6章　まとめ

本年度の調査の主眼は、昭和40年（1965）に石室内部が調査されたアカハゲ古墳の外部の状況を把握することであった。調査の結果、第2章に述べたようにこの目的は一定程度達成され、今後進められる圃場整備事業と古墳保存との調整に必要なデータは得られたと考える。また周辺の状況としては、河川改修によって削り取られる尾根の先端部の蛇行箇所の土地利用のありかたを把握することができた。

平成13年度に実施したシショツカ古墳の調査以後、平石谷の右岸段丘に立地する大型古墳が、北から南に下る尾根と、その尾根を東西で限りつつ、南へ大きく張り出す地形的特徴をきわめて効果的に利用するという基本的な特徴は、今回の調査によても裏付けられた。ただ調査地点が東へ進むにつれて現在の府道がより古墳に近接しているので、古墳の北半部が調査区外に及び、シショツカ古墳のような古墳の背後の状況については知り得なかった。しかし今回の調査では南半部を全面的に発掘した結果、全体像をつかむことができたことは何よりも大きい成果であった。いずれにしても昭和39年（1964）に削り取られた葛城山西麓の前山の、北東から南西に下る尾根の先端部の鞍部を東西いっぱいに利用し、背後の斜面に取り付ける形の墳丘を築いていることが判明した。またその墳丘を築くに先立って南側に平坦な壇を造成していることも注目される。旧地形は東から西に傾斜するので壇、墳丘各段を水平なラインで描えるため、壇では東側の地山を削って西に盛り、また墳丘では東側の段高を下げて西側を持ち上げ、結果的に、正面、すなわち南側から見る辺のラインがすべて平行するように整えられている。このラインにしたがって墳丘の段斜面の貼石も、四角い石の辺を描えて施工されたので、全体的に整然とした外観を生み出している。この点は特に南と西の辺に鮮やかに現れている。この外観をシショツカ古墳と比べてみると、まず石室構築レベルが高く、墳丘第2段上にあること、この石室を墳丘第3段が包むこと、それによって見る側にアカハゲ古墳がより高く聳えるようなイメージを与えている。シショツカ古墳の墳丘高5.0mに対し7.0mという比高差2.0mの違いである。高さとともに墳丘や壇の規模も大型化を示している。墳丘各段の東西長でみると、上段15.3mが21.7m、中段24.7mが32.7m、下段34.2mが44.6mというように、1.3～1.4倍上回る数値である。壇は中世以後の開墾で東西両端の変形は激しいが、地形と照らし合わせ少なく見積もってもシショツカ古墳の60.0m、アカハゲ古墳の70.0mの数値は動かず、1.2倍となっている。

全体像に加えてあきらかになったのは細部の状況である。まず墳丘の段上面には敷石が施されていたことが段の山寄りの個所であきらかになった。したがって墳丘は側面・上面とも全面石に覆われていたということになる。シショツカ古墳では確認されなかった事実であるが、トレンチ方式でなければ検出できたかもしれない。

次いで今回特筆すべきは、排水施設の施工状況が明らかになったことである。これはトレンチ

調査に終始したシショツカ古墳の調査では確認できなかったので、同古墳の構造を考える上にも大きいヒントを与えてくれる。河南町では多雨時期は年間2回程度とされ、前期は梅雨の6月、後期は温帯低気圧の発生と台風の来襲に見舞われる9月、そしてこの2回に次ぐのが夏季の夕立など雨量のある8月と温帯低気圧によるかなりの雨がある10月といわれる〔河南町誌、昭和55年、29～30頁〕。古墳の築かれた時代にもこのような天候を考慮するなら、これに加えて山手からの地下水の浸透も平石谷の土地利用にあたっては常に配慮されなくてはならない要素といえよう。まして自然地形に手を加え、さらに入為的な構造物を設ける場合、その技術面を担う者にとってそれ相応の見極めが既に選地の段階から働いたにちがいない。アカハゲ古墳で検出された排水施設はこのことを十分裏付けている。これも上記の報文中に述べたことなのでここで詳しく述べないが、東西の埴丘第2段上面の敷石を施す前に地下に砾暗渠を設け、それを西端では第1段上面の敷石上のレベルに合わせている点と、南側の壇の地形が西に低くなるところの盛土の中に石組み排水施設2箇所を設けている点、さらに壇上に帶状の凹部をつけ周溝としての効果をもたせている点、この3点は相互に連動する全体的な水仕舞いのプランが周到に用意されていた結果で、それは排水システムと表現してもよいかも知れない。壇や埴丘の盛土と貼石などによって古墳全体が比較的良好に今日まで残ったし、中世以降の造成でも畠田として十分活用されるほど堅牢だったといえるが、それを下支えするのが原地形を非常に見事に生かしたこの排水システムではなかつただろうか。

埴丘がどのように盛り上げられたか、その一端を示す断面観察は石室前の第2段上面の擾乱坑を利用してかろうじておこなうことができた。第12図のF、G、Hの各断面に示したように、水平に盛り上げられていく各土層の中に、前後2回にわたる工程が認められる。その2回を画する層界ラインは石室からみて南と東に傾斜する形で示される。石室の構築される第2段にこのように2回の工程が識別されることをどう捉えるか。狭い縦坑の断面観察からではあるが、最初の工程で積み上げられた盛土の段階で石室の石材が運び上げられ、あるいはその構築が始められたと考えてはいかがであろうか。次の工程の盛土では既に全体ができあがり、段の体裁はほぼ完了している。埋葬施設の構築は最初の工程によって盛られた埴丘第2段の上で始まったとみられないだろうか。

閉塞石以南の羨道は、開口部前で重機による開墾が行われた際、かなり地下げされたため原状をとどめるいかなる痕跡も認められなかった。しかし埴丘第2段南辺との位置関係から見て閉塞石より南への延長は3.0m程度と考えられる。また現開口部に見える天井石の前には庇状の石がもう1枚用いられていたと思うが、これも開墾の過程で外されたようである。開口部より東の盛土斜面に放置されている平坦面をもつ石がおそらくそうであろう。一方、開口部前の擾乱坑に投棄されていたやはり平坦面をもつ石は外された羨道の側石に違いない。

平成13年度に調査されたシショツカ古墳とは占地・構造・形態の全体を通じて共通する要素が認められることは確かである。が、それでも微地形的に見た場合の占地点の固有の要因に応じた

違いも細部には反映されている。アカハゲ古墳の築造時期については従来の7世紀第3四半期の想定を検証する具体的な遺物は今回得られなかった。しかし平石谷の開口部に近い加納古墳群から始まる上流への調査が既に4年目を経過した今、下流から上流への築造順序はまず動かないという感触を得ている。来年度調査予定のツカマリ古墳の調査結果を得て、この点はさらに具体的に検証できるだろう。

最後に、排水施設の地下の状態をうかがう探査の結果は、発掘調査の結果といかに整合するかを検討するうえで生産的なデータが得られた。排水施設4と6が連続する可能性があることは発掘調査結果に基づく推定を裏付けた。また墳丘第1段斜面に開口した排水施設3が南北方向に約4mの反応があったことは墳丘内の排水施設のありかたを考える興味深いデータを提供した。さらに排水施設5の北側に地下の水脈をとらえている探査結果は、壇造成に先だって旧地表面での水筋が十分把握されて排水施設の位置が決られ、暗渠石組みが構築されていたことを証明した。

#### 参考文献

- 大阪府教育委員会「平石地区・桐山地区発掘調査概要」2000年  
大阪府教育委員会「加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要」2002年  
大阪府教育委員会「加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ」2003年  
大阪府教育委員会「加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅲ」2004年  
大阪府教育委員会「陶邑Ⅲ」1978年  
河南町誌編纂委員会「河南町誌」1968年  
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅵ」1975年  
奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅶ」1976年  
中世土器研究会「概説 中世の土器・陶磁器」1990年  
田辺昭三『須恵器大成』1981年

最後になりましたが、現地調査に参加し、寒暑にめげず頑張っていただいた秋元佐衣子、庵ノ前智博、佐藤三和子、清水奈都紀、進藤智美、岡藤光代、西村慈子、原田亮子、水久保祥子、横田真吾の諸氏に心より感謝申し上げます。また整理作業に助力をいただいた荒木波子、井上能子、宇沢ヒデ子、江藤豊子、大上馨、大矢ノリ、奥野容子、川東貴子、北村美紀、小門邦代、中辻三沙穂、野崎明美、東野穂澄、東野俊子、二見雅子、細川眞弓、堀口友里、松谷文江、村井律子、八柄あさ代、山下美佐子、山田洋子の皆さんにお礼申し上げます。

平成15年度調査区出土遺物観察表

国 名	管 轄	出 土 場 所	層 位 10 cm	表 空(cm)		特 徴	考 察
				白透	黒透(古)透	露点	その他
<b>第2・3・6調査区出土遺物</b>							
1 磁器杯环唇	越上・高岡水原	27回 4-A'断面17解				丸山部上部剥離ヘタケツ。	海老B-3
2 固定部环身底部	崎輪後原上	10B A-A'断面106-109解		10.60		前縫隙に△の字型の凹凸が有る。	海老B-3-4
3 磁器部环坏部	疊上・高岡水原	27回 6-B断面131解				縫隙に△と△の字型の凹凸が有る。	海老B-3-5
4 磁器部环坏	疊上・高岡水原	10B A-A'断面106-109解				内窓の△と△の字型の凹凸が有る。	海老B-1-2
5 上脚器	疊上・高岡水原	10B A-A'断面106-109解	13.20			内窓の△と△の字型の凹凸が有る。	平城E-Y
6 土脚器小皿	疊上・高岡水原	10B A-A'断面106-109解	9.20	1.20		底部から内窓部に△と△の字型の凹凸が有る。	13-15世纪
7 土脚器小皿	疊上・高岡水原	10B A-A'断面106-109解	8.80			半円の底盤から外反する内窓部が残り△。	13-15世纪
8 土脚器小皿	疊上・高岡水原	10B A-A'断面106-109解	7.20			半円の底盤からやや外反する内窓部が立ち上がり△。	13-15世纪
9 青釉茶碗底盤	堆塗土2段階下 (W2-10底面) 40号	西原周囲 (W2-10底面) 40号			中央付近 中央付近	中央付近に口沿部が立ち上がり、高い荷台を付す。全体外面に削痕がある。	弥生時代
10 斜脚器	疊上・高岡水原 △と△	21回 L-B断面44解	13.60	7.60	4.40	底部から内窓部に口沿部が立ち上がり、高い荷台を付す。全体外面に削痕がある。	9-11世纪
11 上脚器小皿	疊上・高岡水原	31回 三層				平たい底盤から外反する内窓部が残り△。	12世纪代
12 上脚器	疊上	66号				底盤上に△と△の字型の凹凸が有る。外側赤茶色、内側黄褐色。胎土に砂利を含み△と△の字型。	庄内-奇留
13 丹波底盤	疊上・高岡水原 1(E5)	10B A-A'断面106-109解				外反し底盤に細かい円印が付す。青釉色地を内側に持す。	7-8世纪代
14 丹波底盤	疊上・高岡水原 40号	10B A-A'断面106-109解				外反し底盤に内側に刷毛印が付す。青釉色地を外側に持す。	7-8世纪代
<b>第7調査区出土遺物</b>							
15 土脚器	b-1底付 78	横(75YR4-4)跡 付上	17.50			底盤は斜く立派な丸底。口縫部内側面に△と△、底部ヘタケツ。	平城E-Y
16 土脚器环坏部	b-1底付149	横(75YR4-4)跡 付上				外反する△と△の字型を内側に巻き込む形態。口縫部内側面に△と△。	平城E-Y
17 土脚器环坏部	b-1底付230	横(75YR4-4)跡 付上				外に△する△と△の字型を内側に巻き込む形態。口縫部内側面に△と△。	平城E-Y
18 土脚器环坏部	b-1底付174	横(75YR4-4)跡 付上				中心から△と△の字型の凹凸が有る。内側面が△と△の字型をなし。口縫部内側面に△と△。	平城E-Y
19 上脚器口環足	b-1底付412	横(75YR4-4)跡 付上	26.20			底盤から△と△の字型の凹凸が有る。口縫部内側面に△と△の字型の凹凸が有る。口縫部外側面に△と△の字型。底部は△と△。	7世纪後半-8世纪代
20 上脚器口環足	b-1底付467	27回 61-65解	23.40			底盤から△と△の字型の凹凸が有る。口縫部内側面に△と△の字型の凹凸が有る。口縫部外側面に△と△の字型。底部は△と△。	7世纪後半-8世纪代
21 嵌透环身底部	b-1底付46	横(75YR4-4)跡 付上(75)		6.80		底盤外側面に△と△。	色々
22 嵌透环身底部	b-1底付49	横(75YR4-4)跡 付上		9.00		外側面に△と△。	色々
23 嵌透环身底部	b-1底付456	横(75YR4-4)跡 付上		10.00		底盤側に△と△の字型の凹凸が有る。内側面△と△。	色々N-3
24 磁器部口環足	b-1底付43	横(75YR4-3)跡 付上	9.60			外反する△と△の字型を内側に持す。外側に△と△の字型を有する。	難鳥E
25 土脚器	b-1底付39	横(75YR4-3)跡 付上	33.00			底盤から△と△の字型の凹凸が有る。	中世
26 上脚器	b-1底付228	39回土28-1層	16.20			△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	7世纪後半-8世纪代
27 上脚器	b-1底付116	横(75YR4-4)跡 付上	15.00			△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	7世纪後半-8世纪代
28 上脚器	b-1底付133	横(75YR4-3)跡 付上	16.40			△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	7世纪後半-8世纪代
29 磁器部环身底部	b-1底付1	38回土1-1層		9.20		底盤側に△と△の字型の凹凸が有る。	海老B-3
30 磁器部	b-1底付1	38回土1-1層		21.80		底部から△と△の字型を内側に持す。内側面に削痕がある。	海老B-1-2
31 土脚器口環足	b-1底付1	38回土1-1層			口縫部△と△。	7世纪後半-8世纪中頃	
32 上脚器	b-1底付2	38回土1-1-3層			△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y	
33 上脚器	b-1底付3	38回土1-1-3層	16.40			△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
34 上脚器	b-1底付3	38回土1-1層		19.00		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
35 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		17.80		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
36 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		15.80		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
37 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		16.00	2.15	△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
38 上脚器	b-1底付3	38回土1-2-1層		16.00		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
39 土脚器	b-1底付3	38回土1-2-2層		16.00		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
40 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		17.80		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
41 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		20.00		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
42 土脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		22.00		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
43 上脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		21.80		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y
44 上脚器	b-1底付2	38回土1-2-1層		22.20		△と△の字型を内側に持つ口縫部を有す。口縫部内側面に△と△、外側面に△と△。	平城E-Y

45	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-1番	12.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。口接縫内縫合をなす。口接縫コナフ。	平成基-V
46	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-2番	13.50		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	平成基-V
47	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-3番	14.40		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	平成基-V
48	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-4番	13.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	平成基-V
49	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-5番	11.20		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	T 延長基-V
50	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-6番	13.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	延長基-V
51	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-7番	13.00		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
52	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-8番	12.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
53	土蜘蛛模	b-3土筑2	38国土社2-9番	16.20		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
54	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-10番	14.60		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
55	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-11番	16.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
56	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-12番	16.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
57	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-13番	18.00		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
58	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-14番	2.70		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-V
59	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-15番	21.80		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-II
60	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-16番	22.40		内陣手の筋を立て立つて縫合をもつて縫し、端面内縫合をなす。口接縫コナフ、丁子接縫サナフ。	半城基-II
61	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-17番	16.80	つまみね(底原板) 21.50	宝珠形つまみ、内外面板なし。	南庭基-I-2
62	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-18番	16.80		内裏の小柱2本に宝珠形のタブレット下にしらし、内外面板なし。	南庭基-I-2
63	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-19番	18.00		内裏の小柱2本に宝珠形のタブレット下にしらし、内外面板なし。	南庭基-I-2
64	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-20番	11.20		内裏の小柱2本に宝珠形のタブレット下にしらし、内外面板なし。	南庭基-I-2
65	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-21番	10.30		内裏の小柱2本に宝珠形のタブレット下にしらし、内外面板なし。	南庭基-I-2
66	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-22番	14.00		端面は下方へ垂れさせている。内外面板なし。	南庭基-I-2
67	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-23番	16.80		端面は下方へ垂れさせている。内外面板なし。	南庭基-I-2
68	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-24番	19.60		端面は下方へ垂れさせている。内外面板なし。	南庭基-I-2
69	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-25番	16.20		天井板から屋根にかけて2次穴開きを引く。端面は下方へ垂れさせをなす。	南庭基-3
70	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-26番	18.00		天井板から屋根にかけて2次穴開きを引く。端面は下方へ垂れさせをなす。内裏面板なし。	南庭基-3
71	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-27番	16.40	16.90	S字形のカーブをもつて外張する口接縫。	南庭基-3
72	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-28番	16.40		S字形のカーブをもつて外張する口接縫。	南庭基-3
73	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-29番	10.20		S字形のカーブをもつて外張する口接縫。	南庭基-3
74	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-30番	12.00		端面重心が常に同じ字形の場合はひし。	南庭基-3~9
75	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-31番	6.40		「ハ」字形の内柱がいくつも、端面は平面形状をなす。内裏面板なし。外の外壁ナフ。	南庭基-3~9
76	底原板模	b-3-2筑2	38国土社2-32番	11.60	多摩川河川監査 21.00	やや前の柱と前の柱に近く2上から口接縫がつく。	南庭基-2~3
77	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-33番	9.30		又舟部は丸みあわせ、ズボン式面接合・斜接合のまま。ほかに面接合ナフ。	南庭基-3
78	底原板模	b-3-1筑2	38国土社2-34番	16.80		外接縫で面接合・斜接合のまま。外接縫ナフ。	南庭基-3
79	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-35番	19.00		この字形に外接縫をもつて縫合し、口接縫をもつて口接縫外縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー、床板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
80	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-36番	20.60	御園道17.00	この字形に外接縫をもつて縫合し、口接縫をもつて口接縫外縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー、床板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
81	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-37番	21.60		この字形に外接縫をもつて縫合し、口接縫をもつて口接縫外縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー、床板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
82	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-38番	33.60	御園道18.00	口接縫をもつて縫合し、口接縫をもつて口接縫外縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー、床板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
83	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-39番	14.00		かうやく模様の2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー、床板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
84	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-40番	15.60		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
85	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-41番	15.00	集落地12.00	やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
86	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-42番	15.60	集落地12.00	やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
87	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-43番	21.30		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
88	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-44番	22.40		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
89	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-45番	25.00		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
90	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-46番	25.00		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
91	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-47番	24.40	御園道15.00	やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
92	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-48番	25.20		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
93	土蜘蛛模	b-3-1筑2	38国土社2-49番	33.00	御園道15.00	やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代
94	土蜘蛛模	b-3-2筑2	38国土社2-50番	9.90		やや外接縫2つの丸の口接縫が他の内縫合をなす。口接縫内縫合をなす。口接縫外縫合の内側面にカーナー、天井板方向にカーナー。	7世紀後半~8世紀代

95	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼2-1番	16.00	国宝116	体部から足又部に立ち上るA1.腰高部は外反し、上に長い縦縫を有す瓦窓。口縁部内外にコナフ。作成地未定。	7世紀後半~8世紀代
96	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-1~3番	16.00	国宝112	体部から足又部に立ち上るA1.腰高部は外反し、上に長い縦縫を有す瓦窓。口縁部内外にコナフ。作成地未定。	7世紀後半~8世紀代
97	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-1番	16.80	国宝145	「小字利」式とされる複数の窓をもつ器。深部は上部窓をもつ器。口縁部内外にコナフ。作成地未定。	7世紀後半~8世紀代
98	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-1番	23.80	国宝212	「小字利」式とされる複数の窓をもつ器。深部は上部窓をもつ器。口縁部内外にコナフ。	7世紀後半~8世紀代
99	鐵塗土器	b-3±t±2	38國土焼3-1番	11.60		ガラスに付ける鉄塗が特徴的な複数の窓をもつ器。縫合部に「小字利」。口縁部内外にコナフ。	6世紀代
100	鐵塗土器	b-3±t±2	38國土焼3-1番	9.80		外縁に複数の窓をもつ器。縫合部に「小字利」。内面には鉄オキシドの付着がある。口縁部内外にコナフ。	8世紀代
101	鐵塗土器	b-3±t±2	38國土焼3-1番			外縁に複数の窓をもつ器。縫合部に「小字利」。内面には鉄オキシドの付着がある。口縁部内外にコナフ。	8世紀代
102	鐵塗土器	b-3±t±2	38國土焼3-1番			外上方に複数の窓を。内面鉄塗オキシド。	8世紀代
103	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-1番	22.00	国宝268	外及び口縁部以上に水平の筋が分かれた器。	7世紀後半~8世紀中期
104	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-2番	10.30		小笠百耳茶器。	8世紀代
105	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-2番			溝壓不規。	平城J~K
106	土師器皿	b-3±t±2	38國土焼3-2番	10.40		丸みのある底盤から内側しならぐものびらき縫隙。	13~14世紀
107	土師器皿	d-3	34國中央南北削	12.00		山根部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。	半城J~K
108	土師器皿	d-4	34國中央南北削	13.20		山根部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。底部部に「タケリ」。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
109	土師器皿	d-5	34國中央南北削	13.60		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口根部に「タケリ」。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
110	土師器皿	d-3	34國中央南北削	14.00		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。底部部に「タケリ」。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
111	土師器皿	d-3	34國中央南北削	14.80		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
112	土師器皿	d-4	34國中央南北削	14.80		1.腰高部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
113	土師器皿	c-2	34國中央南北削	17.80		1.腰高部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
114	土師器皿	d-5	34國中央南北削	17.30		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
115	土師器皿	d-3	34國中央南北削	21.80		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
116	土師器皿	d-3	34國中央南北削	17.80		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
117	土師器皿	d-3	34國中央南北削	18.80		「山根」が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
118	土師器皿	d-4	34國中央南北削	19.80		山根部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。口縁部内外にコナフ。	半城J~K
119	土師器皿	d-3	34國中央南北削	20.00		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
120	土師器皿	c-3~d-3	34國中央南北削	19.00		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
121	土師器皿	d-4	34國中央南北削	18.60		口縁部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
122	土師器皿	d-3	34國中央南北削	18.80		1.腰高部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
123	土師器皿	d-3	34國中央南北削	17.00		1.腰高部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
124	土師器皿	d-3	34國中央南北削	15.00		1.腰高部が膨らむ丸みをもつて斜方に立ち上るA1.腰高部は緩く伸び込む。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
125	土師器皿	d-3	34國中央南北削	16.00		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
126	土師器皿	d-3	34國中央南北削	18.00		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
127	土师器皿	d-4	34國中央南北削	19.20		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
128	土师器皿	c-3	34國中央南北削	20.80		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
129	土师器皿	b-3	34國中央南北新	18.40		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
130	土师器皿	d-3	34國中央南北新	21.80		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
131	土师器皿	d-3~4	34國中央南北新	22.80		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
132	土师器皿	d-3	34國中央南北新	20.60		口縁部が外反し、縫合部を有する窓。口縁部内外縫コナフ。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
133	土师器皿	c-3	34國中央南北新	21.20		口縁部が外反し、縫合部を有する窓。口縁部内外縫コナフ。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
134	土师器皿	d-3	34國中央南北新	20.80		外観で見てより上のC級部の縫合部を有する窓A1.「腰高部内外縫コナフ」。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K
135	土师器皿	d-3	34國中央南北新	20.80		コヨウ型窓(外反し)。縫合部を有する窓。口縁部内外縫コナフ。底部部内外縫コナフ。内面に鉄鉱石付着。	半城J~K

136	上部茎または葉	44	34回中央南北断面 63号		口縁部外側に凹出し、脣部をさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面内のウツガリ、内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
137	上部茎または葉	64	34回中央南北断面 63号		口縁部外側に凹出し、脣部をさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面内へタケリ角、内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
138	上部茎または葉	64	34回中央南北断面 55～57号		口縁部外側に、脣部をさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をササギ、内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
139	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	11.80	内側に心臓形をしていて、口縁部外側に凹出し、脣部内側が丸子。口縁部外表面をヨコナナ、裏面内側が斜ナナ。内側に凹出する波状の波紋が複数。	平城III～V
140	上部茎葉	62	34回中央南北断面 63号	10.40	内縁部外側に立ち上がり口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。先端部裏面をササギ。	平城III～V
141	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	10.00	口縁部外側に立ち上がり、脣部はくび、中央内側にさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ、後ナナ。口縁部内側が丸子か丸。	平城III～V
142	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	12.80	中央や外側に立上がり口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。波状の波紋をササギ、内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
143	上部茎葉	64	34回中央南北断面 55～57号	13.40	のうかく口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をササギ。	平城III～V
144	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	13.80	のうかく口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をササギ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
145	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	15.60	のうかく外側に立上がり口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。	平城III～V
146	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	16.20	のうかく外側に立上がり口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。	平城III～V
147	上部茎葉	63～64	34回中央南北断面 55～57号	16.00	下に底筋小口縁部をさわらひ外反する。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
148	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 37号	19.80	平たい底筋小口縁部をさわらひ外反する。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
149	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 55～57号	14.00	のうかく底筋小口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。山根部外側をササギ。一部波状の波紋。	平城III～V
150	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	19.00	のうかく外側に立上がり口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
151	上部茎葉	63	34回中央南北断面 55～57号		内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。上縁部をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
152	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	21.00	内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。上縁部をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
153	上部茎葉	63	34回中央南北断面 55～57号	19.60	内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。上縁部をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
154	上部茎葉	64	34回中央南北断面 110号	22.00	内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。上縁部をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
155	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	23.00	内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
156	上部茎葉	65	34回中央南北断面 35号	21.60	内側に心臓形をしていて、脣部をさわらひ。上縁部をさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。裏面外側をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
157	上部茎または葉	63	34回中央南北断面 55～57号		外反する底筋小口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。	平城III～V
158	上部茎または葉	63	34回中央南北断面 63号		外反する底筋小口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。内側に凹出する波状の波紋。	平城III～V
159	上部茎または葉	63	34回中央南北断面 55～57号		外反する底筋小口縁部をもつ。口縁部外表面をヨコナナ。口縁部下半周波状の波紋。	平城III～V
160	上部茎葉	b-5	34回中央南北断面 80号	19.00	斜筋方に心臓形にして立ち上がり口縁部を上にさわらひ。口縁部外表面をヨコナナ。外筋筋にヘリカナ。内筋筋1～2mm弱の波状の波紋。	平城III～V
161	上部茎または葉	63	34回中央南北断面 90号	13.40	両舌のつけ口部。外筋筋、内筋筋をさわらひ。	平城III～V
162	上部茎葉	63	34回中央南北断面 63号	10.30	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
163	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 55～56号	14.20	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内筋筋波状の波紋。内筋筋波状の波紋。	平城III～V
164	上部茎葉	63	34回中央南北断面 55号	13.80	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
165	上部茎葉	c-63	34回中央南北断面 55～57号	14.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
166	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 55～57号	12.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
167	上部茎葉	b-3	34回中央南北断面 80号	13.80	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
168	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 55号	13.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。内筋筋波状の波紋。	平城III～V
169	上部茎葉	c-3	34回中央南北断面 55～56号	17.40	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
170	上部茎葉	d-3	34回中央南北断面 63号	19.80	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
171	上部茎葉	b-3	24回中央南北断面 63号	11.80	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
172	上部茎葉	c-d-3	34回中央南北断面 55～56号	13.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
173	上部茎葉	d-3	34回中央南北断面 63号	13.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
174	上部茎葉	d-3	34回中央南北断面 63号	14.00	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
175	上部茎葉	d-3	34回中央南北断面 55～57号	16.60	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V
176	上部茎葉	d-3	34回中央南北断面 55～57号	13.40	丸の底筋から内側に突いて立ち上がる底筋をもつ。脣部内側に凹をます。口縫部外表面をヨコナナ。波状の波紋をササギ。	平城III～V







321	癌忍耐症肺部	d-4	34回中先発北斎画 55-57-60刷	6,20	「内風の氣がカギ」、便風圖は平版圖を表す。内風圖はナチ、外風圖は外 面圖でナチ、便風圖はナチ。	南北が2-3
322	癌忍耐症肺部	d-5	34回中先発北斎画 61刷	7,00	ハナツの葉の合図ナチ、便風圖は平版圖を表す。内風圖はナチ、外風圖はナチ 西四郎ナチ、便風圖はナチ。	南北が2-3
323	癌忍耐症肺部	d-4	34回中先発北斎画 61刷	5,60	癌忍耐症肺部 大根葉が主役、此の「ハナツ」の形の「合図」がついて口風。内風圖は「便風」すら外風 圖ナチ、便風圖はナチ。	南北が1-2
324	癌忍耐症肺部	d-3-4	34回中先発北斎画 61刷	8,00	癌忍耐症肺部 風の強い小版圖。内外面圖ナチ、風部外風へナチ。	南北が1-2
325	癌忍耐症肺部	e-1	34回中先発北斎画 61刷	11,00	癌忍耐症肺部 風の強さを表す。内外面圖ナチ。	南北が1-2
326	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 61刷	11,00	癌忍耐症肺部 体調の悪化が風の以上の位にある。内外面圖ナチ。	南北が1-2
327	癌忍耐症肺部	d-3-4	34回中先発北斎画 61刷	11,20	風の弱いもの、内風と便風(体調)に直立する様な「ハナツ」の形の「合図」がついて 外風圖ナチ。	南北が1-2
328	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 61刷	13,00	癌忍耐症肺部 風の弱いもの、内風と便風(体調)に直立する様な「ハナツ」の形の「合図」がついて 外風圖ナチ、便風圖はナチ。	南北が1-2
329	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 61刷	13,40	外気に対する「便風」が強風で、外気に対する「便風」を表す。内外面圖ナチ。	南北が1-2
330	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	17,00	外気に対する「便風」が強風で、外気に対する「便風」を表す。内外面圖ナチ。	南北が3-4
331	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	17,00	癌忍耐症肺部 便風圖は4回、内部外風圖はナチ、作風の「合団」ナチ。	南北が
332	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	17,00	癌忍耐症肺部 便風圖は4回、内部外風圖はナチ、作風の「合団」ナチ。	南北が
333	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	3,00	内風圖はナチ、風部外風へナチ。	南北が
334	癌忍耐症肺部	c-2	34回中先発北斎画 55-57-60刷	7,20	内風圖の火ナチ、その他の便風ナチ。外部外風圖へナチ、底風外風ナチ。	南北が
335	癌忍耐症肺部	d-4	34回中先発北斎画 61刷	11,10	ハナツの葉の「合図」がナチ、内風圖はナチ、便風圖はナチ。	南北が1-2
336	癌忍耐症肺部	d-3	34回中先発北斎画 61刷	15,10	ハナツの葉の「合図」がナチ、内風圖はナチ、便風圖はナチ。	南北が1-2
337	癌忍耐症	d-3	34回中先発北斎画 61刷	19,00	春風から春にかけて外熱する紙状。内外面圖ナチ。	南北が1-2
338	癌忍耐症	d-3	34回中先発北斎画 61刷	20,00	夏あるいは秋の季節。内外面圖ナチ。把便風圖はナチ、便風圖はナチ。	南北が
339	癌忍耐症肺部	d-2-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	24,00	便風圖は4回の火を吹き、内風圖はナチ。底風外風ナチ。	南北が
340	癌忍耐症	d-3	34回中先発北斎画 55-57-60刷	18,20	便風圖は4回 口風圖は大口の便風外風ナチ。便風圖は4回の火を吹き、便風圖はナチ。 南北が	南北が
341	癌忍耐症	c-3	34回中先発北斎画 37刷	22,30	便風圖は4回 火吹き便風圖はナチ。	南北が

# 図 版



図版1 アカハゲ古墳調査前全景



全景（東から）



全景（南から）



壇・埴丘全景（南から）



同 拡大

図版 3 アカハゲ古墳全景（2）



壇・墳丘全景（南西上方から）



壇・墳丘全景（南西下方から）



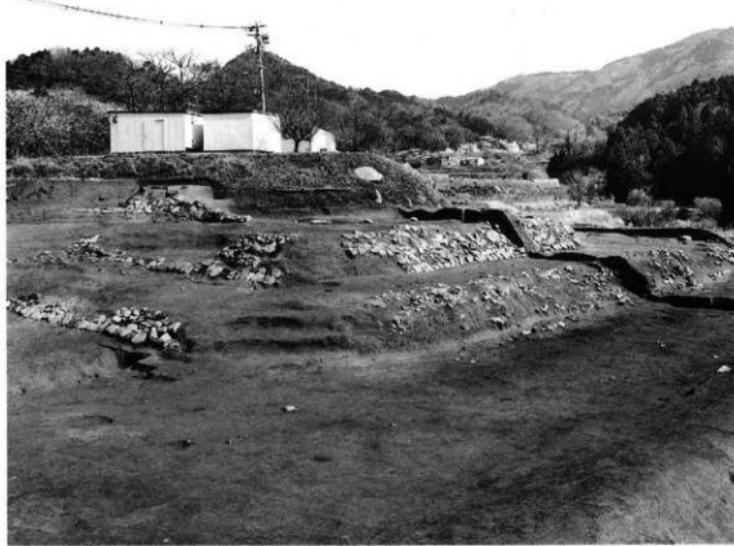
壇・墳丘南半部（南西から）



墳丘（南西から）



墳丘全景（南西から）



墳丘（南西から）



墳丘全景（南東から）



墳丘全景（南東から）

図版7 アカハゲ古墳全景（6）



墳丘西辺（西上方から）



墳丘西辺（西から）

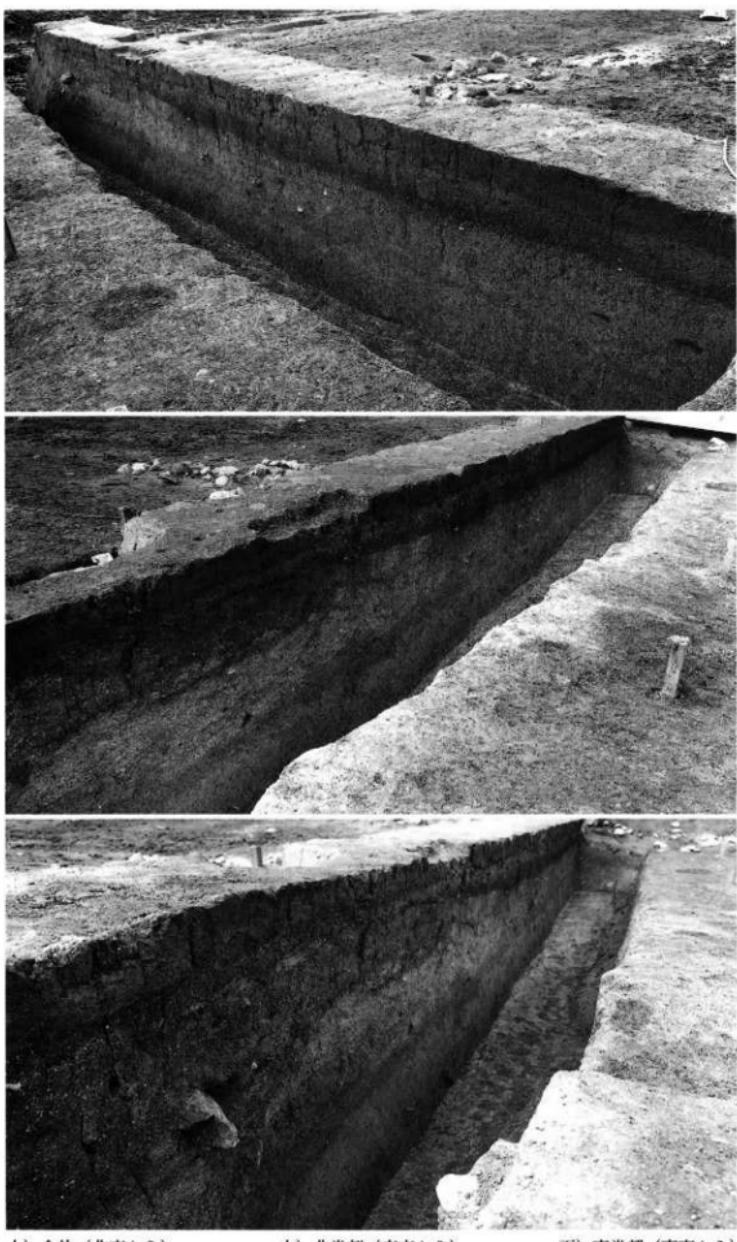


壇・墳丘東半部（東から）



同 拡大

図版 9 アカハゲ古墳壇盛土断面



上) 全体 (北東から)

中) 北半部 (南東から)

下) 南半部 (南東から)

図版 10 アカハゲ古墳墳丘盛土断面（1）

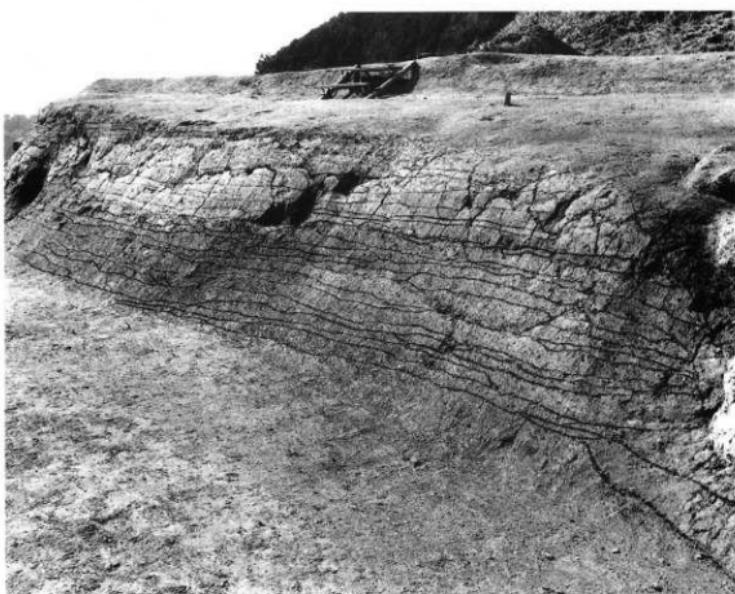


墳丘第2段石室前擾乱坑南北断面（G）（東から）

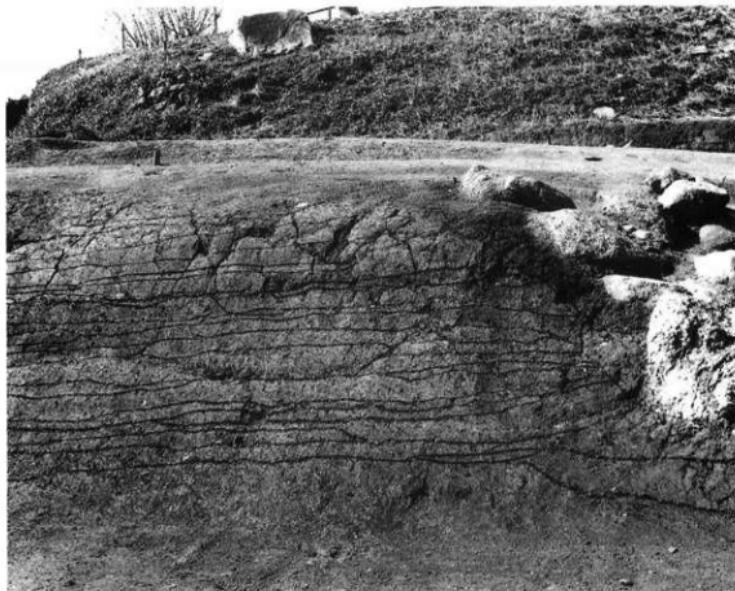


同（H）（西から）

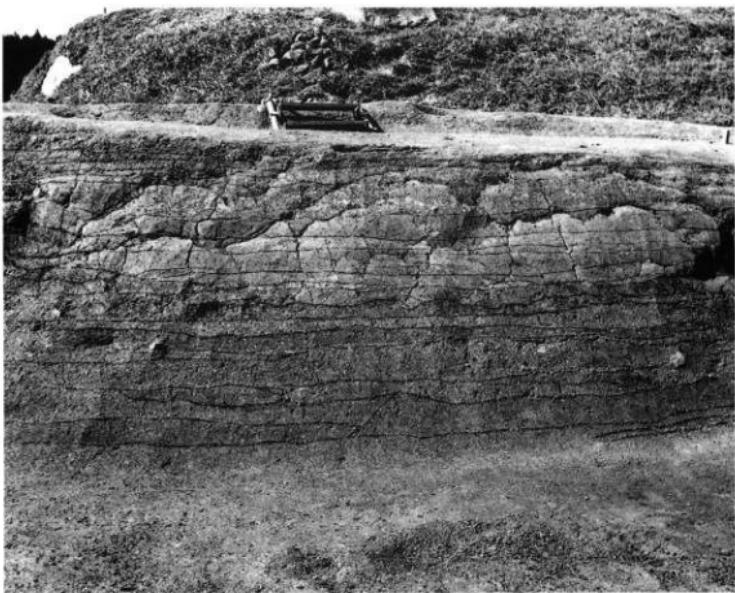
図版 11 アカハゲ古墳墳丘盛土断面（2）



墳丘第2段東半部盛土状況（南東から）



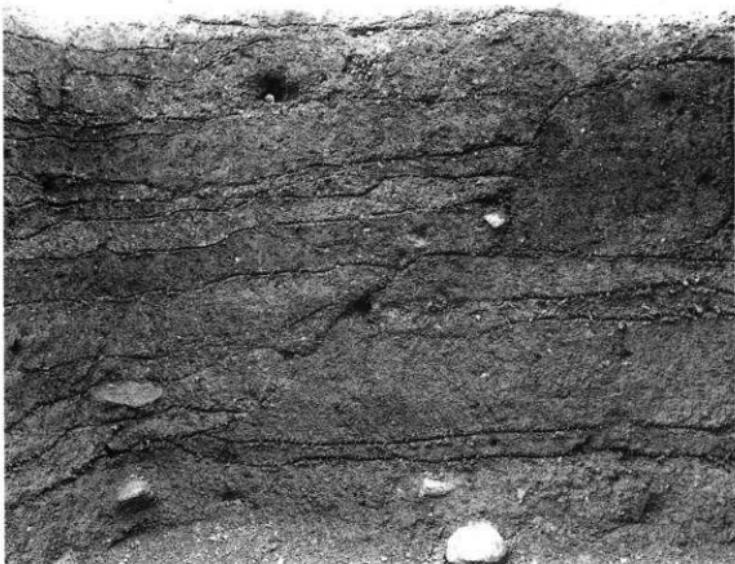
墳丘第2段東端部盛土・貼石断面（南から）



墳丘第2段東側盛土（南から）



墳丘第2段東端部盛土（南から）



石室前複乱坑西壁南北断面（填丘第2段盛土）（東から）



第3調査区北壁東側断面（填丘第2段東側盛土）（南から）



墳丘第1・2段南辺貼石（南東から）



同 拡大



埴丘南辺貼石全景（南西から）



埴丘第1・2段南辺貼石（南西から）



墳丘第2段西側貼石（南西から）



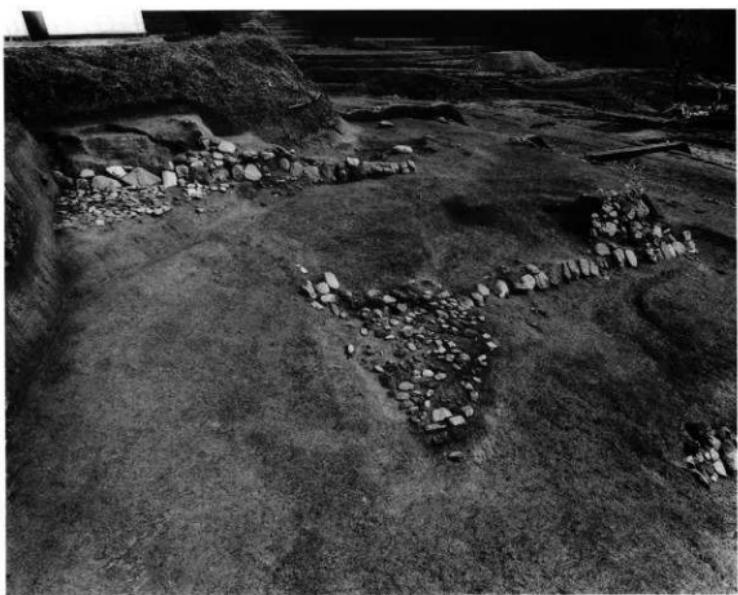
墳丘西側貼石（南西から）



墳丘第2段東側貼石（南から）



墳丘第2段西側貼石（南から）



墳丘西側第2・3段（北西から）



墳丘第2段西辺（南西から）



墳丘第2段貼石全景（南東から）



墳丘第2段東側貼石・敷石（北から）



墳丘第1段西側敷石（北西から）

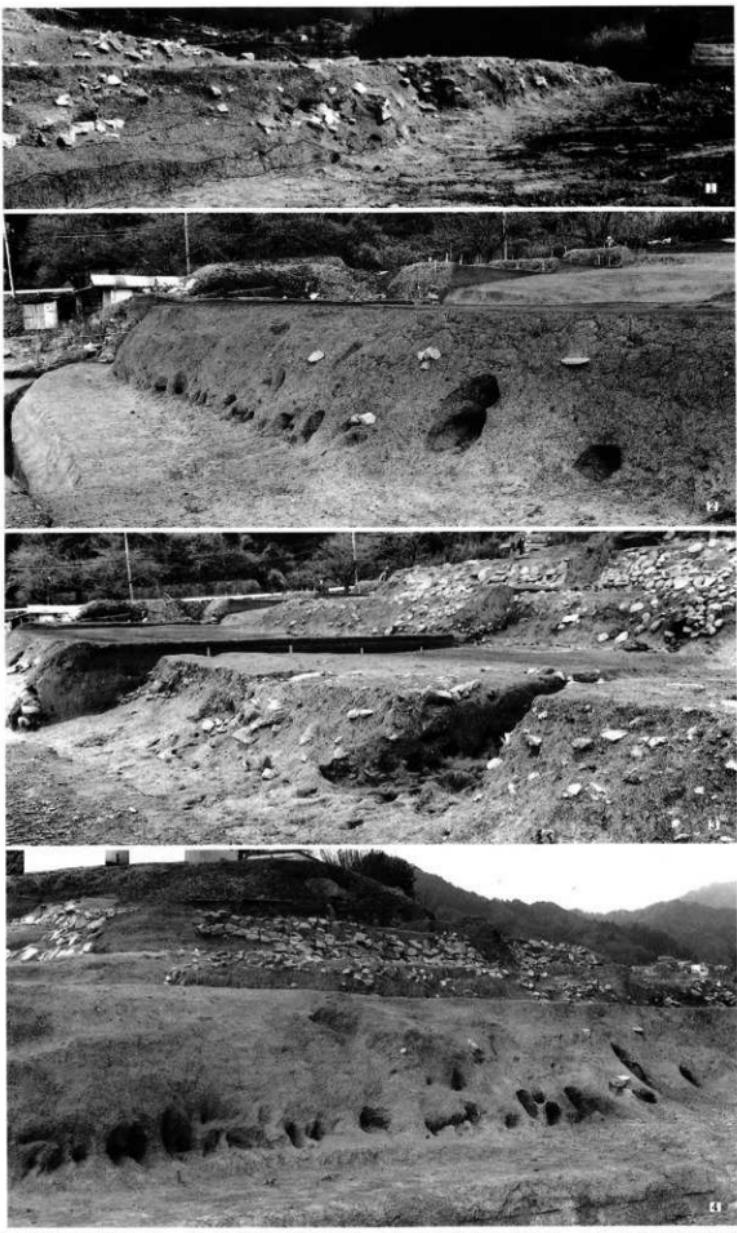


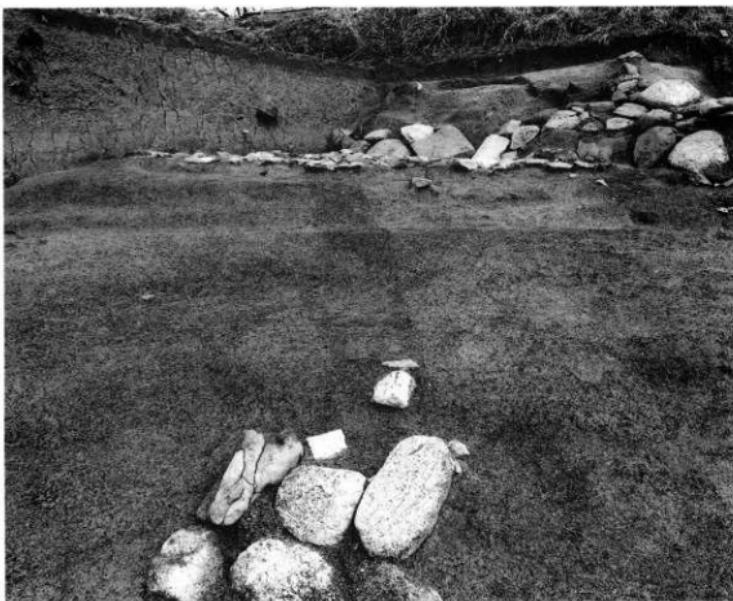
墳丘第2段西側敷石および第3段貼石（北から）



上) 墳丘第2段西辺中央裾貼石(1) 中) 墳丘第2段西辺中央裾貼石(2) 下) 墳丘第1段西辺南端裾貼石

図版 22 アカハゲ古墳壇盛土断面





上)検出状況(南西から)

下)底面掘り下げ

(南西から)





全景（南から）



同 北壁断面（南から）



開口部全景（南西から）



同 拡大（南から）

図版 26  
アカハゲ古墳排水施設 4・6



下) 排水施設 4  
(東から)





上) 排水口  
(南東から)

下) 排水口  
(南から)





壇上面受水口上面（北から）



同 受水口石組み（北から）

図版 29 アカハゲ古墳壇上面土坑・貼石抜き取り穴

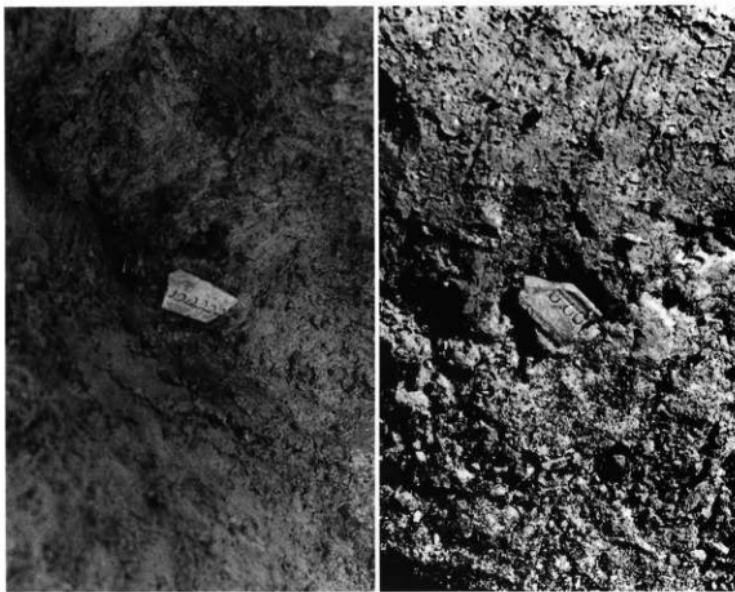


上) 塚上面小土坑 1 (南から) 中) 塚上面小土坑 2 (南から) 下) 墳丘第2段西端上面貼石抜き取り穴 (南から)

図版 30 アカハゲ古墳第1段上面ピット・貼石覆土遺物出土状態



墳丘第1段西コーナー付近ピット（南西から）



墳丘第2段南辺貼石覆土遺物出土状況（南から）



全景（西から）



埴丘第1段西辺下流水跡断面（西から）

図版 32 アカハゲ古墳壇上面流水跡（2）

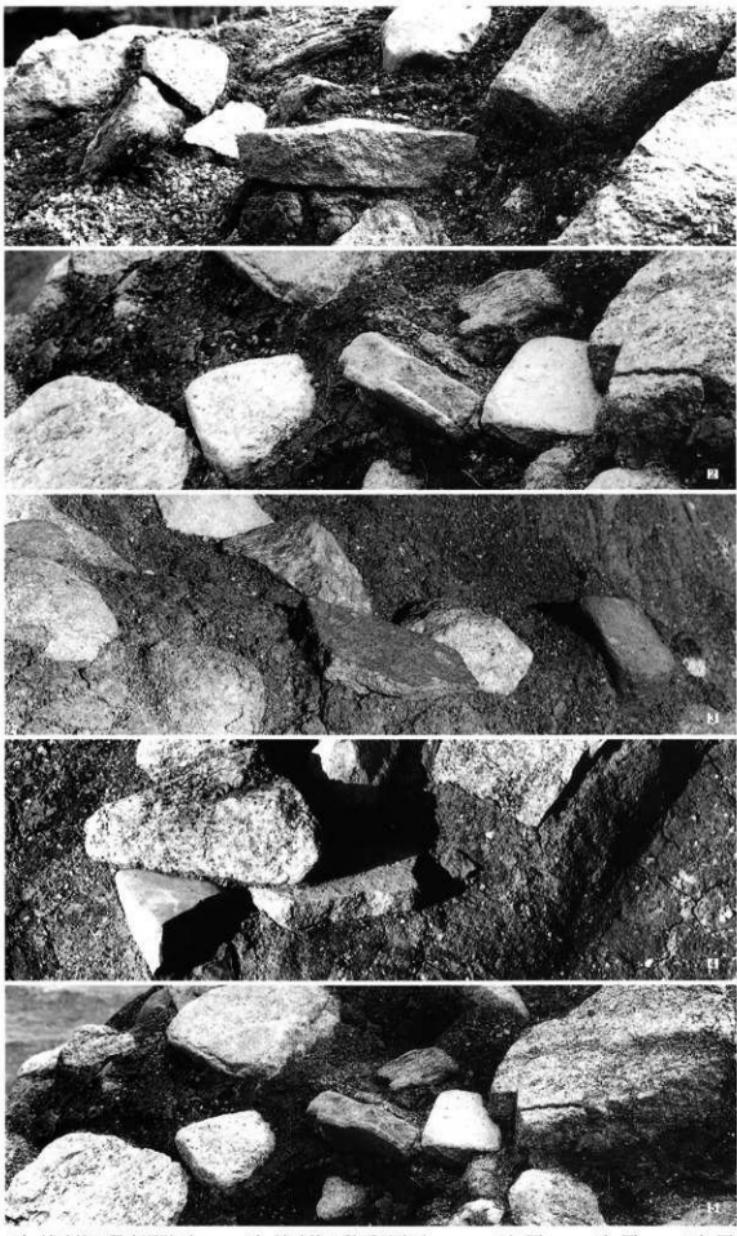


西半部（東から）

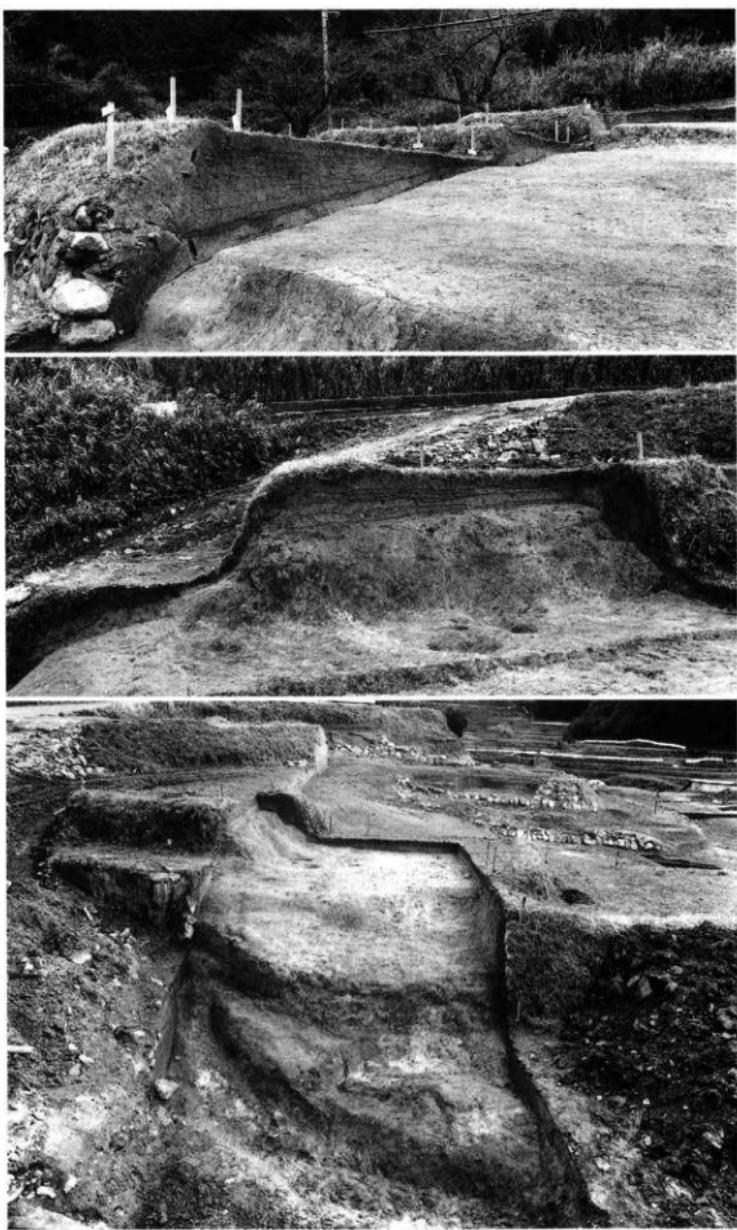


西壁断面流水跡（東から）

図版 33 アカハゲ古墳榛原石出土状況

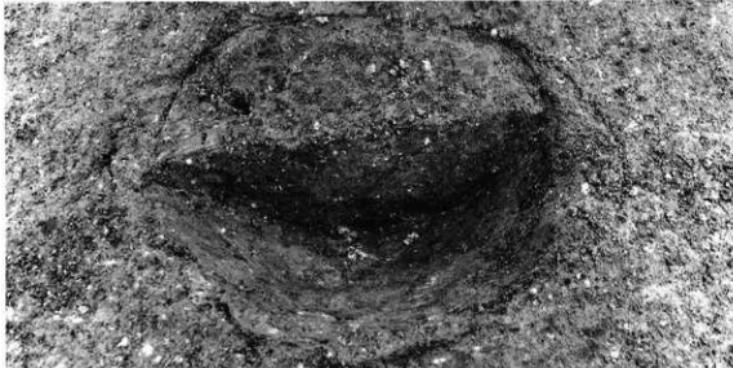
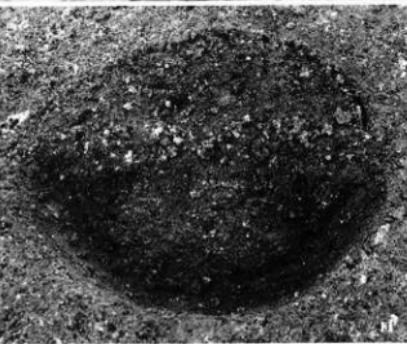


図版 34 第3調査区西端部



上) 西壁北半部南北断面(南東から) 中) 北壁西端部東西断面(南から) 下) 西北尾根傾斜面(西から)

図版 35 第8調査区南トレンチ検出ピット

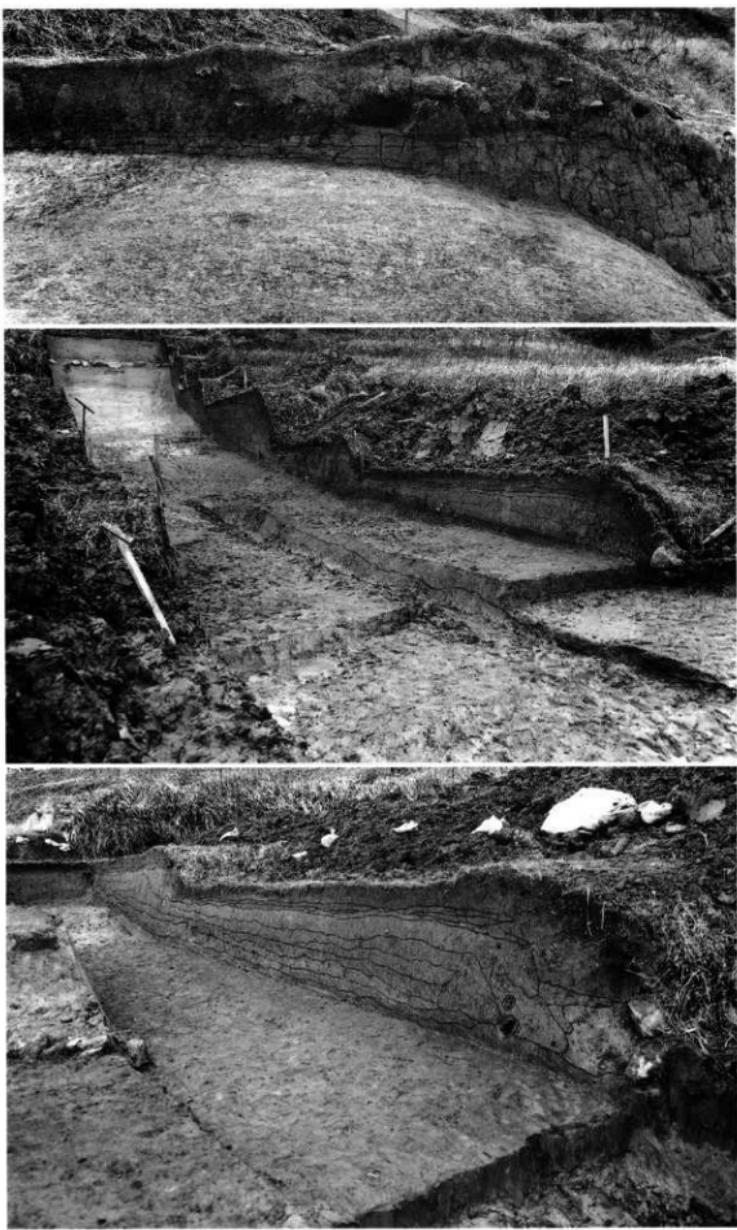


1) ピット 1

2) ピット 4

3) ピット 7

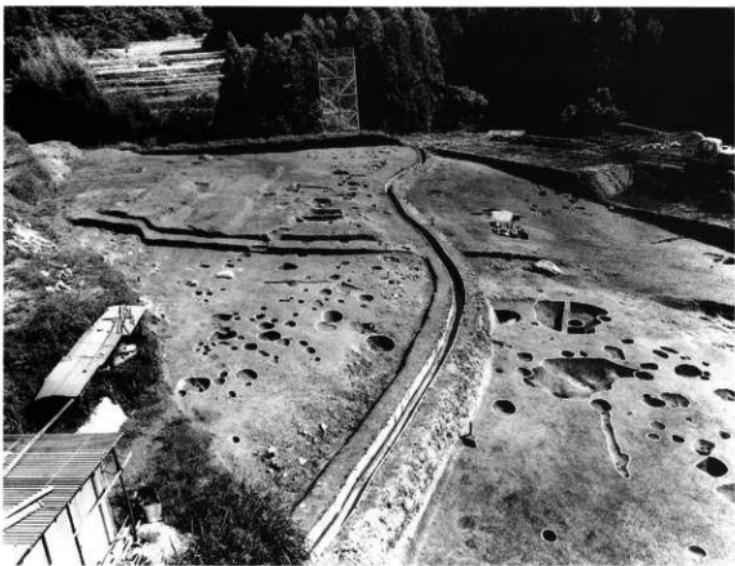
4) ピット 9



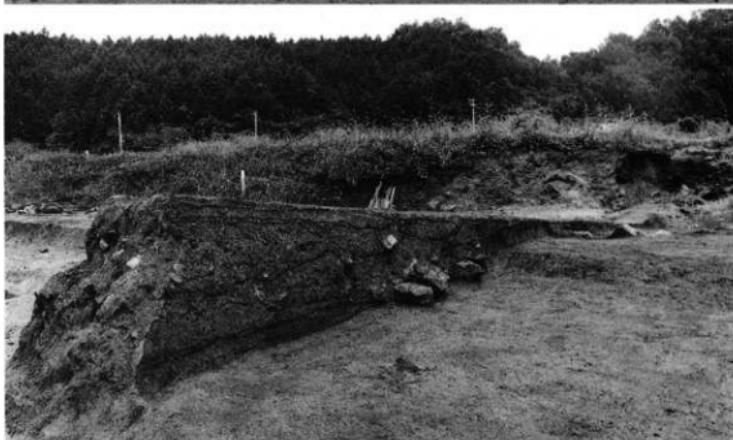
上) 第3調査区東北部尾根傾斜面(南から) 中) 第6調査区全景(南から) 下) 第5調査区全景(南東から)



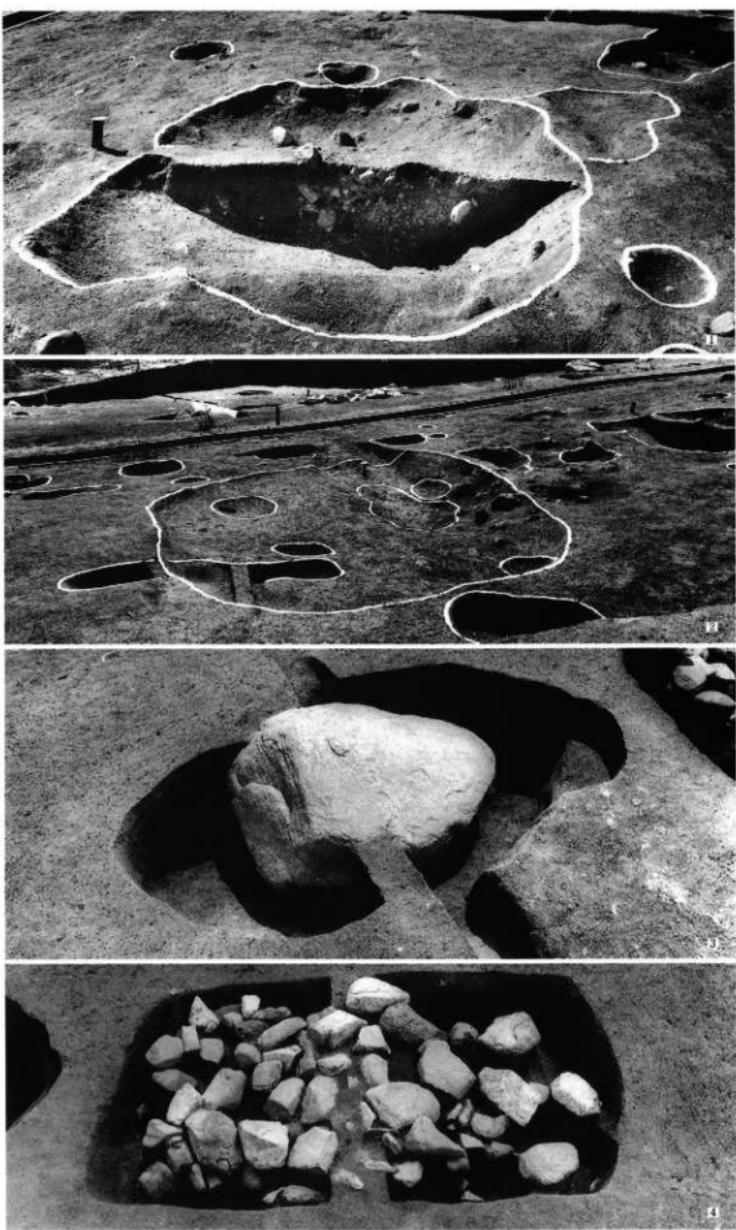
調査区全景（東から）



同（西から）

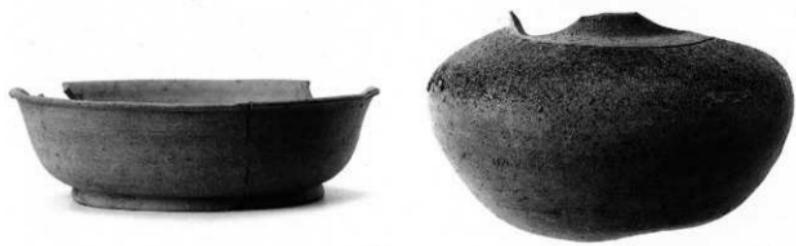


上)中央南北断面北半部(南東から) 中)東側南北断面(南東から) 下)中央南北断面南半部(南東から)



1) 土坑2(東から) 2) 土坑1(北から) 3) 土坑166(北東から) 4) 土坑165(北から)

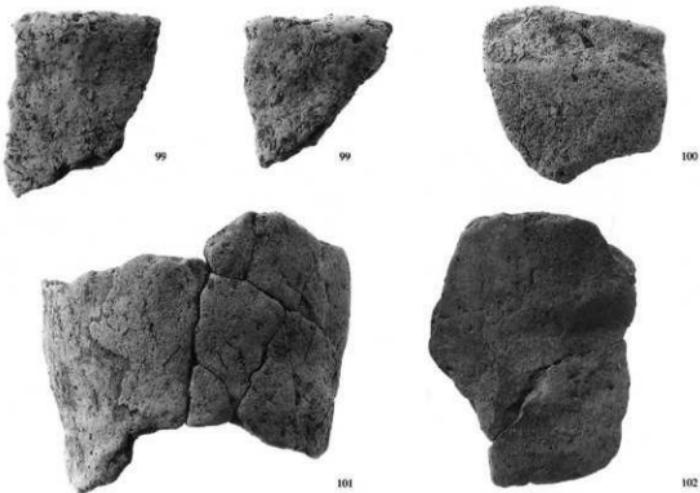
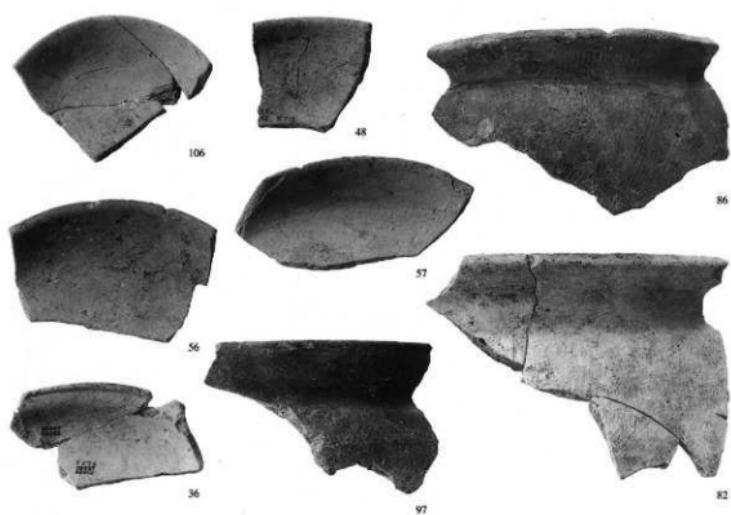
図版40 出土遺物（1）



71

76

図版 41 出土遺物 (2)



圖版 42  
出土遺物（3）



163



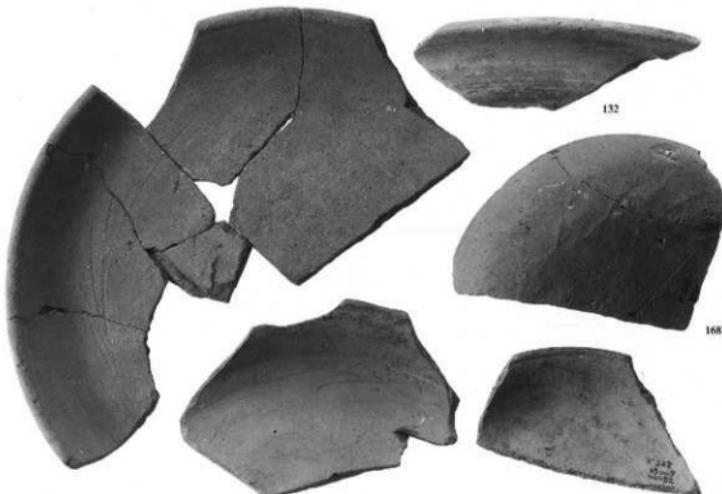
166



256



290



156

115

132

168

112

図版43 出土遺物（4）



243



205



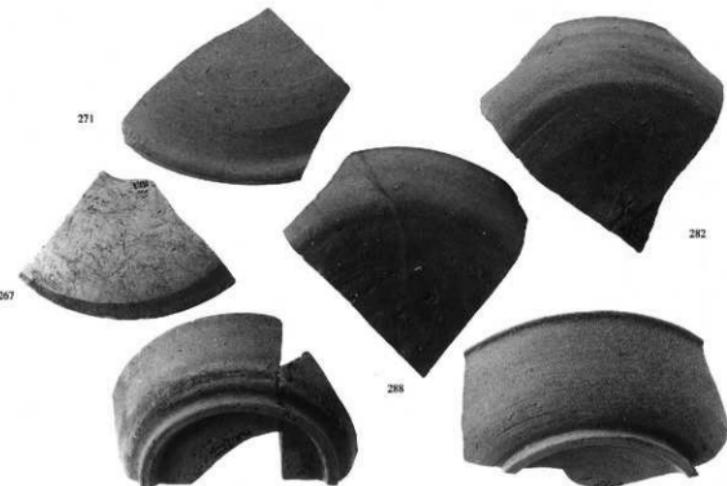
243



240



204



291

288

293



壇での電気探査状況 東から



壇でのレーダ探査状況 西から

## 報告書抄録

ふりがな	かのうこふんぐん・ひらいしこふんぐんはくつちょうさがいよう						
書名	加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・IV						
副書名	中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	桥本哲、庵ノ前智博、奥田尚、置田雅昭						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
かのうこふんぐん・ 加納古墳群・ ひらいしこふんぐん 平石古墳群	みなみかわらぐん 南河内郡 河南町 ひらし 平石	27382	37°24'	34° 29' 22"	135° 39' 15"	2003年8月 ~ 2004年3月	中山間地域 総合整備事業 「南河内 こごせ地区」
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
加納古墳群・ 平石古墳群	古墳 奈良 時代	古墳時代 ~ 奈良時代	・横口式 石槨を主 体部とす る飛鳥時 代の方墳 ・奈良時 代の集落	土師器・ 須恵器・ 漆塗籠棺・ 黄褐色円面鏡・ 榛原石	・7世紀代の横口式石槨を主 体とする大型の方墳		

### 加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・IV

-中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う-

**発 行** 大阪府教育委員会  
 〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目  
 TEL 06-6941-0351  
**発行日** 2005年3月31日  
**印 刷** 株式会社 近畿印刷センター  
 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号  
 TEL 0729-72-5918

